
獣の従者

木乃羅

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

獣の従者

【Nコード】

N6977W

【作者名】

木乃羅

【あらすじ】

箱庭のような村で育った少年・蒼溟^{そうめい}。不思議な村と住人たちによって色々なものから守られ、様々な知識や技術を習得した少年が母親の暴挙により、無理やり旅立たされた。そこは大自然が色濃く残りながら、高度に発達した技術をあわせもつ不思議な世界。そこで出会う人々と不思議な生き物たちとの交流とツツコミ。言葉使いはおいといて、その能力はピカイチな彼が選ぶ道とは？
基本的に主人公は最強のはず？

1 - 1 箱庭の少女少女たち（前書き）

初投稿作品です。

正直、ヒマ潰しの為に作成しているので面白いのかどうかは大変、微妙だと思っています。話の展開も割と遅いうえに、ご都合主義で進めるつもりです。

ちなみに、思いつきの為か主人公がどんな道を選ぶのか不明です（笑）

少しでも、皆様の暇つぶしになれば幸いです。

1 - 1 箱庭の少年少女たち

そこは世界から隔絶^{かくぜつ}された場所だった。

鄙^{ひな}びた農村のような雰^{ふん}囲^い気^きの中で、わずかな住民たちはその全員が普通とは違っていた。

だが、大人たちは一般人と自分たちが異なっていることを知りつつも、この村の中ではそれが普通として子供たちを育てていた。

そう、誰が何と言おうとも。これが彼らにとっての“普通”であるからだ。

早朝というには、まだ早すぎる明け方の時刻。

一人の少年が村の井戸のそばに来ていた。

「ううーん。今日も天気良さそうだなあ。」

呑^の気^きにのびをしながら、井戸の水をくみ上げて顔を洗っていると、落ち着いた雰^{ふん}囲^い気^きの少年が近付いてきた。

「おはよう、蒼^{そう}溟^{めい}。今日の狩りはもう終わったの？」

彼の足もとには、様々な果物と川魚、それに獲物らしきものが置いてあった。

「おはよう、柊^{ひいらぎ}。今日はおしまいだよ。後は、保存するために加工するだけ。」

朗らかに笑いながら少年――蒼^{そう}溟^{めい}は、果物のいくつかを柊に渡す。

「森にアケの実があつたから、芽衣^{めい}ちゃんにあげてよ。」

「妹が喜ぶよ。そういえば、僕が作っていた敷物が出来たから良かったら後で取りにきて。」

貰った果物を大事にハンカチに包んで、近くに置きながら彼も顔を洗いながら言う。

「うん、わかった。柊の敷物は綺麗で丈夫だから、姉さんたちも喜ぶよ。」

荷物を大事に抱えながら、お互いに「また後で。」といって別れた。

「ただいまあ。」

玄関から入らずに、縁側に荷物を置く。そして、リビング奥の台所に向かって大きな声で挨拶をする。

「おかえりなさい。」

奥から一人の少女が顔を出して返事してくれた。長い髪を後ろで一つのお団子にした明るい雰囲気少女だ。

「おはよう、優花姉さん。」

見た目は僕とそんなに変わらないようだが、記憶にある限り幼少時より姿が変わっていない。村のみんなも、実年齢と容姿や言動が一致しない人たちがばかりなので気にしていない。

「おはよう、蒼溟ちゃん。湊兄ちゃん畑にいらっているよ。」

「わかった。捕ってきたものは後で加工するから、保存庫を借りるね。」

僕は果物と川魚を数匹、優花姉さんに渡すと残りを納屋にある特殊な保存庫にしまった。この保存庫はこの村にしか無いものらしく、しまった物は腐ることなく何時出しても、新鮮なままなのだ。

納屋に行くと着物のような和装的な感じを残しつつ、動きやすいようにアレンジされた服装の女性がいた。

「おはよう、光香姉さん。」

「おはよう、蒼溟くん。今日は何を取ってきたの。」

姉さんに捕ってきた物を見せながら、保存庫にしまい。僕は納屋にある鍬くわを持って兄さんの所に走っていった。

「湊兄さんみなと、おはよう。」

柵よりも少し年長に見える少年に向かって元気に挨拶をする。

「おはよう、蒼溟。今日の狩りはもう終わったのかい。」

優しく大らかな笑みで聞いてきた実兄に返事を返しながら、蒼溟は今日の作業内用を聞いて手伝いを開始する。

ウチの畑は面積も数も結構あるが、それを兄さん一人で管理していた。

「この作業が終わったら、爺ちゃんが稽古をするから来るように言っていたよ。」

祖父はこの村の神事を行う神官の仕事をしているのだが、様々な武器を使いこなす不思議な人でもある。村のみんなが束になっても勝てないんじゃないかと思うくらい強い。

「今日は何の武器を使うんだろう。」

村の子供たちは祖父からそれぞれ適した武器で稽古をつけてもらうのだが、何故か僕は色々な武器を教え込まれていた。ちなみに湊兄さんは剣を中心に行っているが、最近は刀と呼ばれる刀身がわずかに反り返った武器を学んでいる。

「剣だったら、俺と試合をしてみようか。」

優しくて滅多なことには動じない自慢の実兄だが、こと稽古に関しては祖父並に厳しい。

「うんっ。その後で柊のところに行ってくるよ。敷物が出来たんだって。」

この村には学校というものが存在しない。その変わり、村の大人たちがそれぞれ得意な事などを子供たちに教えていくのだ。そこに男女や年齢、家の違いなどは関係しない。

「へえ、柊くんが作っていた敷物って確か、結構な大きさと複雑な模様にすると言ってたものかい。」

「そつみただよ。すごいよね、居間に敷くような大きなものをスイスイ作っちゃうんだから。」

素直に感心する僕の姿を湊兄さんは微笑みながら何故か頭をなでてくれた。それから、二人して今日の作業を順当に進めて祖父の元へと向かった。

祖父の住まいは、湊兄さんと姉さんたちが住む家の裏にある。山

の高台に建っている大きな社の社務所が祖父の住まいである。

「おはよう、爺ちゃん。」

境内で掃き掃除をしていた老人に声をかける。白髪 of 皺深い姿でありながら、その足腰は村の誰よりも機敏で力強く、武器を持たせると無双となる。いつか、祖父を負かしてみるのが僕の目標でもある。どれだけ、かかるのか分からないけどね。

「うむ、二人ともおはよう。」

朝というにはすでに昼近くなっているが、村の暗黙の決まりとして挨拶はきちんとする。これを怠ると後ほど、躰あたまと称して厳しい稽古が待っている。

今日は湊兄さんと一緒の刀での稽古だった。結果として、僕は祖父と兄さんの二人に足腰が立たないくらいコテンパンにやられました。まだまだ、だなあ。

「大丈夫かい。柊くん of 所に行く前にお風呂に入ろうか。」

湊兄さんにおんぶされながら、僕は家に辿り着いた。ここで、もう一つ不思議なのがウチのお風呂は他の村の家と違うこと。

家の中のお風呂場へと続くはずの扉を開けると――

「いつ見ても、湊兄さんの家のお風呂って不思議だよなあ。」

そこには、露天風呂のような雰囲気の球体状の空間があった。湊兄さんの家は結構な深さのある池のそばに建っていて、このお風呂場はその池の上に浮かんでいるような感じなのだ。

それなのに、外からはその姿は見えない。

かけ流しのようで三段階くらい高低差がある各浴槽にそれぞれ頂点部の岩からお湯が流れこんでいる。そして、余ったお湯はそのまま岩肌を伝って下へと流れているのだが、どこに流れ出ているのかが見えない。

「まあ、お風呂に関してはちょっとした贅沢ぜいたくをしたからね。」

のれんを潜って、空間という言葉にケンカを売っているのでは？と思うくらいのゆったりした脱衣所で服を脱いで湊兄さんと一緒に

お風呂に入る。

「ふわぁ、気持ちいい。」

温泉効果なのか、疲れてきつた僕の身体がほぐされていくのがよくわかる。

「これも飲んでゆつくり身体を癒しなさい。」

湊兄さんからスポーツドリンクを貰う。

「本当は浴槽で飲み物を取るのは、あまりよくないと思うけどね。」

苦笑しながらも僕につきあってドリンクを飲む二人。

「そう言えば、いつも不思議に思うけど。湊兄さんは姉さんたちと結婚しないの？」

僕の言葉に兄さんは噴き出した。

「・・・・・・・・・・。」

そのまま、無言になる。

あれえ？聞いちゃいけなかったのかな。でもね、姉さんたちが湊兄さんの婚約者で、お互いに両想いらしい……というのは村の誰もが承知している事実でもある。

兄さん一人に複数のお嫁さん、というのも特殊と言えばそうだけど、それ以上にこの村事態が“一般的”というものから隔絶しているのだから別に不思議ではないと思う。

「湊兄さん？」

真っ赤な顔のまま兄さんがゆつくりと湯船に沈んでいった。

「という事があったんだ。」

僕はあの後、湊兄さんを救い出して優花姉さんに介護を任した。そのまま、着替えて柵のところに来て、さきほどの話を話していた。

「まあ、そういった事柄は本人同士に任せた方がいいと思うよ。」

苦笑気味に答える柵に首を傾げる。そのまま、この会話は終わり。

というように柊は完成した敷物を広げて見せてくれた。

「うわあー！？さすがだねえ。」

敷物には細やかな模様と色彩、全体的に落ち着いた感じがするものだった。僕の言葉に面映ゆい感じで微笑む柊に、万面の笑みで絶賛する。

和やかに談笑していると、部屋の扉から小さな少女が顔を出していた。

「こんにちは、芽衣ちゃん。」

蒼溟が微笑むと恥ずかしそうに表情を赤らめながら少女は丁寧に挨拶を返す。そして、その後ろから兄妹の母親がお茶を持って現れた。

「こんにちは、蒼溟ちゃん。今朝はアケの実をありがとうね。」

ちよつとふつくらとした体系の母親は笑うととても魅力的で蒼溟は柄にもなく赤くなりつつ、返答する。

そのまま、四人で楽しく雑談をするが夕飯の準備をするという母親に連れられて芽衣も部屋から出ていった。

「そう言えば、蒼溟は今後どうするんだい。」

とうとうな柊の言葉にきょとんとしてしまった。

「今後つて、何の事？」

きょとんとした表情の蒼溟を見て、僕はこの質問が唐突過ぎたな…と反省する。

「君の両親は、確か街に住んでいるだろう。もし、街の学校に行きたいなら、そろそろ準備をしないと間に合わないんじゃないかと思つてね。」

自分が微妙な微笑みをしているのを自覚しながら蒼溟に言う。本音で言えば、彼には村を出て行って欲しくはない。

「うーん。でも、僕がこの村に来て随分経つけど…父さんや母さんからは何も言われていないから…このままでも、いいんじゃないかなあ。」

少し考えながら答えた蒼溟に内心ほっとした。

蒼溟がこの村に来たのは3歳か4歳くらいの頃だったと思う。当時6歳だった僕はこの時すでに天狗てんぐになっていた。

この村の住人が一般的から逸脱いつだつした“普通”とは違うらしいことを何となく理解していたからだ。だからと言って、それが何の自慢になるのかまでは理解していなかったが、ただ何となく“普通”とは違うことが特別な何かのように感じて。自分がまるで物語のヒーローのように思えたのだ。

「ふう〜ん、街から来たんだ。」

初めて会った蒼溟に僕は高慢キチに言ったのをよく覚えている。今から思うと何とも恥ずかしいセリフだったが、自戒じかいの意味を込めて忘れないようにしている。

「うん、宜しくお願いします。え〜と、柊ひなお兄ちゃん！」

そんな僕の様子に気を悪くするどころか、万面の笑みでお兄ちゃんと呼んだ蒼溟。きつと、親から教えられた挨拶を思い出しながらのちよつとたどたどしい様子だった。

村に生まれて育った子供たちと違って、街から来たばかりの蒼溟は何事にも劣っていた。まず、子供同士の遊びについてこれなかったのだ。

歳の差というのもあったと思うが、体力差がまず大きかった。そんな、足手まといな蒼溟に僕はちよつとしたイラつきと優越感を味わっていた。

「蒼溟、早くしないと置いて行くぞ。」

そう言っでは、彼を困らせようとするのだが。あの当時から蒼溟は泣いたりぐずったりすることはなかった。

その時々で、彼に出来る精一杯で僕らについて来ようとしていた。「ごめんね。必ず追いかけるから先にいってて。」

そう言われて、一度だけ置いて行ったことがあった。その時のことは今でも後悔している。何故なら、蒼溟はその後しばらく行方不明になったからだ。

村のすぐ近くの森の中で虫取りをしていた僕らは、遊びに夢中になりすぎて蒼溟のことをすっかり忘れていたのだ。気付いた時には、彼の姿は一切見えなかった。

諦めて村に帰った――その考えは思いつかなかった。

彼は幼いながらも自分で言ったことは必ず果たそうとするからだ。その蒼溟が「必ず追いかける」と言った限りは体力が尽きるまで僕らの後を追いかけるはず。

いつもなら、蒼溟が追いつけるように一定の距離を保つように注意しているのだが、今回はそれすらも忘れてしまった。きっと、彼は一所懸命に僕らを探しているはず。

僕らは慌てて来た道を戻り始めた。その途中で蒼溟の姿を探すことも忘れずに。

その日の夕方になっても蒼溟の姿は見つからなかった。

村に辿り着いても彼の姿は無く、村の大人たちに事情を話して探してもらっても彼の姿どころか足取りすら見つけることができなかった。

深い後悔と軽率な自分に自暴自棄になりそうになったとき、彼の実兄である湊兄さんが心配しなくても大丈夫と言ってくれた。その言葉に思わず噛み付きそうになった。

だって、蒼溟は…僕たちよりも体力がないのに、暗くなっていく森の中で一人ぼっちなんだと思うと、心配で、そして置き去りにした自分を殴ってやりたくなった。

泣きたくても泣けずに、震えながら嗚咽をこらえる僕らの姿に大人たちは見守るだけにしてくれていた。そうしている間に、長老の一人に手をひかれながら蒼溟があらわれた。

その姿を見た瞬間、僕らは彼のもとに走り寄って泣きながら謝り

つづけた。本当に無事でよかったと、そして置き去りに、仲間外れにして「ごめんなさい」と心から謝った。

後で知った事なのだが、蒼溟は体力の面以外ではすでに僕ら以上だったらしい。

森で置き去りになった蒼溟は近くの大樹の根元でシダの葉などを使って隠れた後、少し眠り体力を回復。その後は、食べれる果物を摂取して僕らの姿を探していたそうだった。

暗くなり始めると湊兄さんから貰っていた迷子用の道具を使って居場所を知らせていたようで、長老がそこまで迎えに行つたそうだった。自分よりも2歳近く年下の少年の冷静な行動に、僕の天狗な思いはすぐに砕け散った。それ以降は、彼の親友になれるように、彼と共に歩める者になれるように、頑張ることにしたんだ。今もその気持ちに変わりはない。

湊兄みなとさんの家に帰って、皆で夕飯を食べた後は就寝時間まで僕は茅姉ちがやさんに勉強を教えてもらう。

茅姉ちがやさんはこの村の中でも一番、実年齢と容姿が一致しない人だ。いや、言動も一致しない人でもある。

昔、僕が森で迷子になった時に迎えに来てくれた茨婆いばちゃんよりも年上なのに、何故か「ちゃん」付けで呼ばせるのが好きな人で、湊兄さんはもちろんのこと。柊ひいひぎの妹の芽衣めいちゃんにも「茅ちゃん」と呼ばせている。

「さて、今日は復習もかねて薬草づくりをしておうかね。」

ちなみに、好奇心も旺盛おうせいで何かと色々な実験を僕や湊兄さん、姉さんたちにする。その実験を無茶苦茶にってしまう姉さんもいるのだが、普段はお仕事で家にいないから安心でもある。

「何の薬草をつくるの？」

一言に薬草といっても用途や製法によって様々で、文字通り「薬にも毒にも成りえる」ので結構取扱いに注意が必要だ。

「そうだねえ。まずは、準備しといったものを判別して、そこから出来る薬を作ってみな。」

そう言つて、茅姉さんの研究室に入るとそこは異次元な空間だった。一度、詳しい説明と知識を教えてもらったが…まあ、要約すると…ものすごい量のエネルギーで空間を湾曲わんきよくさせて、その歪みを利用して任意の空間を存在、固定しているそうだ。これは村の子供たちにも秘密なのだそうだ。

「……量がもの凄く多いと思うんだけど。」

茅姉さんが指し示す、その準備した物は大きな六畳分くらいの机に隙間なくならべてあった。知識として教えられた中で、とっても貴重な物も当然のように置いてあるのにはさすがにびっくりする。

「まあ、やるだけやってみなさい。ちなみに、実験は自分の体で試すように。」

にやりと楽しそうで人の悪い笑みを浮かべる茅姉さん。うゝむ、人で試す訳にもいかないから仕方がないかあ。仮に毒にあたっても姉さんの医療技術なら問題もないし…。

諦めあきらのため息をしつつ、僕はいつも通り真剣に取り組むのだった。

こんな何気なにげない。僕らにとっての日常をこれからもずっと続くんだと、僕たちは信じて疑わなかった。それが、根拠のない思いだったと気づかないまま。

1 - 1 箱庭の少年少女たち（後書き）

すでにドコなのか分からないようにしてあります（笑）

1 - 2 旅立ちは突然に（前書き）

事前に作成していたものを一気に掲載してみます。

1 - 2 旅立ち我突然に

いつものように、朝の狩りを終えて井戸で顔を洗っていると、途中から柊も来て軽く雑談をしていた。

「おい、その小僧二人。」

口悪く近付いてきたのは、村で大工のようなことをしている人だった。

「「おはようございます。」」

柊と二人で挨拶をすると、黒々とした顎ひげを生やしたオッサンは軽く返してくる。

「おう、おはようさん。悪いがふたりとも、今日は俺の仕事を手伝ってくれないか。」

この村では自給自足を原則としている。さすがに電化製品などは大人たちが村の外で買い付けてくるようだが、修理などは自分たちで行っている。

「オヤツサンの仕事というと・・・大工仕事の方？」

村の家屋や道路整備まで自分達で行う大人たち。さすがに、人手が欲しい時などは村の住人が協力している。簡単な仕事であれば、子供たちも普通に借り出されるのだ。

「ああ。海の所なんだが、昨日の晩にオヤジさんが帰ってきたらしくてなあ。奥さんと派手にやらかしたらしいんだわ。」

海という人は、柊よりも年上で子供たちの中でも年長者組に入る。その両親は、仲が良いのか悪いのか・・・よく派手に夫婦ゲンカをしては、物を破損している。

余談だが、一番物を壊すのは湊兄さんのところ。姉さんたちのケンカとも言えない、じゃれ合いで壊されていくのだ。その規模は... 思い出したくないくらい。

「分かりました。この後、すぐにですか。」

柊が聞くと、出来ればすぐに来てくれるとありがたい...との言葉

が返ってきた。

「おう、二人とも久し振りいゝ。元気してかあ。」

柊と二人で現場に行くと、家の住人である海兄かいさんが出迎えてくれた。

「海兄さん、お久し振りです。」

村の住人が顔見知りのため、子供たちは血のつながりの関係無しで兄弟のような呼び方をする。

「ああ、なんか兄さんと呼ばれると村に帰って来たって感じがするなあ。」

柊の挨拶に、しみじみと語る海兄さん。実は、一年くらい行方知れずになっていたのだ。

「今まで、何をしていたの？」

僕の質問に、海兄さんはニヤリと笑って近くの木を指さして答えた。

「あそこで、す巻きになっっている親父のところに行ってた。」

そこには昨晚の夫婦ゲンカの結果らしき姿の親父さんがいた。

「……さすが、村の男だなあ。簀巻きにされて木に吊つるされているのに、割と平気な顔で寝ているよ。」

「なんでえ、家の支柱をへし折ったと聞いたから、もっと凄惨せいさんなのを想像していたのに。吊るされただけかよあ。……つまらん。」

大工道具を持ったオッサンの残念そうなセリフに、海兄さんは平然と返したのが。

「いんやあゝ。結構、ド派手にさば折りとかされていたけど、村の子供たちの教育上悪いからという事で、今朝早くに茅ちがやちゃんちゃんが直しに来てくれた。」

ん？……直す。治療したというなら「治す」の方では？

「ああ、おツムの方は治療しようがないからなあ。身体だけ、直し

た・・・という事か。」

さも納得した…とうなずく二人の姿に、親父さんがちょっと気の毒に思えてきた。

「おはようございます。皆さん、朝早くからお手数をかけてすみません。」

家の中から海兄さんの母親が挨拶に来た。確か、年の離れた姉が街に住んでいると聞いたことがあるが・・・二人の子持ちとはとても思えないほど若々しい容貌の女性だ。

「なあゝに、いつものことさ。気にすることない、海坊やもいることだ。」

当然のように、作業人数に組み込まれる海兄さん。本人も肩をすくめながら、作業を始めた。

支柱も新しいのに取り換え、ついでに家屋の修繕もこなした僕らは作業終了と共に海兄さんと雑談していた。

「ところで、二人とも将来は街に出て行くのか？」

お茶をガブ飲みしていた海兄さんが口元を乱暴に拭きながら聞いてきた。

「僕は特に考えていなかったけど。街って、森がないんだよねえ？・・・狩猟が出来ないなら、このまま村にいたいかなあ。」

蒼溟の言葉に、僕は思わず納得してしまった。狩りは、蒼溟にとつて修行の一環であり趣味であり、遊びながら学ぶ場としての意味もあるからだ。

「柊はどうするの？」

僕は少し考えながら、答える。

「・・・僕も出来れば村に居たいな。街の手芸や服飾関係にも興味はあるけど、人がたくさんいる所って何か落ち着かなさそうに思えるから。」

僕らの答えに苦笑した海兄さん。

「まあ、なんだ。一度は村の外に出て見た方がよさそうだなあ。」
見もしないで、それを否定するのは間違っているとは思うけど。
この村は居心地が良いから、見知らぬ街へ行くよりも魅力的に思えるのも仕方がないと思う。

「まっ、実際にその時になれば意見も変わるかなあ。俺みたいに半強制的っていう場合もあるからなあ。」

そういえば、海兄さんは気づいたらいなくなっていた。

子供である僕らが不思議に思ってた兄さんの母親に聞いたら「・・・多分、大丈夫でしょう。打たれ強い子だから。」と言って放置していたな。

「海兄さんは、街に行つて楽しかった？」

無邪気に蒼溟そうめいが聞くと、人の悪そうな顔で海兄さんが耳打ちしてきた。

「・・・ここだけの話だが。街に行けば、綺麗なお姉さま方とお知り合いになれるぞ。」

耳打ちされた内容に呆れてしまった。もっと、他に言うことはないので。

「？知り合つて、どうするの？」

きょとんとした表情の蒼溟に、海兄さんと二人して驚いてしまった。

「えっ、なに？本気で言ってるのか、蒼溟？」

時折、幼い反応をするとは思っていたけど。それとも、ただ単に鈍感なだけなのかな？

「・・・そうか・・・仕方がない。そんな蒼溟に俺の大事なコレクションの一部をさずけてあげよう。」

海兄さんは、どこに持っていたのか一冊の雑誌を手に入っていた。

そこには「R18」の文字が書かれていて・・・。

無言で蒼溟の目をおおい隠すと同時に、海兄さんの母親がいつの間にか背後に立ち。

「ぐがあ！！？」

切れ味も鋭そうな踵落^{かかと}としが、海兄さんの脳天に決まった。

「まったく、この子はどこから持ち込んだのかしら。」

雑誌を回収して戻っていく母親の姿を涙目で見送る海兄さん。まあ、当然ですよ。

結局、海兄さんが何をさすけようとしたのか分からないまま。僕は柵に連れられて、その場を後にした。

「そつえば、村を出るって長老の許可がないといけないのかなあ。」

海兄さんは、将来って言っていたが何を区切りに言ったのかさっぱりわからない。

そもそも、この村では自力で抜け出すのがほぼ不可能なのだ。

「多分、成人の儀式をへれば自然と行かせてくれるのではないかな？」

柵^{ひごう}の答えにちよつと納得。

「それに、無断で抜け出そうにもどこから行けばよいのか……。」「苦笑する柵にさらにうなずいてしまう。

実は、森で自由に狩猟できるようになって試したことがある。この村はどこにあつて、どこまでが行っていい場所なのか。

保存食と野営用の準備をして森をひたすら進んでみたり、村の街道をひたすら歩いてみたり、色々とした結果……。どこにも行けませんでした。

「不思議だよねえ。森はどこまでも森だったし、街道はいつの間にか村に戻るし、山の頂上からながめようとすると霧^{きり}が出る。」

今までのことを思い出しながら、あらためて不思議な村だと思う。「まあ、そのおかげで危険な犯罪とか起こらないと思うと感謝しないだね。」

苦笑しながら柊がさらに続けた言葉が、僕にはとっても印象に残った。

「それに、知らないということは知る喜びがあるということだから。僕らが大人になってもまだまだ楽しいことはたくさん存在するいい証拠だと思うよ。」

その日の夜。

いつの間にかまどろんでいた僕は、久し振りの母親の声を聞いていた。

——いいのかい、こんなに突然で。後悔はしないかい。

——ええ、かまいません。男の子はいつか旅立つものですから。

——ふむ、本人の意思は一切関与していない旅立ちだがね。

——あら、人生はそんなものですわ。自らで選ぶ取るなんてほんのわずかなものだけです。

——まあ、いいさ。結局は避けられない旅立ちなのだしねえ。

——大丈夫ですよ。皆さんに可愛がられたのは伊達^{だて}ではありませんせんから。

——じゃあ、いくよ。

——がんばりなさい、蒼^{そうめい}溟。

そんな、誰かとの会話を聞きながら僕は深い眠りへと導かれた。

ねえ、母さん。

そのあまりにも、一方的な言い分にさすがの僕も反論したいのですが・・・。

そして、父さんからの言葉は無いの？

ある意味、村の中での女尊男卑な風習をかい間見たような気分だった。

1 - 2 旅立ちは突然に（後書き）

母親の暴挙が好きです！

1 - 3 ここは何処でしょう

明け方近くの冷え込みと今まで感じたことの無い気配に気付いて目覚めた。

「・・・・・・・・・・。」

「みよ？」

ああむけに寝ていたらしい自分の顔の横に、なにやら薄青色の球体があった。

「・・・・浮いている？」

落書きのようなつぶらな瞳でこちらをながめながら、どこから出しているのか分からない鳴き声らしき音。背後？には蜻蛉とんぼのような4枚の羽。

「みゆう？」

「えつと・・・・・・・・ここはドコでしょうか？」

あえて声を出して混乱するのを防止しながら、ゆっくりと上体を起こして周りを見回す。

「真っ暗・・・・・・・・室内なのか？」

ひんやりとした空氣にほとんど動きは無く。謎の球体生物？のぼんやりとした明かりだけが光源だった。

「・・・・生き物なのかなあ？」

敵意や害意らしきものを感じないので、ゆっくりと手を伸ばしてみると以外に大きいことが分かった。バスケットボールくらいの大さきの不思議な球体。鳴き声らしき音を聞かなければ、誰かがイタズラで置いた玩具おもちゃにしか見えない。

「おおっ！ 以外な弾力とスベスベした手触りが気持ちいいかも♪」
力を入れすぎないように優しく抱え上げると、重さも感じなくてこの球体生物が自力で浮かんでいることがよく分かった。よく見ると、ゼリーのような透明感と着色なのに何故かうっすらと発光している。

「さて、とりあえずはここから出なきゃ。」

ボールを胸に抱えるようにして立ち上がり、空間の広さを把握するために動こうとした時に、謎の球体生物が何かを呼ぶように鳴き始めた。

「みゅ、ミユ——ン！……みよ？……みゅん」

「なにと交信こうしんをしているのかなあ？」

特に悪い予感みたいなものもなかったので、球体生物を顔の前にかかげて聞いてみる。

「みよ〜ん。」

目が・・・> <な形になって、ちよつと得意げな様子で返事をしてくれる。だが、さっぱり意志の疎通そつうは出来ないわけで、どうしようかねえ。

「？……あれ？」

ふと気付くと周りがちよつと明るくなってきたように思えて、球体生物を顔の前からどかしてみた。

「えッ！？……なにごと。」

そこには、徐々に数を増やしていく球体生物の群れがいた。それぞれ、多種多様な色彩で発光していて幻想的で綺麗なのだが。その数が、無制限に増えていつているように見えて、安心できない状態だ。

「みゅ、みゅつみゅつ。ミヤ——ン！！」

手に持っていた薄青色の球体生物が、他の個体に命令をしたらしく。

「ええッ！？？……合体した。……巨大なスライムもどきがあらわれた。」

一体の巨大な球体になった。その姿に思わず、某ゲームキャラの登場を真似てしまうほどに混乱してしまった。

「なに、戦うの？……え、どうしろと。」

混乱して、合体に参加していない手元の薄青色の球体に問いかけしてしまう。僕の混乱ぶりに満足気な雰囲気ふんいきの球体は、巨大球体に声

をかけた。

「なにになに？どうするの？」

巨大球体は大きく口？を開けたかと思うと僕と薄青色の球体を丸呑みして、飛び跳ねていった。

な、なんでえ——！！？・・・そして、どうして呼吸できるのお。

その後、僕は深い森の中に居ました。手元には、あの薄青色の球体生物と共に。

巨大な球体は、遺跡？の地下を抜け出すと僕らを吐き出し。バラバラに散って、どこかに行ってしまった。

「・・・。。。。ああ、えつと助けてくれて？・・・ありがとう。」

多分、僕があそこから出たいと思ったから手伝ってくれた・・・と思います。手元の球体生物にお礼を言つと、嬉しそうな鳴き声で答えてくれた。

「みゅん」

なんとなく、どういたしまして。と言っているように聞こえるのだけど・・・気のせい？

いつまでも手に持っていてはいけないと思って、薄青色の球体生物をはなす。

「みゅ、みゅ。。。ミヨッ！！」

再び変な鳴き声をしたかと思うと。

「なっ！？分裂したッ！！」

同じ色の球体生物が二つ。若干、大きさがちぎんだのは二つにわかれたからか？

バスケットボールからハンドボールくらいの大きさになった薄青色の球体生物たち。お互いに別れをつけて一つは僕の肩に。もう一つは、他の球体生物たちのようにどこかへと消えて行ってしまった。

「え〜と、君は僕について来てくれるの？」

僕の問いに目を再び、><な形にして上下に移動した。どうやら、うなずいている様子なのだが・・・ボールが回転しているくらいにしか見えない。

僕に同行してくれる薄青色の球体生物に、便宜上として「アオ」と名前を付けてみた。特に嫌がるそぶりもみせないし、呼ぶところちに反応してくれるので、理解してくれているらしい。

「おつ。この実は大丈夫そうだな。」

僕は水の気配がする方向に歩きながら、食べても大丈夫そうなものをついでに探していたった。入れ物は、つる草や大きな葉っぱなどを利用して簡易の編みカゴを作ってみた。

「みゆ、みゆみゆ。」

すこし先を行っていたアオが鳴いて僕を呼んでいるようだった。

「アオ、何か見つけたの？」

そばによって見ると、木々の間から水面が見えた。

「水だ。飲めるくらいにきれいだといんだけどなあ。」

僕とアオは急ぐでもなく、ゆっくりとした足取りで水辺へと歩いていく。

「みゆ——ん。」

嬉しそうな声でアオが泉のなかへと飛び込んでいった。

幸いにもそんなに大きくない、湧水で出来た泉は小魚と小川があるところだった。

「うん、これなら飲み水としても大丈夫そうだ。」

一口飲んでそう判断すると、ここで野営するための準備を始めることにした。

「不思議なところだよなあ。」

全然、身に覚えのない森にも関わらず僕の知っている植物や薬草などが生えていた。それも茅姉^{ちがや}さんから教わったものなどだ。

「まるで、いま必要な知識を事前に教えられていたみたい……。」

「

なんとなく、あの村の住人であり、その中でもさらに不思議な茅姉^{ちがや}さんならありえそうだと思ってしまった。

「……さすがに無いよねえ。……無いよな？」

ちよつと、不安になってしまった。

「みゆ？」

アオが不思議そうにこちらを見ていた。

辺りが夕闇へと包まれるなか、泉の近くにあった比較的あけた場所^{アオ}で火をおこした。そして、採ってきた木の実などを食べて僕はこれからどうするのか、ちよつと考えた。

「これから、どうしようか。」

最初にいた遺跡らしき所を調べるにしても、ほとんど崩れて下草におおわれていた。自分自身があの地下から出たから分かったくらいで、見た目では他の荒地となんら変わらない。

「それに、地下から出た。といっても、アオたちのおかげで出れた感じだったしなあ。」

そう、アオの仲間がその身体の中に入れてくれたおかげなのか、障害物となる岩壁や地面をすり抜けて僕は出てきたのだ。あの場所に帰ろうと思ったら、地面を掘り返さなくてはいけないのだが、結構大変そうだったと思う。

「途中で大きな岩盤とかもすり抜けていたからなあ。」

僕はため息を吐きながら、なんとなくアオを抱きかかえてみた。スベスベの手触りでちよつとヒンヤリするが、火にあてられたのか

少し温もりがあった。

「なんにしても、食糧とか水を確保したら。今度はここをベースに、この辺りを散策するしかないかな。」

武器になりそうなものも作っておきたい。どんな危険な猛獣がいるのか、それすらも分からないのだから。

「とりあえず、今日はもう寝ようっと。」

寝ている間に火が消えないように工夫をほどこした後、アオを近くの岩の上に放して僕は腕を枕に寝ることにした。

その頭上では、木々の葉の間から満天の星空が輝いていた。

1・3 ここは何処でしょう(後書き)

主人公の名前が一度も出てきていない・・・。

1 - 4 しやべる獣との遭遇

日の出まへの朝靄あさぐさの中。小さな草食動物が巣穴からはい出し、食べものを探しに森の下草の中を警戒しながらも進んでいく。

小鳥の鳴き声を聞きながら、木の上から一対の瞳が下を通り過ぎようとする草食動物をじっと狙いつづける。

「ピッピッ。チィチィッ。」

小鳥の警戒する鳴き声よりも少し早く。木の上から一気に獲物である草食動物に襲いかかる黒い影。

「よっし。」

捕らえた獲物を片手に一人の少年が下草からあらわれた。もう一方の手には、枝の先に鋭く尖らせた石をつた草でしばったお手製の武器を持っていた。

「後は、あつちに隠しておいた木の実とかも持っていけないと。」

お手製の編みカゴと、どこかで捕まえた魚をつる草で作った縄で連ねたものを手にベースとしている泉へと戻って行った。

「みよ？みゆみゅーん。」

泉の上をフヨフヨと漂っていた薄青色の球体生物が少年――蒼溟そうめいに気付いた。

「ただいまあ、アオ。」

おかえりなさい。と言わんばかりの鳴き声に答えて蒼溟は手にした獲物を保存食にするべく、加工作業の準備に取り掛かった。

「アオとこの泉に来て、五日目かあ。」

この五日間で分かったことは、この泉の周辺には危険な猛獣の類はいないらしいこと。それと、薄青色の球体生物であるアオに食べ物と睡眠が必要ないらしいこと。

「時折、泉や森の中を漂うのは何かを摂取するためなのだろうか？」
木々がそれらが必要としないかわりに、日の光や水を欲するよう

に。この球体生物も人や動物とは違ったものを摂取しているのかも
しれない。

「でも、その背中？にあるトンボの羽みたいなのは必要なのかな？」
目？らしき点の反対側にある四枚羽はよく見ると、球体の表面か
ら生えているわけではなかった。数ミリの隙間があつて触ることも
できるのだが、それまた不思議な構造でもある。

「みよ……ん。」

そんなことは知らないよおん。と言わんばかりの間の抜けた鳴
き声を発しながらアオは再び、泉の水面上を漂い始めた。

「まあ、いつか。本人に聞いたところで分かるはずもないからな。」
僕だつて、自分の身体に手足がついていることに対して説明しろ。
と言われても答えようがないしなあ。

森で採取してきた材料を巧みに加工したりしながら、蒼溟は保存
食にするため燻製くんせいの準備や石包丁で獲物をさばいていった。

夕暮れに包まれる森の泉のほとりで、火を囲みながら蒼溟はアオ
に話しかける。

「保存食もある程度は集まったかな。そろそろ、移動をしようか。」
虫よけと獣よけのために調合した香草を火にくべて、竹によく似
た節のある植物で作ったコップに沸かしたお湯とすりつぶした木の
実を混ぜた飲み物をアオにもあげて一緒に飲む。

「それにしても、僕の生まれ育った村も不思議なところだったけど。
この森も不思議なところだよなあ。」

自然に繁殖した森では、人など普通に暮らせない。何故なら、人
の肌などは森の動物たちのように自然に適していないうえに地肌を
さらしているのだから。

「猛毒のへびなどにかまれても、毒草などを食べることはもちろん、
接触しただけでも危険な植物とかもあれば、小さな切り傷からでも

人は死因になる場合があるからなあ。」

それらに対して様々な対処方法を考案したり使用したりするのが人という生き物だ。でも、だからこそ人は集団で生活することを前提とする。仮に誰か一人がケガを負っても、他の誰かがその治療のために対処する。時には、あらたな薬草の実験となったりして様々な有効な対処方法を模索していくのだ。

「それなのに、この森はまるで誰かが管理しているみたいにきれいだ。」

木々が密集して発育が悪くならないように、適度な空間が開けられている。それに、大きな木によって日光が遮られないように所々、伐採されているようにもみえる。

「下草も無尽蔵に生えているわけでもなく。よくよく見ると何かの統一性をもって整えられているように見えるからなあ。」

日差しが地面へと届くのなら、つる草や低木などが大木の間に密集しそうなのだが。それらも整然とした感じなのだ。地面にはコケ植物もむき出しの土もほどよくさらされている。

「どこかの国の自然保護区域と言われても納得できるくらいなのに、人影もそれらしい気配も感じない。それとも、僕が気付かないだけなのだろうか？」

村でそれなりに技術などを習得したと思っていたが、タメ息を一つ。

「結局は井戸の中のカワズ…かなあ。大海を知らず、世界を知らず…まだまだ未熟者つてことかあ。」

木々の間から見える空を見上げながら、ああむけに倒れこむ。

「…柊（けい）、村の外は学んだ以上に不思議がいっぱいだよ。」

帰る方法も見つからない住み慣れた村にいるはずの親友の姿を思い浮かべながら、蒼溟は思索にふけりながら、その内に眠っていた。

いつものように、日の出まえに起床した少年はこり固まった身体をほぐすように、軽く柔軟などをする。

「さてと、考えたところで答えなんてある筈もないのだから。行動あるのみ！」

とりあえずベースと使用していた泉のそばに作ったかまどなどを片付けることにした。まずは木の燃えカスや灰を土と混ぜる。その上にさらに水をかけてかまどとして配置していた石を崩して、平らにしておく。

「よし、火の始末はこれで完了かな。あとはトイレ代りにした場所も片づけなきゃな。」

泉から少し離れた森の中に地面を掘って作った簡易トイレ。一応、使うたびに落ち葉などを入れていた。その中に小枝や落ち葉、それに再利用できそうにない竹？の容器を砕いたものに太めの枯れた枝をいれて土を軽くかぶせる。さらに水を少量かけて、穴をふさがない程度の石を置いておく。

「うーん。これで大丈夫かな？枯れ葉と水分で発酵して土にかえると思うし、促進させるための空気も入るようにしたし、石が置いてあれば誰かが間違って踏んでも下までいかないだろう。」

「みゆ？」

確認のために、もう一度後始末したところ見る。その様子を不思議そうに見つめながら、僕の後をフヨフヨとアオが付いてくる。

泉から流れる小川で手を洗い。どこに向かうかを考える。

「目安となるものも、目的地もないからなあ。」

人影などを見つけていれば、彼らの住まう地をとりあえずの目的地とできるのだが、昨晚考えたように心配すらない。

保存食に、使えそうな小道具。それらを動物の皮などを使った手製の袋に入れていく。最後に昨晚のうちに作っておいた白湯の入った水筒数本を取り出しやすいところに入れて、手には狩りに使っていた武器を持つ。

出発の準備を完了させて、アオを見つめながら言う。

「そうなる、今まで不思議に感じていたものを追ってみるか。」
「みゆみよ？」

見つめられて照れるように若干赤色が交る薄青色の球体生物だった。

この不思議な森で人影などの気配を感じたことは無かったが、不思議な視線は何度か感じていた。それは、動物たちの視線のようでありながらも異なるものだった。

「あの視線も気になるけど、ホントにとらえどころの分からないものなんだよなあ。」

狩りの最中でも感じて、一度だけその視線の先に行ってみたがそれらしき姿も痕跡もなかったのである。

「そうなる。時々、遠くから感じていた不思議な気配の方に行ってみようか。」

こちらは多分、大型の動物だと思われる。それというのも、とらえどころの無い視線の主とは違ってハッキリとした気配があったからだ。ただ、肉食獣のようにぎらついた感じも敵意もなかったから放置していたのだ。

「そういえば、あの気配。あの泉のそばをベースにしていた二日目くらいに結構近くまで来ていたっけなあ。」

その時は日が出始めの朝靄の中だったので襲われた時に対処しようと、ちよつと警戒していたのだ。僕にとっても大切な水場だったけど、他の周辺動物たちにとっても貴重な場所のはずだ。

普通の野生動物なら多少は警戒して近づいてこないだろうけども、相手が肉食獣の場合は逆にキケンだ。水を飲みきた草食動物などを襲う絶好の場所になるからだ。

「でも、結局はこちらを観察するような視線だけで、姿も見せなかったからなあ。」

思い出してみると何故襲われなかったのか不思議でもある。薄青色の球体生物―アオを話し相手に獣道を進んでいく。僕の一方的な話しかけに時折、あいづちをするような鳴き声を発してくれるアオに感謝しつつ、周りを警戒しながらゆつくりと進んでいく。

「みゆ、みゆみゆ。」

しばらく歩いているとアオが僕を呼ぶように鳴き声を発しながら、獣道をゆつくりとそれていった。僕はそれに抵抗することなく、アオが先導するにまかせて周囲を警戒しながらもついて行く。

「みゆくん。」

森の切れ目なのか、強い日差しの中へと嬉しそうに飛び込むアオの姿を見ながら、僕は目が慣れるまでその場で少し立ち止まっていた。

目が光りに慣れて、ゆつくりとアオの後を追って行く。そこは森の中に出来たちよつとした草原だった。所々、突き出た岩の姿がまたなんとも言えない良い風景だった。

「へえ、草が青々としげっていて綺麗だなあ。」

僕は草原に足を踏み入れる。ふくらはぎの半ばくらいまでの草だけがサワサワと地肌を撫でていてちよつとくすぐりたい。

アオは僕の姿を確認するとさらに奥の岩場の方へと進んでいった。「どこに行くんだよ。」

呼びかける僕に早く早くと言わんばかりに岩の上で跳ねて見せる薄青色の球体生物。その姿がなんとも微笑ましくて僕は知らず知らずのうちに微笑んでいた。

アオは僕の背丈くらいの岩に乗りながら、そばに来るのを待っていてくれた。

「みゆ、みゆ。」

見上げる僕に、あっちの方を見て！と言わんばかりに鳴く。そし

て、僕はその岩からさらに奥へと進むと・・・。

「うわぁ〜。」

幾つもの大きな岩が突き出した不思議な景観の中、岩と岩の間には色彩豊かな花々。岩の下部には緑の苔も生えている。そして、その中の中央付近に平たく滑らかな感じの岩の上にソレは居た。

「・・・綺麗・・・。」

まるで自然の玉座に横たわるように白い毛並みの獣が一匹、こちらを静かに見ていた。

僕は呆けたようにその獣の姿に見とれていた。明らかに肉食獣で、大きな狼のような姿にも関わらず。その視線は、不思議と落ち着きと貫録を感じた。

「・・・村の御神木のような。」

その神秘的でありながらも、どこか包み込むような雰囲気には僕は祖父の社の近くにあった御神木を思い出していた。

樹木にも関わらず、その御神木の周りには水が張り巡らされていて慈愛に満ちた雰囲気でもいつも緑の葉をゆるくなびかせていた。風のない日でも不思議と葉は揺れて、そばにいらるとしても落ち着く村の子供たちにとっても大切な場所だった。

「我を樹木と同列に表現するとはな。」

純白の獣が呆れを含んだ声でつぶやいた。

「あつ、すみません！！でも、とっても綺麗で大切な御神木なんですよ。」

僕は慌てて謝りながらも反論する。すると純白の獣は面白そうにしながら

「ふむ。・・・まあ、神木という事とその言葉で許してしんぜよう。」

鷹揚に答える。その言葉に「ありがとうございます」と答えながらも途中で気付いた。

あれ？動物って、人の言葉を話す生き物だったけ？

「・・・・・・・・あれ？」

戸惑う僕の姿に、純白の獣はしばらくじっと見つめていたが。

「・・・ぷッ、くっくっくつ。あーはっはっはっ。」

我慢しきれないとばかりに爆笑しはじめた。人であれば、お腹をかかえて笑い転がっているくらいの勢いで、とっても楽しそうに笑う純白の獣を僕は見つめるしかできなかった。

「みゆ、みゆうっくん。」

そこに、今まで静かにしていたアオがちょっと抗議するかなのような鳴き声で純白の獣の笑いを止めようとする。

「ふはッ。・・・いやいや、すまない。ついな。」

笑いをどうにか納めて純白の獣は薄青色の球体生物に謝罪をする。え〜と。とりあえず、双方の意志の疎通はできるようです。

現実逃避する思考に僕はいついつい乗ってしまう程に現状についていけなかった。

「だがな、獣がしゃべっているにも関わらず普通に受け答える者がいるとは。さすがの我も思わなかったぞ。しかも、気付くのが遅いし・・・ぷくくくッ。」

楽しそうに言う純白の獣に、同意するように答えるアオ。

「みゆうん。みゆ、みやみやみや。」

さらに何かを説明したのか、純白の獣は目を細め僕を見つる。その間にもアオによる説明―僕には鳴き声にしか聞こえない―を聞きながら、あいづちを打つ。

「ほほお〜。そなたがそこまで言う者か、コヤツは・・・。」

興味をひかれたのか、純白の獣はゆっくりと立ち上がると僕のそばへと近づいてきた。

僕は拒否する理由もないので、その場にまっすぐに立ったままにしていた。

「ふむふむ。」

僕を見つめながら、ゆっくりと周りを歩く。僕も改めて純白の獣を観察する。

腰くらいの高さに見える背筋の毛並みは艶々としていて綺麗に整

えられている。ふんわりと漂ってきたニオイにけものじゅう獣臭らしさは微塵もなく、とってもいいニオイがした。

「……お主、その服はいつ洗った？汗臭いぞ。」

逆に僕の方が臭かったようです、すみません。

「一応、上着とかは水洗いしたけど。……そんなに汗臭いですか？」

鼻筋にシワを寄せて、嫌そうな顔をしながら純白の獣は容赦なく一言。

「とっても、クサイッ！……むう、我慢できん。ちょっと、ついで来い！！」

そう言つとサツと身をひるがし、寝そべっていた岩を越えて森へと入っていく。僕がちゅうちょしていると、アオが後押しするように呼びかける。

「……みよ？みゆみゆん。」

その様子に心決めて、アオと共に純白の獣の後について行った。

1 - 4 シャベる獣との遭遇（後書き）

カワズはカエルの事で、ことわざです。

1 - 5 森の宮殿　くお風呂編く

純白の獣は堂々と森を進んでいく。その姿は悠然ゆうぜんとしていて、木漏れ日がまるで光り輝く王道ように見えるほどだった。その道中、木々の間から小動物がチラチラと顔をのぞかせては興味深そうに僕の姿を見つめるのを感じた。

しばらくすると、つた草で出来たアーチ状の門みたいなのところを通り過ぎる。

「なんだろう？ 門のようにも見えるし、自然に出来たもののようにも感じる。」

人の幅よりも大きな半円でありながら下部には他の下草なども生えている。人が整えたにしては中途半端な感じだが、周りの景観とは違和感のない感じなのだ。

「・・・・・・ほう。」

僕の独り言に肩越しに振りかえりながら、純白の獣が感心したような言葉を発する。そのまま、何事もなかったように進んでいく。

アーチ状の門をくぐり抜けた先は、不思議な森の景観よりもさらにすごかった。まず、樹齢何年たっているのかも分からない大木をそのまま利用した建物が建っていたのだ。その周辺は、やっぱり不自然にならないように整えられた木々と下草。

「・・・・・・うわあ。」

近づくとも大樹も一つの木が育った感じではなく、いくつかの大木が年月をへて絡み合い一つの大樹のように見えているようだった。しかも一種類の植物ではなく、いくつかの種類の樹木で形成されている。その中に遺跡のようでありながら、よく見ると神殿のように所々複雑な彫刻がされた建物が植物と一体化するようにあるのだ。

「・・・・・・。」「

言葉無く茫然ぼうぜんとする僕の様子に、満足そうな純白の獣は楽しそうに声をかけてきた。

「どうだ？我が宮殿は荘厳であらう。」

その台詞に一切の異論なく、僕は興奮したようにうなずく。

「ふふつ、なんとも素直なヤツじゃな。」

微笑ましそうな様子の声で答える純白の獣。そのまま建物の中へと入るようにすすめられて僕は中がどうなっているのかワクワクしてきた。

「まずは、風呂に入って汗を流せ。臭くて話にならん。」

建物の中はさらに整然とした感じだった。外から見て気付いてはいたが、この建物は二階以上あるようだ。一階部分は、絨毯の代わりに綺麗に刈りそろえられた芝生だった。壁には僕が見慣れた電灯のかわりに光る実をつける植物。下の方には淡く輝くコケが生えているようだった。

「お風呂があるの？」

ちよつとわの空だった僕は純白の獣の言葉にようやく返答する。

「あるぞ。なかなか広くて、天然の温泉を加工した露天風呂だ。」

自慢するように答えた獣の言葉に僕は心躍らせた。

広いお風呂。しかも、露天風呂なんて……。すつごく、楽しみだ！！

「衣服や荷物はそのまま脱衣所に置いておけ、洗たくが済むまではしばらくここにおるといいだろう。」

風呂場にくらしい扉の前で説明する純白の獣。洗たくなんて誰がするんだろう？

「後のことは、その者に聞くがよい。我は他の部屋でくつろいでいるからな。」

僕が疑問に思っている間にさっさいなくなってしまった。

「その者って、アオのこと？」

周りに人影はなく、僕の横に今まで無言でついて来ていた薄青色の球体生物を見つめる。

「みよ、みよーん。」

まかせておけ。というように鳴くアオに……。意志の疎通が出来

ているの？と再び疑問に思いつつも扉の中へと入っていく。

「ふわあゝ。なんか、初めてここに来てホントに良かったと思えるよ。」

まず、脱衣所の中は遺跡の神殿風の建物でありながら、何故か銭湯のようにスノコがひいてあり、木製の棚に木で編んだカゴ。洗面は磨かれた大理石のような綺麗な台座に装飾付きの鏡。光源としての入口付近でみかけた光り輝く実の植物が、まるで装飾のように壁に生えているのはホントに不思議な感じ。

お風呂場に行く扉を開くと、そこは予想以上に綺麗で広がった。

「うわあー。湊兄さんみなとのウチのお風呂もすごかったけど、このお風呂もすごいやあ。」

そこには一つの浴槽だけではなく、趣おもむきを変えた浴槽がいくつもあったのだ。それも建物の中庭を連想するような四方を石造りと植物におおわれた壁に、上は吹き抜けになっているのか木々の葉の間から空が見える。

大きな木の節を利用したかのような浴槽に、ヒノキ風呂！と言いたい浴槽。一つの大きな岩をくりぬいた感じの浴槽と、小ささまざまな浴槽の間にも植物や磨かれた岩が配置されておりホントにお風呂場？と聞きたいくらい贅沢ぜいたくな作りだった。

「あつ、よく見ると下の方に流れる溝の中に小魚までいる。」

自然的な感じに僕はとつても気に入ってしまった。素っ裸でウロウロする僕を注意するようにアオが洗い場付近を示してくれる。

「みゆ、みゆっ。」

早く身体を洗え。という感じの声に僕は慌てて洗い場へと向かった。

「これがボディソープかな？・・・え、こっちは髪を洗うのに使うの？」

いつの間にかアオとの意思疎通が出来ている自分に気付かないまま、僕は据え置きされているスポンジ代わりのヘチマもどきを使って身体を入念に洗う。

洗い終わると「今度は自分を洗え」とばかりにアオが丸い身体を僕の膝上に置いた。

「それじゃあ、水を流すよあ。」

僕は力を入れすぎないようにゆっくりと薄青色の球体を丁寧に洗っていく。気持ちいいと言わんばかりに、目をくくの形にしてアオが喜ぶ。

そうして、一人と一匹は今までの汚れを綺麗に落とすと、ゆっくりと湯船につかった。

「ああ〜、幸せ〜。」

恍惚とした表情でお風呂を楽しむ僕に微笑むような雰囲気のアオ。「……アオって結構、柔軟性があつたんだねえ。」

僕と一緒に湯船につかるアオはネリ消しゴムをこねて丸くしたものを引き延ばしたような感じに変形していた。そんなに間延びしているわけではないのだが、球体から変わらないものと思っていただけにちよつと驚いてしまった。

お風呂を心ゆくまで堪能して、脱衣所に出ると僕の衣服と荷物は消えており代わりに作務衣さむえのような服が置いてあった。

「これに着替えればいいのかな？」

つぶやく僕にアオが肯定してくれる。僕の体型に合わせたかのようにピッタリのサイズだった。靴も草履ぞうりのようなものが用意してあったので、ありがたく使わせてもらうことにした。

「それで、アオ。どこへ行けばいいの？」

たずねると僕の肩くらいの高さを浮遊していたアオはこつちと案内を開始してくれた。

いくつかの角を曲がり、幅広の通路を進む。そのどれもがお風呂場でみたように、石造りの建築物を損なわず、装飾のように生えた植物が配置されていた。

「ホントに不思議だけど、どこか居心地がいいなあ。」

建物の中には木の実の香りなのか、とっても良いニオイがほんのりと漂っている。コケとかが生えている割に湿気たニオイがしないのが逆に不思議に思えるほどだ。

「みゆ、みゆ。」

ひとつの大きな扉の前でアオが立ち止まる。

「この部屋がそうなの？」

うなずくように上下するアオを確認して、扉を押し開くとそこは花園だった。

「……驚き過ぎて言葉が出てこない。」

部屋だと思つて開いたそこは、三方を木々におおい隠された石壁と目の前の壁があるはずのところは大きく外に開かれていた。そこから見える風景は、キラキラと日差しを照り返す水面の姿。花園の両壁には石造りのベンチが置いてあり、僕が開いた扉の壁側には淡く輝く玉石らしきものが装飾と共に埋め込まれていた。

「ん？ようやく来たか。」

花園のど真ん中で寝そべっていたのは、あの純白の獣だった。

「遅くなってすみませんでした。」

僕が素直に謝ると、優しそうな眼差しで

「なに、かまわないさ。自慢の風呂は気に入ってくれたようだしな。」

その言葉に強くうなずく僕の姿に楽しそうな顔をしてくれる。お互いに微笑んでいると、その間を邪魔するようにアオが飛び込んできた。

「みゃあ。みゆ、みゆう。」

仲間外れにするなあ。とばかりに両者に訴えかける。そして、お互いにいいかげん自己紹介をしる。とも言ってきた。

「ははは、そんなに拘ねるな。」

笑って軽く受け流す純白の獣に僕は改めて姿勢を正して、名乗りあげることにした。

「それでは、あらためて僕から名乗らせていただきます。」

真つすぐに純白の獣の目を見つめる。

「僕は東雲蒼溟。苗字は東雲^{しのめ}、名前が蒼溟^{そうめい}です。」

それから、簡単に今までの経緯^{けいゐ}を説明する。ある程度はアオから聞いていたのか、特に質問なく純白の獣は黙って聞いていてくれた。「うむ、良い名乗りだ。我のことはアルシュと呼んでくれ。」

純白の獣―アルシュはさらに不思議なことを言った。

「我らが魔の森に住まうものにとって、名は自らを示す大事なものの故^{ゆえ}に真の名を告げることは容易ならぬこと。すまんな、異邦人よ。」

「いくつか質問があるのですが、異邦人とは僕のことですよね。」

真の名というのも気になるが、それ以上に異邦人という言葉に何か含みを感じた。

「いかにも。異邦人とは異なる場所から来訪した者たちを言う。」

それからアルシュは、簡単にこの森などの事も説明してくれた。

「この森は本来、人が入ることが出来ないとされている。一部の認可されている人族以外は女神の加護により動植物以外は立ち入れぬ。」

魔の森とは人から禁忌とされているだけでなく、物理的にも入ることが出来ない場所だという。仮にこの森に入れたとしても進んでいる内にいつの間にか森の外へと出され、深い霧などによりそのまま何処ともしれぬ場所をさまよい続けるらしい。

「それじゃあ、僕はなぜ大丈夫だったんでしょうか。」

僕の質問に、アルシュはアオを見る。

「古代の埋もれた遺跡にて、お主を救いだした上に名付ける栄誉まで与えたのじゃ。森に住まう資格は十分にあるう。」

どうやら薄青色の球体生物であるアオは、この魔の森の中でかなり高位に位置するものようだ。そのアオが仮称とはいえ、名を付

けさせ、さらに容認した。そのことは僕が思っている以上に珍しく大事おめごとだったらしい。

「アオはそんなに重要な生き物だったのですか。」

思わず聞いた僕に、重々しくうなずくアルシュ。

「この者は、この世界を守護する女神の使いとされているのじゃ。」

動植物にこだわらず、この世に存在する全てのものに加護と天罰を与える女神。その手足であり目でもあり、なおかつ一個の生命体でもある彼ら。

「彼らは個々で経験したことを種族全体の情報源に蓄積ちくせきすることが出来るらしい。」

簡単に言えば、誰かが見聞きしたことを遠く離れた別の個体が情報として得ることが出来るということだ。

「さらにその能力は未知数で、彼らの可能性は無限大。それらを踏まえて彼らをインフィニティと呼んでいる。」

そんなスゴイ存在に僕は、薄青色だったことから単純にアオと名付けてしまったのか。

「・・・・・・・・・・。」

「みゃ？」

見つめる僕になにか用？とばかりに不思議がる薄青色の球体生物。
「あゝ、ちなみにだな。インフィニティの個体優先順位の目安がその羽だ。」

今のところ確認されている形態は、3種類。一つは雪兎の形で、主に人里などで見かけられる。警報装置かわりとして人と共存しているそうだ。もう一つは、果実のような葉をもつ形で森や草原などでよく見かけるそうだ。

「雪兎と果実の形とでは、どちらの方が優先されるのですか。」

僕が遺跡でみたアオ以外の球体生物の羽がどんな形をしていたのかイマイチ覚えていないが、トンボのような4枚羽のアオが指示していたのは事実だ。

「確か、果実の形の方だったはず。雪兎には羽が無いとされている

からな。」

「どうやら、耳のかわりとして笹ささのような緑の葉があるのだが、羽として数えはしないようだ。でも、それをいったら果実型の方はモロに葉をイメージしているように思うのだが。」

アオにたずねるような目線を送ると。

「みよ〜ん。」

いつぞやのように、知らないよ〜ん。との返答でした。

「聞くだけムダだぞ。それにインフィニティの言葉は長い間共にいなければ理解できないしな。理解できたとしても、答えてくれるかどうかも分からんしな。」

苦笑するように純白の獣が教えてくれる。

「アルシュも知らないの。」

首をかしげながら聞いてみる。

「知らないな。それどころか、魔の森に住んでいることは知っていたが4枚羽が誰かについて回るとは思いもしなかったからな。」

ホントに以外だ。予想以上の出来事に、驚きの情報で僕は少し疲れてきた。

「・・・とりあえず、今日のところはここまでにしようか。」

アルシュは僕の疲れに気付いて提案してくれた。その言葉に感謝しつつ、うなづく。

「それでは、2階にある客間に泊まるといい。荷物も一緒に運ばせておこう。」

僕はアルシュに御礼を言うと、アオの案内で客室へと行く。気付くと外はすでに夕闇につつまれていた。客室には僕の荷物とテーブルにはできたてらしい温かな料理が準備してあった。

「ホントに、申し訳ないくらいにありがたいなあ。」

感謝をしつつ、それをいただく。食器はそのままに置いて、整えられたベッドへと入りこむ。その上にアオがちょこんと乗ってきた。

「くすつ。アオとの出会いは、一樹いちじゅの陰一河いちがの流れも他生たしょうの縁とい

うやつなのかな。」

ほんのちよつとの付き合いだと思っていたのに、気付いたらアオのおかげで今、こうして居られる。その事がなんだか不思議に思え、そして嬉しかった。

―見知らぬ場所で最初に出会えたのが、君でホントに良かった。
―ありがとう、インフィニティのアオ。

眠りに落ちながらの言葉に、何となくアオが照れているような雰囲気を感じつつも安心して僕は意識を闇へと沈ませた。

1 - 5 森の宮殿 〰 お風呂編 〰 (後書き)

お風呂はこだわります！心の洗濯ですから♪

1 - 6 森の宮殿 〱 散策編

朝日が室内を照らし始めた頃に、ようやく僕は起きた。

「うゝんッ。はあ、久々に熟睡した感じだなあ。」

大きく伸びをしながら、ゆっくりとベッドから出る。窓際の辺りでアオがのんびりと空中を漂っていた。

「おはよう、アオ。」

「みゅゝん。」

お互いに挨拶を交わして、僕は改めて室内を見回した。

昨晩は混乱気味でよく見ずに寝てしまったが…。窓辺ちかくには花が生けられていて、水色の遮光カーテンに白のレースカーテン。それもヒラヒラの感じではなく、模様のような感じで編みであるタイプだ。そして、喫茶店などにありそうなカフェテーブルにオシャレな椅子と美味しそうな軽食に紅茶のセット。

「……あれ？」

昨日はきちんとご飯を食べたよね？しかも、そのまま置きっ放しにしておいたはず。

再びテーブルの上のサンドウィッチやガラス容器に盛られたサラダ、紅茶はさらに入れたてが置いてあるのを確認する。

「ん？……さっきまで、お茶は入れてなかったはず……。」

なんで、どうして！？人の気配なども感じないのに、誰がどうやって行っているのか。それとも、機械仕掛け？いやいや、以外にも魔法とか？

「みゅ。」

落ち着け。と言わんばかりにアオが自らの丸い体を僕の頭の上に置く。そのポヨヨンとした感触にちよつと落ち着く。

「みゅ、みゅ。」

アオがテーブル付近の足元に向かって、僕が戸惑っているから姿を見せて、挨拶してやってくれ。と声をかける。

「誰かいるの？」

僕はそこを見ながらアオに聞く。すると、テーブルの足の後ろからピョコツと何かが顔を出した。

「……………」

無言でこちらを見つめる手のひらサイズの毛玉がいた。毛並みはフサフサのオレンジ色で糸のような足で起用に立ち、つぶらな目がこちらをジッと見つめている。

「……おはようございます。東雲蒼溟といいます、宜しくお願い致します。」

戸惑いつつも、まずは朝の挨拶と自己紹介をする。そんな蒼溟に毛玉は……。

「よろしくッ！」

糸のような手をあげて一言返してくれた。そして、もう片方の手を上げると……。

「……よろしくう！！」「」

部屋のすき間から同じような毛玉がいつせいに現れて、挨拶をする。一瞬で隠れてしまった。そして、僕は前に森で感じた不思議な視線の主を見たことに気付く。

「森で僕を見ていたのは君たちだったんだ。」

僕はしゃがんで最初に現れた毛玉に問いかける。すると彼は僕を指差して

「森……悪さ、確認……合格！」

そう言い残すと他の毛玉たちと同じように隠れてしまった。端的な言葉だけで意味が分からないが、なんとなく推測する。

「森にイタズラをしないか確認していたってことかな？それで……合格って、どういう意味での？」

僕は認められたいが、何を認めてくれたのかサッパリ分からなかった。

朝食を食べ終わると、再び毛玉たちが現れてどこかに片付けてく

れた。きちんと挨拶を交わしたおかげなのか、彼らは姿を隠しながら行動するのを止めたようだ。

食後の運動として散歩することにした。

「アオも一緒に来る？」

いかなぐい。という意志表示なのか薄青色の球体は、身体を左右に揺らして窓から外へと出て行った。

「ふられちゃった。」

ちよつと寂しい。しょんぼりしながら、室外に出ようとしたら僕の肩に毛玉が一匹あらわれて糸のような手で慰めるようになでくれた。

「あははは…、ありがとう。」

胸の辺りがほんのりと温かくなった。人ではないけれど、優しさや心配してくれる存在がいるというのは思っていた以上に心強いと改めて感じる。

日辺りの良い半室内の花園で、純白の獣―アルシュは日課である毛繕いをしていた。

「今日も良い天気じゃな。」

のほほんとした雰囲気ですの外の湖面をながめっていると、アオがフヨと漂っている姿を見かける。

「インフィニティ殿、少年はどうした？」

「みゃ？みゅ、みゅ。」

「ふむ、別行動中であつたか。」

「みゅ、みゅう。」

アオは湖面からアルシュの方へと近付きながら何かを訊ねる。

「ん？いや、我はあの少年をどうこうするつもりはないが。本人が希望するのなら、気が住むまで滞在するがいいだろう。」

「みゅ、みゃあ。」

「いや、強制するつもりもない。少年は異邦人だ、しかも人族のな。」

純白の獣は身を起こして、水際まで行くとゆっくりと座りながら答える。その瞳には若干の諦観の色が見えた。

「この森は、女神の力添えがあつて初めて確立できたもの。我らにとつて人族はあまりにも刺激が強い生き物だ。」

独白するアルシュのすぐ目の前まで来たアオは、それを静かに聴く。

「望もうとも、望まないとも、我らは人族との関りを切り捨てることが出来ない。それならば、少しでも我らにとつて有益なものにしたいと願うのは過ぎた望みのだろうか。」

思索しながらのアルシュの言葉には深い哀しみと憤りが感じられる。その瞳の奥には強い意志と共に若干の迷いも存在していた。

「しかし、インフィニティ殿が終始共に居るなど珍しいではないか。」
話題を沈んだ空気を変えるように明るい声で尋ねる。

「みゃ〜ん。」

「ふふ、確かに。あの少年は見た目以上に純粹そうではないながらも不思議な魅力を感じる。共に居て、楽しいのも何と無く分かる気がする。」

そうして、二匹は楽しそうな雰囲気で雑談をするのだった。

宮殿内を探索していると、この建物が大体5階建てで上の階に行くほど人に対応した様式になっていること。上流階級の人達向けになっていることが分かった。下層には使用人たちの部屋というよりも雑多な施設としての部屋が半地下からさらに下に存在するらしい。「ということは、この建物は崖の上にあるのかな？」

僕は最初に来た一階部分を見て回った後に半地下に続く廊下を渡って行く。ここには、調理室（台所よりも広いらしい）があるよう

で、肩にのった同行者である毛玉が進行方向を案内してくれた。

「あつ、なんだか良い匂いがする。」

甘いかがりがするけど、お菓子を作っているのかな？

調理室へと続く開けたままの扉を一応ノックしてから、中を覗いてみる。そして、室内にいる調理師の姿に僕は驚いてしまった。

「・・・ん？おや、昨日来たお客さんじゃないか。どうしたんだい、お腹が空いたのかい？」

優しく聞いてくれるその調理師さんは・・・三角巾を着用した割烹着のお化け。

黒い肌に丸顔。鼻はなく、目の部分にはぼんやりと光る点が二つ。口らしき裂け目が一つ。声は女性なのか落ち着いた高音で、足元は地肌が見えない長いズボンにすっかりした革靴を使用していた。

「えっと、お腹は空いていないです。今はこの宮殿の探索中です。」

僕は茫然としながらも、答えていた。そんな様子に何かに気付いたのか、調理師さんはこちらに向き直って

「ああ、人の子なら驚くのも無理ないねえ。私はここで働くスリール・ファンタスマって言うんだ。」

優しい様子で自己紹介をしてくれたスリールさんに僕も挨拶を返す。

「スリールさんは、なにを作っているのですか？」

僕は好意的な様子の彼女を自分と対等な存在としてすぐに認識してしまった。そんな心理を理解してくれたのか、スリールさんは作業台の上を見せてくれた。

「さん付けはよしとくれ、スリールでいいさ。今はアルシャ様に出すお茶菓子を作成している途中さ。」

彼女の手元を見ると、パイ生地らしいものを練っている途中だった。甘い匂いを発していたのは先に作ってあったジャムのような。

「わあ、おいしそうですね。」

僕の素直な反応に彼女はにやかな表情をしてくれた。

「よかったら、こっちにサンドウィッチの残りがあるから持ってい

きな。」

「え？でも、それはスリールの分じゃないの？」

僕はお皿の上に取っしておいた様子のサンドウィッチなどを見る。そうして遠慮している間にも彼女はパンを紙に包み、水筒らしいものに紅茶まで入れた小さなカバンを差し出す。

「子供がそんな事を気にするんじゃないよ。私たちのご飯なら他の物をすぐに作れるから気にしなさんな。ほら、これを持って行きな。まだまだ、散策を続けるんだろう？」

その言葉にいつまでも遠慮するのは、かえって失礼だと思い直した。

「うん、ありがとうございます。」

僕の姿に笑いながら「いいさ、楽しんでおいで。」と送り出してくれたスリールに手を振りながら僕は、手玉と一緒にさらに下層へと向かった。

「ここの人達は、みんな優しいなあ。」

あの後、僕は下層に広がる崖の側面を利用した施設内部を歩き回った。そして気付いたのが、人型をしたヒトたちはたくさん居たが僕と同じ人族は少ないことが判明した。

一見するととても恐ろしそうな容姿の彼らだが、みんな朗らかに楽しそうな雰囲気の中で気軽に挨拶してくれた。

そして、彼らはこの宮殿の主であるアルシュに仕えているようで家族などはここからもう少し離れた場所で町を作ってそこに住んでいるとのこと。

「こちらの人達は、みんなあんな感じなのかなあ。」

僕の住んでいた村の人達とは違う容姿のヒトビト。だけど、その雰囲気と性格はどうやら村の住人たちと同じように良い人たちばかりのようだ。

「うん、まだ帰れる方法が全然わからないけど。これらなら、楽しく過ごしていけるかな。」

僕は嬉しくなつて毛玉に向かつて話しかけていた。なんとなく、一緒にうれしそうにしてくれているように感じた。

最初に居た客室へと戻ると、そこにはアオが僕を待っていてくれた。

「どうやら、お茶の時間でアルシュが僕を招待してくれているらしく。アオはその案内に僕を待っていてくれたそうだ。」

「ごめんね、遅くなつて。それで、アルシュさんはどこにいるの？」

「みゆ、みゆ。」

僕は歩きながらアオに尋ねると、どうやら外に東屋があるらしくそこで待っているとのことだった。

最初に来た正門？とは逆にある場所で自然な感じの雰囲気とは違う、整えられた庭園が広がっていた。こちら側はどうやら崖側らしく遠くには青空などが広がっていた。

そして、スリールと同じ種族らしい人が執事服を着て案内してくれる。

「それでは、蒼溟さま。こちらで我らが主、アルシュ様がお待ちでございます。」

丁寧な言葉に僕は頷くとアオと共にその後ろについて行つた。

花々に囲まれたその東屋はゆつたりした広さと落ち着いた色調で整えられている。その中には一人の綺麗な女性が居た。

腰まである艶やかな髪は白色。年を経て白くなった髪とは違うことは一目瞭然で、その身体もすらりとした細さでありながら、どこか力強い雰囲気をもっている。

こちらに気付いていた様子の女性は、僕が一通り驚いた後に楽しそうな様子で声をかけてきた。

「ふふ、さすがの少年も私のこの姿には驚いたようだな。」

その声と口調に僕はようやく、相手がアルシュである事に気付く。気付いてから改めて見てみれば、確かに発する気などはあの純白の獣のものであるし、執事さんもそう言っていたのを思い出した。

「驚きました。・・・アオは知っていたの？」

その美貌もだが、獣の姿から人型になれることに對して僕は驚いていたのだ。

「インフィニティ殿は知っていたはずさ。」

苦笑するアルシュにアオはとぼけた様子で近くのベンチへと座る。僕はアルシュの対面席へと座った。

「それにしても、ここは不思議なところですねえ。」

僕の様子を観察するようにしながら、話を続けるように即すアルシュ。

「建物や植物などが違和感なく一体化しているのもだけど。ここで働いているヒトたちの容姿が僕と全然違うことや、一人も嫌々働いているヒトがいないことなど。」

僕は散策で出会ったヒトたちを思い出しながら話していく。

「何よりも、僕が住んでいた村も不思議なところだったけど。この宮殿に暮らすヒトたちもそれに負けなくらい不思議で優しそうなヒトたちばかりでした。」

万面の笑みでそう断言してくれた蒼溟の姿に、アオとアルシュは本当にうれしそうに微笑んでくれた。

「ありがとう。そう言ってもらうと、ここの主として我もとっても嬉しいぞ。」

和やかな雰囲気の中で、僕たちはこれからの事を話すことにした。「ところで、少年はこれからどうするつもりなのだ。もし、行き先も目的も定まらないのならば、しばらくここに滞在するのも良からう。」

アルシュの提案に僕は感謝すると共に、ちよつと考える。

「それは、この宮殿で働くという事ですか？」

僕としては元の世界に、村に戻る方法を見つけない。

「いや、私の客分として滞在すればよい。その間はここにある施設などは自由に使用してかまわん。」

僕の気持ちを察してか、アルシュはとってもありがたい申し出をしてくれる。

「でも、それだと僕には大変ありがたいのですが。どうして、そこまでよくしてくれるのですか？」

そう、僕にとって得することばかりでアルシュには全然ない。それどころか、昨日はじめて出会ったばかりの僕にここまで世話してくれるのも不思議ではない。

「インフィニティ殿の客だから……と言いたいところではあるが、こちらにも事情がある。今はまだ理解することも判断することもできない。」

確かに、無理だ。例え、アルシュがその事情というものを話してくれたとしても、それが僕にとってどんな不利益をもたらすのかわからない。

「一方的な事情説明では判断する基準も出来ないであろうからな。まずは、ここにある書籍などで一般知識を得るのがよいだろう。」

施設を自由に使用していい。というのはそう言う意味も込めてのことだった。それでも、こちらにとって有利なことばかりではあるが。

「……アルシュは、その状況で自分たちに有利な方向で進めたいとは思わないの。」

この質問は相手にとって、とても失礼だとは思いつつも聞かずにはおれなかった。

誰だって、自分に不利なこと、不都合なことは避けたいに決まっている。進んでそれを望むのは、別に何かの目的がある場合だ。相手の全面的な厚意からの行動でも、個人なら有り得るかもしれないが、アルシュのように大勢を率いる立場のものには有り得ない。

「ヒトの厚意は素直に受け取っておくものだぞ。」

イタズラめいた眼差しを送りながら答えるアルシュ。

僕の心情を察していながらの発言ではあるが、そこに怒りや煩わしさなどの負の感情はみられなかった。どちらかと言えば、僕がどう答えるかを面白がっている感じだ。

「うん、本当にありがたいと思う。だからこそ、聞かないわけにはいかない。」

そう、宮殿であつたヒトたちはみんな優しくそれで良いヒトばかりなのだ。

昨日、突然あらわれた人である僕に嫌な顔もせず挨拶をしてくれたり、立場も何もかも分からないにも関わらず作業説明までしてくれたり、果ては大事な家族が住んでいる町の所在まで教えてくれた。そんな心優しいヒトたちに迷惑がかかるような事態にはいけないからこそ。その可能性があるというならば、僕はここに居るべきではないと思つたからだ。

「ふむ。その心意気は立派ではあるが、子供は素直になるべきだぞ。それに、大切だと思つてくれるならば、相手を頼ることもまた必要なきときがあるぞ。」

「会つて間もないのに？」

僕の疑問にアルシュは包み込むような優しい眼差しを向ける。

「時間はさほど問題ではない。そこに互いを思いやる気持ちがあるかどうかこそが大切だと我は思うがな。」

突然、人にとって不可侵の領域に迷い込んでしまった僕を排斥するのではなく。ここの一員として迎えても良いというアルシュの言外の提案に、僕は泣きそうになつた。

「・・・ありがとう・・・。」

知識と技術があつても、ここは僕が住んでいた村や森ではない。親しかつた村人も頼れる兄さんや姉さんたち、仲の良かった友達。それに親友の柊と会えない寂しさ。

何よりも此処に居て良いのか。それすらも分からなかった。そんな僕にア才は寂しさを紛らわせてくれて、アルシュは居場所をくれようとしてくれる。

嬉しさと喜びに、胸がいつぱいで目から溢れた涙を拭くのが大変だった。

泣きだしてしまった少年―蒼溟の姿に我は少し複雑な気分を味わっていた。

幼い身でありながら、森の中に六日間近く一人で過ごしていたことは報告により知っていた。最初は不審なものを発見したとの報告から、警戒しながら確認しに行ったのだが途中でインフィニティ殿の姿を見つけた。それにより、我らに害する者ではなさそうという事で放置したのだ。

人族の子供。インフィニティ殿ならば能力を使用して近くの人族の里まで送ってくれるだろうとも思っていたのだ。

「礼を言うのは、ちょっと早いかもしれぬぞ。」

我の言葉に泣きやんだ蒼溟は一瞬、きょとんとしながらも首を振り否定した。

「どんな事情であろうとも、互いに対等の知識を得てからというのなら。それは平等な取引でもあります。」

幼い容姿と純粋な心。それらを持ち合わせていながらも、こうして大人びた対応をしてくる少年―蒼溟の姿に、インフィニティ殿が気に入った理由を垣間見た気になってくる。

このアンバランスでありながら、頼もしい少年に我知らず好意を抱いていく。

「それを代価として、無茶な要求をするかもしれんぞ。」

我の意地悪な言葉に蒼溟は楽しそうに答える。

「わざわざ言うヒトが、そんな事をしませんよ。仮にされたとしても・・・踏み倒します。」

その堂々とした発言、ただの善良な大人に育てられたわけではないようだ。ますます、楽しい少年だ。

「そうか、そうか。それならば、互いに遠慮することもあるまい。」
久方ぶりに、心から楽しい。それだけでも、この少年をそばに置

いておきたいと思う。例えば、我らの事情に利用できなかったとしてもだ。

結局、蒼溟はこの宮殿にアルシユの客人として滞在することに決まった。

これからは、ここでこの世界の常識や技術などを学ぶことになる。

1 - 6 森の宮殿 〽散策編〽（後書き）

森の住人たちが登場。動物だけではない！

1 - 7 森の宮殿 ー 学習編 ー

森の宮殿の一角に、周りの整然とした風景から逸脱した場所があった。

「よつと、網はこれでよいかなあ。こつちの方はスリールにあげよう。」

綺麗に開かれた川魚をお手製の天日干し用の四角い棚へと並べる。その他にも、森で獲った獲物を燻製にしたものなどを手に、少年は調理場へと向かった。

「おはようございます。」

朝食の準備に忙しそうにしていた割烹着を着たお化け。ファンタスマ族の女性であるスリールは、少年を見ると独特の笑顔で迎えた。

「おはよう、蒼溟。今日も元気そうだねえ。」

少年ー蒼溟は、笑顔で返事を返すと手に持ったお手製の干物を渡す。

「今日は何を手伝いますか？」

「そうだねえ、その芋の皮剥きをしてくれるかい。」

スリールが指し示す場所には、色彩豊かな毛玉たちが皮むきをしていた。

「おはよう。」

作業中の毛玉たちに挨拶をする。

毛玉たちはレーヌ族という種族で個々の名前はあるにはあるのだが、人の舌では発音できないものだった。彼らの種族間での会話は高音域に達しているようで、人の耳には音として捕らえることができないようだ。そして見かけからは想像が付かないが、彼らの知能は人族と比べて劣っているわけではない。

少々、独特の認識はしているようではあるが。

片言になってしまうが人の言葉を操り、人が作り出した様々な道具を複製することができる器用なことで有名な種族でもある。

「おはよッ。」

小さな糸のような手を上手に動かしながら挨拶をする毛玉たちの親分。

この宮殿内にいるレーヌ族を束ねる長であるオレンジ色の毛玉は、蒼溟にきちんとした名前を名乗った後に略名としてダイと言った。

蒼溟は毛玉たちと一緒に手際よく皮むきをしていく。

「蒼溟・・・これ・・・やる。」

あらかた皮むきも終わり、毛玉たちと後片付けをしているとダイが作業台の上に何かを置いた。

「ダイ、これなに？」

紫水晶のような鉱石を指差す。

「拾った。」

簡潔明瞭なダイからの一言。

レーヌ族の特徴とは言え、もう少し説明してくれると嬉しいなあ。苦笑しながらも、お礼を言って受け取る。

「蒼溟、朝食ができたからアルシュ様を起こしてきておくれ。」

スリールの依頼に返事をして、宮殿の主の部屋へと向かう。

アルシュの居住区は、宮殿の片隅にひっそりと存在する。

てつきり中央部分の5階建ての最上階に居るのかと思えば、そこは来賓を迎える場所で普段は寄り付きもしないらしい。

彼女の言葉から人族には階級制度があるようで、彼らの王族の一部を迎え入れる際に使用するだけで、彼女自身はあまり好きな場所ではないようだ。

「おはようございます。・・・アルシュ、起きてる？」

扉をノックしてから少し待ち、中から応答が無いと気付いて、ゆっくりと開けた。

「んっ。・・・蒼溟・・・か？」

室内にあるソファの上で人型になって座っていたアルシュの姿に苦笑してしまう。

最初に見たときの凜々しい姿がウソだったかのように、寝ぼけているアルシュはとても可愛らしかった。

「おはよう、アルシュ。」

ベッドの近くにあるサイドテーブルの上にある水差しからコップに水を入れて、アルシュに手渡す。彼女がそれを飲んでいる間に、蒼溟は手早く彼女の寝乱れた髪を整えていく。

「スリールが朝食の準備が出来たって。」

水を飲み干して、ようやく眠気が取れたのか

「・・・そうだな、今日は外のテラスの方にするか。」

「それじゃあ、スリールに伝えてくるね。」

綺麗に整えた髪を満足気に見てから、部屋を出て行くとする蒼溟に

「お主も一緒にじゃぞ。」

一応、念押しをする。それに笑顔で分かったと答えながら出て行く蒼溟の後に、レーヌ族たちが着替えの準備を始めていく。

「蒼溟、ここには慣れてきたか？」

朝食後のお茶を楽しんでいる最中にアルシュが聞いてきた。

「うーん・・・気候とかには、慣れたかな。」

ちよつと答えをはぐらかしてみた。

当然のように、アルシュは呆れたような表情でため息混じりに

「日常生活や学習の方に關してだ。」

予想通りの内容だが、僕はそれに対して明確に答えなかった。

「・・・ほどほどかな？知らないことがあり過ぎるのと、疑問に感じるものが多すぎて何を調べて、何を知ればいいのか分からない。」

これは正直な感想だ。

日常生活ひとつを取ってみても、道具の使い方はもちろん。その俗称から略称、正式名称と呼び方が色々で混乱することもある。

その生活も、身分の階級差や稼ぎの収入でも違うし、男女差や年齢差、種族の違いによるものなど……。

多種多様にわたり過ぎて途方にくれる。

「ふむ。……まあ、ある意味この場所だからこそのう。」

アルシュの言葉の意味が分からずに首を傾げていると、苦笑した彼女は簡単に説明してくれた。

「この魔の森には、多種多様な種族が共存体制で暮らしてある。そのため、人族の蒼溟にとっては理解しがたい習慣や体質、それに知識や技術が溢れている。」

確かに、身近にいるアオにダイなどは身体的特徴からしても僕とは違い過ぎる。

「人族では出来ないことも普通に日常生活の一部として存在していれば、逆に人族にしか出来ないことが存在しないこともある。」

それは、スリールの調理方法などのことであろうか。

彼女は特別な道具を使用しないで、物を加熱してみたり、冷凍したりすることができるのだ。そして、それはファンタスマ族だけの特徴ではないらしい。

「それ以外にも、人族たちとは寿命の違いから失われた技術なども有しておるからのう。」

「失われた知識は有していないの？」

素朴な疑問だった。なんとなく、彼女の口調に若干の苦いものが含まれているように感じたからだ。

「……知識に関しては微妙じやの。各々の価値観や種族間でのやり取りで如何様にも変化するものでもあるからのう。」

それは宗教などの事を言っているのであろうか。

確かに、人族の歴史で見れば生活地域によつては慣習も必要な知恵も違ってくる。

また、それらに触発されて自然発生した土着の宗教などを考慮すると「知識」の一言では言い表せない多岐分野になるだろう。

「人族の知識があまり無い……ということ？」

魔の森に人族が入ることが許されていないのならば、当然のことのようにも思える。

「そうじゃのう。・・・これは、歴史的なものにもなるが、我らと人族との関係は一概に言い表すことが出来ない複雑なものじゃ。それ故に良きにしろ、悪しきにしろ、互いに歪んだ認識をしていることも多々ある。」

少し顔をしかめながら、アルシュは言う。

「その認識の違いにより技術とは違い、知識については・・・特に歴史的解釈については人族と我らの間になりの齟齬が生じておる。これは互いに不利益を生じる問題でもあるが、容易に解決できるものでもない。」

何かを堪えるように、そつと俯き加減になりながら瞳を閉じるアルシュ。

「まあ、そうは言っても我らも人族も一枚岩ではないからのう。」

それは、互いに関係を改善するための抜け道もあれば、悪化させる裏道も存在するということだろう。

「でも、そうすると僕の学習に終わりが無いという意味に・・・。」

情けない顔で訴えてみると、アルシュは人の悪い笑顔を浮かべて「なんじゃ、お主。人生とは即ち、学ぶ道・・・という言葉を知らんのか。」

そんな言葉、知りません！

蒼溟をひとしきり、からかって気分を変えると少年はスリールたちの元へと逃げていってしまった。

「アルシュ様もおヒトが悪いですね。」

執事姿のファンタスマ族の男性が空になったカップに紅茶を注ぐ。それを一口飲んでから、アルシュはゆっくりと

「ハーディは、蒼溟をどう見る。」

ハーディ・ファンタスマは主の問いを少し吟味しながら慎重に答える。

「・・・彼がこちらに来てからすでにふた月は立ちますが・・・良い子だと思いますよ。」

「・・・良い子・・・か。」

感情の読めない表情でアルシュは呟く。

その様子を視界に入れながら、ハーディは続ける。

「ええ、下働きの者たちからも信頼を得ているようではありますが・・・。」

その後の言葉を続けることに躊躇うそぶりに、アルシュは興味をひかれた。

彼女がハーディにあえて訊ねたのは彼がかつて人族に仕えていたことがあるためだ。

ハーディ自身はその頃の事をあまり話したがらないが、ファンタスマ族の中でも彼はかなりの年長者で、魔の森に住まう一族の中でも特殊な経歴をもっているものでもある。

「どうした、何か気になることでもあるのか。」

アルシュの問いかけに、ハーディは一切の表情を消して答えた。

「彼は、あまりにも良い子過ぎるように思えます。」

「なんじゃ、良い子ではいかんのか？」

彼が何を言い淀んでいるのが、理解できないでいると

「いえ、良い子であるのは悪いことではありませんが、人としては異常かと思ひまして。」

その答えに、納得した。

蒼溟は、人族の少年だ。

人族とは、我らとは違い脆弱な肉体だが同時に強靱な者たちでもある。その原動力の一つに欲望が存在する。これは、生き物であれば誰しもが持ちえるものではあるが、人族はその望みが強すぎる種族でもあるだ。

「人族にしては、欲が薄いのか。」

「それだけではなく、私たちと比べても、でしょうね。」

その答えに何が異常なのかが良く分かる気がする。

魔の森に住む種族たちは基本的に自給自足を主として自然と共に暮らすことを選んだものたちばかりだ。その為、天災や弱肉強食といった食物連鎖に対して謙虚に受け入れる精神が自然と培われているのだ。

我ら獣にとつて当然のことではあるが、だからと言ってそれを容易く享受するつもりもない。生き物である限り、その生が尽きる瞬間まで足掻くものだ。

ハーディの言葉は、その当然の欲求すら蒼溟には無いのではないかということだ。

「それは・・・確かに異常じゃのう。」

思索しながら、ハーディと共に少年が走り去った方向を見つめていた。

その日の夜。

蒼溟は、アルシュの好意で自由に出入り出来る許可を貰った書庫で本を読んでいた。

「ふむ。勉強嫌いかと思えば、そうでもなさそうじゃの。」

獣の姿のアルシュがゆっくりと室内に入ってきたと言った。

「アルシュ、珍しいね。」

ここ最近は、人型でいることの方が多かった彼女の久しぶりの純白の毛並みに自然と笑みがこぼれる。

人型のアルシュも好きだが、蒼溟としては気高い凜とした雰囲気をつらつらと自然に溶け込むような純白の獣姿の方が好みだった。

「近々、人族のものが来訪する予定じゃからの。少しばかり、森の中を視察してきたのじゃ。」

人族の来訪？

不思議そうに首を傾げる蒼溟に、器用に苦笑しながら

「この森とて、無闇に人族を排除しているわけではない。」

アルシュの言葉に余計に混乱してしまう。

「何か、基準でもあるの？」

僕の問いにアルシュは丁寧の説明してくれた。

「きちんとした基準は我らにも分からぬ。一言で表すなら、女神に認められし者かの。」

女神の加護により守られた森。

僕の生まれ育った村ではあまり考えられないくらい身近な存在であるらしい女神。

書物の中でも、その存在は幾度となく書き記されているが、実際にその姿を見たものはいないらしい。

「我が知るかぎりでは、人族の王族。多人数を率いる立場にある者で、我らに直接的な害を及ばさない者たちが多いの。」

記憶を探っているのか、虚空を見つめながらアルシュは言う。

「へえ。それじゃあ、今回来る人も王族なの。」

僕が興味を示すと、人の悪そうな笑みを浮かべながら

「なんじゃ、興味があるのか？」

それに素直に頷くとさらに笑みを深めながら、アルシュはしばし考える仕草をする。

「……ふうむ。……来てからのお楽しみにしておこうかの。」

何やら、悪巧みを思いついた様子で楽しそうにしつぽを振りながら、部屋を出て行くアルシュ。

なんだろう、自分で墓穴を掘った気がする。

ため息をつきながら、読書を再開する蒼溟であった。

1・7 森の宮殿 ー学習編ー（後書き）

学習という程、学んでいる様子がないなあ。

1 - 8 森の宮殿 へ 来訪者編へ

アルシュから人族の来訪があるとの言葉を聞いた夜から、すでに五日以上たっていた。

その間、蒼溟は日常的なことはスリールやダイ、下働きの者たちから学び。その都度、疑問に思ったことなどを夜に書庫で調べるという日々を過ごしていた。

言語や文字に関しては、村に住んでいたところに茅姉さんから教わっていた文法に近いものがあつた為、比較的覚えやすかった。

人族に関しての基本的な知識は、童話や旅行記などを見て何となく察するといふかなり曖昧なものではあつたが。

朝食後のお茶の時間。

「蒼溟、明日は狩猟に出かけないように。」

ゆつくりとお茶を楽しんでいたアルシュが不意に告げる。

「？何かあるの？」

心当たりが無くて首を傾げていると

「ああ、例の来訪者が到着する予定なのでな。」

人族の王族関係が来るというアレのことかぁ。どんな人たちなのだろう。

「・・・ところで、その人達はどうやってココに来るの？」

魔の森は物理的にも人が入れないようになっていた。

狩猟の際に一度だけダイにお願いして森の境界付近まで行った時に確認したのだが、森の周辺には深い谷間と猛毒の下草に、茨の群生に隠されるように鋭角に尖った岩肌などなど。

天然の城塞が築かれていたのだ。

「ん？・・・ああ、奴らは空から来るから大丈夫じゃ。」

綺麗に手入れされた人差し指で上を示すアルシュの行動に、自然

と僕の視線は上を仰いだ。

「空から？」

いまいち、要領を得ない僕の姿を面白そうに見ながら

「まあ、明日の楽しみにしておくとよいじゃろっ。」

クスクスと楽しそうに笑い出すアルシュ。

首を傾げながらも、その意見に同意するしか無かった蒼溟だった。

次の日の朝。

蒼溟は狩獵に出れないかわりに、庭で柔軟などをして身体をほぐしていた。

「よくよく考えれば、僕って村の人たち以外の人間に会ったの初めてなのでは？」

自分が生まれ育った村はかなり閉鎖的で、稀に外から来る人は大抵、村の誰かの親戚縁者か知り合いしかいなかった。

まったくの見知らぬ他人に出会う。

人間限定ではあるが、初めてのことである。

そう考えると好奇心と緊張で、ジツとしていられないのだ。

「どんな人たちなんだろうなあ。王族って言うから、一人ではないだろうし……。」

色々想像していると、薄青色の球体生物が頭の上に乗ってきた。

「みゅ。」

落ち着け。とアオが言ってくれるが、僕としては人生初のことでムリです。

幼い頃に初めて村に行った時のように、ドキドキが止まらないのだ。あの時は親友の柊が僕をすぐに受け入れてくれたのだが、今回は王族——特権階級の人だ。

「失礼の無いようにしないと……ん？」

ここまで想像して、ふと思ったのだが。

「来訪したからと言って、僕が会うとは一言もなかったよね？」

アオを見つめて確認すると、アオもそう言えば・・・みたいなことを言った。

「・・・・・・・・・・」

うわっ、恥ずかしい！！

僕はすっかり、その人達と会って挨拶をするつもりでいたが。冷静に考えてみれば、僕はアルシュの客分ではあるが関係者というわけではない。

「なんか、すごい思い違いをしていたのか！」

身悶える僕を慰めるように、アオが肩にのり頬をすり寄せてくれる。

恥ずかしさと好奇心などで心がざわつくままに身体を動かし続けたおかげで、少しずつ冷静になってきた。

その内に、村で教わった体術の鍛錬をこなして気持ちが落ち着いていた頃には僕の身体は汗だらけとなっていた。

「ふう。」

呼吸を整えて静止、礼をして終える。

「すっかり汗だくだな。・・・ダイにお願いして、お風呂に入ろう。」

アオと一緒に、折角だからと思い露天風呂の方へと向かった。

蒼溟が一人で身悶えている頃、アルシュはというと・・・。

「ハーディ。どうせ来るのはヤツなのだろう？ここまで、装う必要もあるまい。」

執事としての役割を果たすべく、ハーディがアルシュの身の回りを整えていた。

「気心の知れた仲であるからこそ、装う必要もあるのですよ。」

ハーデイが用意した洋服を手に、嫌そうにするアルシュをすました様子で諭す。

「いや、しかし・・・。」

それならば、いつそのこと獣姿になろうとする主に対して。

「アルシュ様、さすがにそれはどうかと思われますよ。それに、このお姿をご覧になられた蒼溟様の姿を見てみたことはありませんか。」

ハーデイの甘言にイタズラ心を刺激されるアルシュ。

「うむ。・・・ハーデイがそこまで言うのであれば、致し方あるまい。」

決して、蒼溟の様子を見てみたいからではないぞ。と言いつつも楽しそうな様子のアルシュを気付かれないように生暖かい眼差しで見つめるハーデイであった。

二人が準備を完了した頃に、魔の森の上空を一匹の飛竜が宮殿へと向かっていった。

多種族が移動手段として使用する竜族のほとんどはドラッヘと呼ばれる種族で、それぞれ生息区域などにより呼び方が違っている。

『ヴォレドラッヘ』 空を飛ぶ能力をもち、比較的温厚な性質。

知能もほどほどにあり、人族を始め多種族と友好な関係を築いている。

『トレホドラッヘ』 陸を走る能力をもち、馬などよりも速く、力も強い。普段は従順だが、戦闘となるとその強靱な肉体と牙で敵を粉砕する。馴らすまでが大変でもある。

『ナジェドラッヘ』 水辺に生息して水陸両用で活動できる。実は、ドラッヘと称される竜の中では一番、手懐けるのが難しい。だが、船の護衛としてはピカイチでもある。

一般的には、飛竜・陸竜・水竜と呼ばれている。

そのヴォレドラツへの中でも中型の飛竜に乗った人物は、森の宮殿上空を数回ゆっくりと旋回したあとに屋上庭園へと降り立った。

颯爽とした仕草で旅装束の人物が降り立つと、すぐさまファンタスマ族の一人が飛竜の世話の為に近付いてきた。その者に手綱と荷物を見せて、扉付近で待ち構えている執事のハーデイへと向かう。

「お久し振りで、ハーデイ殿。」

涼やかな声で挨拶をする旅装束の人物はゆっくりと外套のフードを取り払らう。

長い髪を後頭部辺りで一つに括ったその人物は穏やかな微笑みを浮かべる妙齢の女性であった。

「ようこそお越し下さいました。フェリシダー様。」

ハーデイはゆっくりお辞儀しながら挨拶を返すと、自らの主であるアルシュの下へと案内をすることにした。

宮殿の中央部、4階部分でアルシュはその人物を迎えた。

「お久し振りで、フェリシダー様。」

ハーデイに案内されて来た女性を立ち姿のまま迎え入れると、親しげにお互いを軽く抱きしめあう。

「お久し振りで、アルシュ様。元気にいらっしやいましたか。」

至近距離で顔を見合わせながら、嬉しそうにフェリシダーが訊ねるとアルシュも微笑みを返しながら答える。

「ええ、元気ですし、ここ最近は楽しいものを見つけましたので。」

互いに身分ある者同士で知り合いでもあるが、それ以上に二人には親密な友好的な雰囲気醸し出されていた。

「それは、手紙で書かれていたアレで？」

ちよつとイタズラめいた眼差しを向けると、アルシュも楽しそうに頷く。

「きつと、フェリシダーも気に入ると思うの。」

途端に二人の口調は親しい友人同士の会話へと変わる。

それを微笑ましそうに眺めるハーディは、レーヌ族の一人に何かを尋ねて確認をとる。

「そういえば、ここにはフェリシダーだけ来たの？」

いまだに、互いの身体を触れ合わせながら彼女の後ろを一応確認してみるが、人影も何もない。

「彼が貴女を一人で行かせるとは思わなかったのだけど。」

アルシュの言葉に苦笑とも諦めとも取れる表情をした後に

「事前に連絡はしておいたけど・・・新しい玩具に夢中で、少し遅れるみたい。」

ため息混じりに答えるフェリシダーの様子に、いつものことね。と答えるアルシュ。

それから、二人は室内に準備してあつた席へと向かい。しばし、互いの近況を雑談と共に語り合った。

「それじゃあ、アルシュはその少年を宮殿に住まわせているの。」

フェリシダーが少し驚いた様子で聞くと

「ええ。まさか、放り出すわけにも行かないでしょう。それに、4枚羽のインフィニティ殿も共にいるのだし。」

アルシュは、それ以外にどうしろと？と言外に訊ねる。

「へえ、その子すごいわねえ。4枚羽なんて私もお目にかかったこと無いのに。」

感心するフェリシダーに苦笑するようにもう一つ付け加える。

「それに、レーヌ族の長まで気に入っている様子よ。」

「ふわあ。何か、ますますその子に会うのが楽しみになってきたわ。」

目をキラキラさせながら、フェリシダーはまだ見ぬ異邦人の少年に抑えきれない興味を覚えた。

思い出したかのように突然、アルシュが

「さっき言っていた彼の新しい玩具。今度はどんなものに夢中にな

っているの？」

その問いに、何かを思い出したのかため息をつきながらフェリシダーは耳慣れない言葉を言う。

「飛翔艇っていう乗り物によ。」

「ひしようてい・・・？」

その言葉をおうむ返ししながら、自らの記憶をたどってみるが、該当する単語はあいにくと出てこなかった。

そんな困惑気味のアルシュに苦笑しながら、

「まあ、空を飛ぶための乗り物と思ってくれてかまわないわ。」

この世界の一般的な移動手段は先に述べたように、ドラッヘという竜種によつてだが、知性ある種族である為、誰でも扱えるというわけではない。

そうになると、庶民の移動手段としては昔ながらの馬や牛など。水上では小舟を竿などで上手に水流を利用して行う。空に関しては、使用できないというのが常識だ。

「でも、空の移動ならヴォレドラッヘでも十分だと思うけど。」

飛竜での移動手段は、確かに上流階級でなければ基本的には無理だが、何事にも例外というものは存在する。竜自身が固定の主に忠誠を誓う場合には階級など関係が無いのだ。

「私もそう思うのだけれど。本人いわく、男のロマンだそうよ。」

肩をすくめて、やれやれと呆れた様子を表現するフェリシダーに苦笑を返しながらも、アルシュは久々の気心の知れた女友達との会話を楽しむのだった。

1 - 8 森の宮殿 へ 来訪者編へ (後書き)

アルシュの言葉使いが違いますが、その理由はそのうち出てきます。

1 - 9 初めての人族

さて、二人の女性が楽しそうに雑談をしている頃。

蒼溟は、先ほどの体術の鍛錬に刺激されて他の鍛錬もしようと崖側の庭園に出てきた。その手には、固い材質の木の棒を持っていた。「うーん。久々に棒術の練習でもしようかなあ。」

棒の長さは大体、自分の指先から肩くらいの直線状。握りやすいようにヤスリで丁寧に表面を整えたものだ。

棍棒とは違い、間合いが短く戦闘に適さないように思えるが室内や狭い場所では以外に使い勝手がよく、使用するのも木切れでも対応できるように考えられた動きなので護身術としては最適な武術でもある。

「あんまり本格的にやると再び着替えないといけないから、動きの確認でもしようかな。」

ちよつと考えてから、まずは直立してからゆっくりと足を肩幅に広げ、手に持った棒は正面から隠すように腕に沿わせる。

棒を持った手を腕に隠した状態のまま後ろへと引くと同時に反対側の腕を前面に、それに伴い身体を真正面から半身に移行する。

呼吸は意識してゆっくりと腹式呼吸で行う。

半身で棒を隠し、一気に背中から上段切りをする。その際には、架空の敵の鎖骨を狙うようにして、その勢いのまま中段蹴りを繰り出し、すぐさま元の位置に戻る。

他の一連の動きを呼吸と共に意識しながら繰り返し出していく様子はまるで踊りのように洗礼されたものだった。

「・・・ふう・・・こんなものかなあ。」

ひと通りの動作を行った後に、静止して礼をする。

汗をかくほどではないが、ほどよく血が巡る感じが何とも心地よい。そんな蒼溟に耳慣れない音が聞こえて、音のする方に目を向けた。「なんだろう、この機械音のようなの。」

崖側の上空を見てみると、なにやら細長い乗り物のような影が見えた。

よく目を凝らして見ると、そこには人影らしいものが見える。相手もこちらに気付いたのか、手を軽くふった後に速度を上げて縦に円を書くように回って見せた。

「おお、すごい。」

興味を引かれて眺めていると、その軌道上に宮殿の屋上にいたらしい飛竜の姿が見えた。

「あつ、危ないぶつかる！」

とつさに口にしたが、自分ではどうする事も出来ず見守るしかない蒼溟。

乗り物に機上した人物も驚いたのか、慌てて回避しようとするが飛竜の方は冷静に自らの丈夫そうな尻尾で、虫を叩き落とすように乗り物ごと打ちすえた。

「なつ、なに——！？そんな回避の仕方をするヤツがあるかぁーッ——！」

男性らしい怒声と共に、蒼溟のいる庭の方に落下してくる人物。轟音を立てながら、地面に接触したらしく。辺り一面に土埃が舞うその様子からかなりの衝撃を想わせた。

「だ、大丈夫ですか！」

慌てて蒼溟は、地面に激突した人物の元へと駆け寄る。

「いつ、たたあ。」

そこには、周囲を折れた枝と葉っぱにまみれた革製の帽子と服、ゴーグルを身につけた男性が尻もちをついた状態で座っていた。

どうやら地面に激突する前に樹木などで勢いを殺したのか、ざっと見たところ怪我を負った様子はなかった。

そんな様子に安心していると、いつの間にか蒼溟の肩の上にあらわれたレーヌ族の一人が男性に対して非難するような眼差しを送っていた。

それに気付いた男性がこちらに眼を向けるのを確認すると同時に

糸のような手で男性を指し示すと

「樹木。傷・・・ダメ!!」

レーヌ族にしては珍しく大きめの声を出して注意をする。それに對して男性は申し訳なさそうな雰囲気で

「ああ、すまない。・・・申し訳ありませんでした。」

後頭部をかくような仕草をしながら、素直に頭を下げ謝罪した。その様子にそのレーヌ族も納得したのか、許すと言いついて消える。そして、その場には蒼溟と男性が対面するように座る姿が残った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

しばし無言。

えーと、どうしよう。

困惑する蒼溟に男性は口元をにやりと笑うと

「驚かせてすまなかったな、少年。」

「あ、いえ。怪我がないようでよかったですね。」

そう返答する。

その言葉を聞いているのか、いないのか。男性はゴーグルと帽子を取り払った。

その下からは、覇気のある声に反して白髪交じりの茶髪を短く刈り上げた壮年くらいの男の顔が現れる。目や口元にはシワもあるのだが、新緑色の瞳には子供のような好奇心にあふれた力強い輝きがあり、見た目の割に澁刺とした印象を与えた。

「いやあ、試作機を飛ばしてみたのはいいものの調子に乗ってしまったようだ。」

豪快に笑うと、勢いをつけて立ち上がり。近くに浮遊している乗り物のようすを確認し始めた。

「これは何ですか？」

その様子を見守りながら、蒼溟も立ち上がり男性の隣りからその乗り物を観察する。

「うん？これはエアバイクだ!」

自慢げに言う男性の言葉に蒼溟は首を傾げてしまう。

村にバイクは無かったが、知識としては教えられている。だが、目の前に浮遊している乗り物は大まかな形状は確かにバイクのようだが、タイヤに当たる部分も存在しなければ、燃料を入れるべきタンクも存在しない。

「バイクにしては、形があまりにも違う気がするのですが。」

蒼溟の言葉に男性は少し驚いたような表情をしたが、少し考えた後に

「ほう。ちょっと、待っておれ。この動作確認をしたら説明してやる。」

嬉しそうな顔を向けた後に、右手首にあるリングと方向転換用のハンドルとを配線で繋ぎ中央部分の操作パネルで状態を確認していく。それを興味深そうに見つめていると、手際よく作業を進めた男性は、エアバイクを庭の隅へと移動させる。

蒼溟もそれに続き、宮殿の壁に二人して持たれながら話をするようになった。

「それじゃあ、まずは自己紹介からいくか。俺の名前はジンだ。」

男性は朗らかに笑いながら自分を指し示す。

「初めまして、蒼溟といいます。」

対して蒼溟は、丁寧にお辞儀をしながら挨拶をする。ここら辺は、村の教育の成果であろう。

「はっはっはっ。丁寧な挨拶をありがとよ。余程、親御さんの教育がしっかりしているようだな。」

二人は互いに笑みを交わし、先ほどの話をすることにした。

「この乗り物は、正式には飛翔艇ひしょうていっていう名前になっている。俺の道楽の一つとして研究開発したものでもあるな。」

それから、男性はこの世界の移動手段について説明をする。

「飛竜とかも確かに良いのだが、俺にしては物足りない時があつてな。」

どこか懐かしそうな眼差しで革に包まれた座席を撫でる。

そんな男性を見つめつつも、蒼溟はこの飛翔艇が飛ぶことが出来ることに對して興味があつた。

「蒼溟は、この世界に存在する魔素まそというのを知っているか？」

それは、この世界の住民たちにとっては常識的な事でもある。

魔素とは、大氣中に含有される元素の一つとされている。空氣よりも重いが、一定の密度以上には濃くならないもので、人族には扱えないものとされる。空氣に溶け込んでおり、普段は目に見えないのだが、現象を引き起こす際に視認することが可能になる。

「一応、知識としては知っていますが。」

スリールたちの調理法などはこの魔素を使用した魔術まじゆつにより行っている。

この術式は、生まれながらにして魔素を扱えるものたちが編み出した技術で人族以外では普通に扱えるらしい。稀に人族の中でも使用することが出来る者が存在するらしいのだが、その大半は他種族との混血などによるものとのこと。

「ふむ。それなら、人族が魔素を扱えないことも知っておるか。」

これに對して人族は魔鉱石まこうせきという素材により魔工術式まこうじゆつしきという技術を生み出した。その技術を開発するにあつた様々な試行錯誤があつたらしいがここでは割愛する。

「この飛翔艇は魔工術式により空中を上昇、下降することに成功した初めての試作機だ。それまでは、地面から数十センチ空中に停滞できるくらいしかできなかった。」

この空中停滞の技術は、主に馬車などに使用されている。

積載量により高さが制限されたりはするが、それに対応する技術や技巧はすでにあるため、長距離の移動などでは重宝されるのだ。

この技術が開発されるまでは、ゴムの木などの植物が無かつたために、木の輪に革で補強した車輪を使用していたのだ。

近場ならともかく、長距離では車輪と車軸の耐久性の悪さから陸竜りくりゆう

に直接、荷物をくくりつけての移動となったために一部のものたちしか使用できなかった。

「だが、試作ということもあり高低の移動はできても、推進力すいしんりょくがなかった。前に進めないのではエレベーターにしか使えない。それも高層建築がなければほとんど意味がないがな。」

苦笑しつつ、その時の苦悩を思い出すジン。

「それでは、どうやってこの飛翔艇は前に進んでいるのですか？」
さっきの出来事を見るに、かなりの速度を出していたように見えた。

「魔工術式では推進力を得るための技術はまだ開発できていない。」
その答えに不思議そうな顔を見るとジンは不敵な笑みを浮かべる。
「なに、種明かしは簡単だ。」

自分の右手首にあるリングを軽く示しながら、
「飛竜たちのように、魔術によって推進力を得ているのさ。」

どうやら、ジンは人族でありながら魔術を使用することができると例外的な存在のようで、自らの魔術によって生み出した推進力をリングと配線を経由して飛翔艇に供給して飛ばしているようだ。

その速度は、そのままジンの魔術の強さでもあるようだ。

「それでは、ジンさん以外は乗れたとしても移動手段としては使えないということですか。」

理解が早くてよろしい、という感じで満足気に頷くジン。

「まあ、改良の余地が多分にあるということは研究者としては面白いから気にもしないだろうがな。」

蒼溟の頭をわしゃわしゃと撫でながら、ついでに自分を呼ぶときに「さん」付けはいらないと付け加えておく。

「久々に、忌憚きたんなく話せるのは楽しいものだな。」

それから、二人して様々な道具や機械に対して雑談をする。

まあ、内容的には形や色はどんなのが好きか、スピードを限界近くまで出した時の恐怖と興奮についてだとか、他愛もないことだが、

「そつえば、ジンは人族なのによくこの森に入れたね。」

不思議に思つて聞いてみると

「ああん、そんなもの。用事があつたから入れてもらえたのさ。」

革製の上着の内ポケットから煙草を取り出して吸いながら答えるジンの姿は、どう見ても不良中年オヤジだった。

「ジン、吸殻を落とすとレーヌ族のヒトに怒られるよ。」

呆れつつも注意すると、おつといけねえ。と携帯灰皿を準備するジンだった。

「それにしても、ここはいつ来てもどかなあ。」

感慨深く呟くジンの姿を横目に二人して空をぼんやりと眺めていると、扉の方からヒトの気配を感じた。

そちらに目を向けると

「なんだ、こんな所にいたのかジン。」

そこには、よく知る気配をまとった身慣れたはずの女性がいた。

一部を金の飾り紐と一緒に編んだ綺麗な純白の髪を背中になびかせ、ワンピースみたいに上下一緒の白地にさり気ない薄紫の刺繍に女性的な身体の曲線を強調するような飾り帯や装飾。彼女の藤色の瞳をより一層引き立てている。

別人のように思えて、僕は見惚れてしまった。

「あん？アルシュか。それに、フェリシダーまで。」

その後ろには、藍色の髪をポニテールにまとめ動きやすさを重視したような黒っぽい軍服のような装いでありながら、襟首や袖口には金系の刺繍でさり気なく装飾が施され、華美ではないが洗礼されたアルシュと同じくらいの妙齡の女性がいた。

よく見ると、瞳の色がジンと同じ新緑色であった。

「はあ、ジン。その姿は品が無さ過ぎるから止めてくださいといつも言っているでしょう。」

フェリシダーと呼ばれた女性は額に手を当てながら呆れたように

言う。

その言葉にジンの方を振り返ると、いつの間にかしゃがみ込んでいて、足元には携帯灰皿を置くその姿は・・・不良のようだった。「まったく、ハーディ殿が教えてくれなかったら気付かないところだったぞ。」

フェリシダーの言葉に顔をしかめると、

「そうは言うが、フェリシダーの飛竜に叩き落とされたんだぞ。」

苦情を言うジンに、あっさりと返すのは

「どうせ、何か調子に乗って邪魔扱いされたのでしょう。」

あ、それは近いかな。

事情を知る蒼溟は思わず頷いてしまった。

それを見たジンが、すかさず頭を叩いてきた。

「まあ、いつの間にか蒼溟とも仲良くなっているようだが。続きは室内でしないか？」

アルシュの言葉に異論などなく、四人揃って宮殿内へと入っていく。

ジンが乗ってきた飛翔艇^{エアバイク}は、ハーディが気を利かして屋上庭園へと運んでくれたようだった。
いつの間に？

1 - 9 初めての人族（後書き）

ジン登場！こういうキャラは好きです。

1 - 10 もう一人の異邦人

前方を歩く二人の女性。

普段の装いとは違い、女性らしいアルシュの後ろ姿は、元々の容貌の美しさもあるがその洗練された動きからも圧倒される。

背中部分は髪に覆われて直視することができないが、腕の辺りや艶やかな髪に見惚れてしまう。さらに、腰から臀部にかけての曲線。

飾り帯による色彩の違いにより一層ひきたてられたそのまるみと動くことにより確認できる脚線美にドキドキしてしまう。

自分の中の何かを刺激されているように感じて蒼溟は視線を逸らし
そ
てみる。

逸らした先には、アルシュの隣りを歩くフェリシダーと呼ばれた女性
性の後ろ姿。

アルシュと違い、こちらの装いは色気のない軍服でズボンを着用している。だが、女性らしい曲線というのは損なわれることなく見てとれる装いでもあった。

上着は腰の辺りを若干隠すくらいの丈で、腰にある革製の剣を下げるための帯らしきものを身にまとっていた。剣は、預けてあるのか所持しておらず、数個の金具が動いたびにカチャカチャと音を立てて揺れていた。

その金具と同じくらい的位置に見える臀部のまるみは、アルシュ以上にしっかりと見てとれて、そこから始まる脚線と相まってかなり
あ
艶めかしい感じがした。

「・・・・・・・・・・」

視線を足元へと移す蒼溟の姿を隣で見ていたジンは、ニヤニヤとしながら

「少年、どちらが好みだった。」

ビクと反応する少年の初々しい様子を面白がりながらもさらに続ける。

「どっちも中々、発育よろしく悩ましい曲線をさらしているからなあ。」

好色そうな視線をやりつつも、横目で少年の様子を観察する。

「アルシュのチラチラ見える脚線もいいが、フェリシダーの尻もなかなかのものだ。」

少年の首に腕を回し、逃げることを許さないばかりにたたみかける。

「で？少年としてはさっきからどこに視線を送っていたのかなあ。」

「
楽しそうな壮年オヤジの様に、とぼけるように視線をあさつての方向に向けながら」

「・・・別に、僕は普通に前方を見ていただけですよ。」

そんな少年に小声で追い打ち。

「ほうほう、しっかりと観察していたと。」

その瞬間、真っ赤になる少年を面白そうに見ながら

「何も告白しろとか言ってるわけじゃねえ。どっちの後ろ姿を見て気になったのか。それを聞いているだけさ。」

答えるまでは、この腕を放してやらんとばかりに力を込めて問い詰める。

そんな男性陣の会話を当然のことながら、女性陣も聞いていた。

元々、二人とも常人よりも身体能力が高いため、小声であろうともその内容を聞き取ることができるのだ。

普段であれば好色オヤジのようなジンの台詞に注意をするところのだが、アルシュはもちろんのこと、初対面であるフェリシダーも少年がどう答えるのか興味をひかれて、あえてそのまま聞こえないフリをしていたのだ。

ほれ言え、はやく言え。とばかりにせっつくジンの様子に半ば諦めと困惑を混ぜたような表情で

「えと、・・・アルシュの・・・方。」

小声で言葉をにこしながらも答えた蒼溟に満足そうなジンは「なるほど。見えそうで、見えない辺りが心くすぐると・・・なかなか、通な好みだな。」

あえて言葉にしなかった内情を指摘されて顔を真っ赤にする少年の首を開放しながらも楽しそうに笑うジン。

言われたアルシュの方は満更まんざらでもない様子だが、フェリシダーの方は若干面白くない。

「ジン、品のない馬鹿笑いはやめなさい。」

その抑揚をおさえた声に、蒼溟は叱られた子犬よろしくシユンとしたが、注意されたジンはその内心を読み取っているのかニヤニヤしていた。

宮殿の中央部、4階部分の部屋に入るとレーヌ族によるものの、テーブルには4人分の紅茶とお茶菓子準備されていた。

一瞬、共に入室してよいのか戸惑った蒼溟だが、いまさら退去するのも変だなど思いそのままついていった。

着席する際に、ジンはフェリシダーの隣りに座り、アルシュはフェリシダーの対面席へ。

蒼溟はどこに座ればいいのか迷ったのだが、アルシュがさり気なく自分の隣を叩いて示してくれたのでそこに座ることにした。

「んじゃ、まあ。今さらだが、改めて自己紹介をしておこうか。」

蒼溟が着席したのを確認するとジンがそう言った。

「まずは、俺の名前はジン・デステイノ。隣りの娘は孫だ。」

ジンは隣りを親指で示しながら蒼溟の方を向いて言う。

「・・・フェリシダー・デステイノだ。宜しく、少年。」

ジンの仕草が気にいらぬ。と表情と態度で表しながら、蒼溟に対しては優しい笑顔で挨拶をする。

「東雲蒼溟しのめそうめいです。宜しく願います。」

二人に、特にフェリシダーを意識しながら丁寧にお辞儀をしながら挨拶をする。

「この二人は私の旧知の友人で、信頼に足る人物だ。」

微笑みながらアルシュが補足する。

「ひとつ質問してもいいか？蒼溟、東雲というのは苗字なのか。」

ジンが何かを確認するような雰囲気です。尋ねてきた。それに対して蒼溟は気負いなく

「はい、苗字です。僕の村の住民は全員、東雲を名乗ります。」

そんな二人の様子に何を疑問に思っているのか理解できないのか、フェリシダーが口をはさむ。

「ジン、その苗字がどうかしたのか？特に特別なものとは思わないが。」

首を傾げるフェリシダーに何でもないことのように

「あん？別に苗字事態に意味はないさ。ただ、その苗字だと俺と同じ日本人なのかと思ったから確認しただけだ。」

その答えに驚いたのは蒼溟の方だった。

「え？ジンはこちらの人じゃないの！？」

その様子に意地悪そうな笑顔を浮かべるジン。

「おう。俺はお前と一緒に異邦人と呼ばれるヤツさ。」

呆然とする蒼溟にアルシュが説明をする。

「今回、ジンを呼んだのは蒼溟のこれからに対して、同じ立場の方が良いと思ったからだ。」

その言葉に、意識を取り戻した蒼溟は少し情けない顔で

「・・・ここに居ては、いけないの？」

蒼溟の表情に苦笑しながらアルシュは

「そんな事はない。」

そう答えながら、慰めるように蒼溟の頭を優しく撫でる。

二人を微笑ましそうに見ながらフェリシダーがフォローする。

「そう言うことじゃないのよ。蒼溟は異邦人だから、この世界の事

もその立場もよく理解していないと思う。経験者の言葉を聞くのも今後の指針を決める材料になるだろうという思いから呼ばれたの。」

その言葉にほっとしたような様子の蒼溟を面白そうに観察しながら「そう難しく考える必要はねえさ。外の世界の話を聞いて、好奇心が湧いたら出てみればいいし、特に必要がないならこのまま留まればいい。それだけの話だ。」

何でもないことのように軽く話すジン。

実際はそんなに簡単なことではないのであろう。だが、自分に心配をかけないように配慮してくれる三人の気持ちが嬉しいのと、安心感から素直に頷いた。

「蒼溟は素直ない子ね。・・・ジンとは大違い。」

フェリシダーの言葉がいつの間にか砕けたものに変わっていた。

ジンは最初から砕け過ぎのようにも感じるが・・・そこでふと思ったのが。

「そういえば・・・」

蒼溟のつぶやきにアルシュが反応した。

「どうかしたの、蒼溟。何か、疑問に思ったのなら遠慮なく質問していいのよ。」

その言葉を聞いてさらに蒼溟は困惑しながらも

「アルシュの言葉使いがいつもと違うのは、友人の前だから？」

その質問に、バツが悪そうにそっぽを向くアルシュ。フェリシダーは半眼でそんな友人を見つめる。

「アルシュ。もしかして、またあの変な言葉使いをしていたの。」

友人の言葉に、とっさに言い訳を始めるアルシュ。

「い、いや。ほら、あの言葉使いの方がなんとなく威厳がありそうに感じない？」

「威厳というよりも、ババ臭い感じだと思うがな。」

容赦なくツツコミを入れるジンを睨むとフェリシダーが呆れたようにため息をつく。

「二人とも、言葉使いにはもう少し注意してほしいわね。」

怒られた二人は、どちらがともなくフェリシダーから視線を逸らした。

そんな三人の親密なやり取りに意識せずに微笑む蒼溟。

「ほら、蒼溟にも笑われているわよ。」

と言われて、ジンとアルシュからちよつと睨まれてしまった。

紅茶で喉を潤してからジンが再び話を戻す。

「それで、蒼溟の村の連中が全員同じ苗字というのも不思議だが、とりあえずこちらにはどうやって来たんだ？」

その言葉に蒼溟は今までのことを説明した。

「ふむ。寝ている状態からの転移か。そうすると、俺と同じ状況で放り込まれたってことだな。」

ジンがそう言うのと二人の女性が以外な顔をした。

「なんだ、ジンは寝ていた状態でこちらに来たのか？」

それに対して、ジンは話していなかったか？と言いつつも

「おう。俺の場合はケンカした後につたた寝していた時にだな。目が覚めたら、転移した後で、見知らぬ岩室に横たわっていたのさ。」

その後のことは、フェリシダーたちが知つての通りさ。と肩をすくめながら言う。

「ジンは、こっちに飛ばされた後に元の世界に戻りたいとは思わなかったの？」

蒼溟の質問にジンはちよつと思考してから答えた。

「まあ、俺の場合は特に思わなかったな。元の世界に不満があつたわけではないが、これといって執着もなかった。それに個人的にちよつどいいタイミングでもあつたからな。」

その言葉は二人にしても初耳だったのか、ちよつと驚いた表情をしていたがあえて口をはさむことをしなかった。

「蒼溟は、元の世界に戻りたいのか。」

何かを確認するように問うジンの表情はつかみどころがなかったが、その声には優しさが感じられた。

「僕は・・・出来る事なら、帰りたい。」

自分の内面に問いかけるように、ちよつと間をあけながらも正直な気持ちを言う。

「そうか。・・・戻る方法については俺も知らん。正直、戻れるのかも。」

ジンは嘘偽りなく、正直に答える。

「それに、今まで見聞きした中に異邦人が元の世界に戻ったという話は聞いたことがない。だから、まずは手掛かりを探すことから始めなくてはいかんがな。」

その言葉に、異邦人となった人達はジンのようにこの世界で暮らし、その一生を終えたことが察することが出来た。

無言でいる蒼溟の姿に、アルシュもフェリシダーも声をかけることができなかった。

「なに、そんなに落ち込むことはないさ。他の連中も勝手に連れてこられたが、順応している内に居心地が良くなって、住みついた感じだからな。」

蒼溟の頭を、身を乗り出してまで、乱暴に撫でる。

「それにだ、最終手段として女神本人に問いかけるというのもあるからな。」

にやりと笑うジンの姿と手の感触に慰められて、蒼溟は微笑んでみせた。

「さて、それじゃあ。小難しい話はこれくらいにしてだな。」

気分を変えるように手をパンと叩くとジンはアルシュに向かって真剣な顔で

「メシにしないか？」

色々と台無しな感じではあるが、それに異論があるはずもなく。

「そうだな。ジンもフェリシダーもしばらくはここに滞在することだし、ご飯にしましょうか。」

苦笑をするアルシュとフェリシダーを放置して、ジンは蒼溟の腕を取ると

「よーし、まずは腹を満たすことからだ。腹が減っている時は口
くなことを考えないからな。ハーディ、案内を頼むぜ。」

扉付近に控えていたファントスマ族の執事に気さくに声をかけな
がら、部屋を出て行く。

「やっぱり、ジンに蒼溟を任せてよかったようだな。」

アルシュはそんな二人を見送りつつ言々と、フェリシダーは

「そうですね。でも、悪い遊びも教えそうで心配ですけど。」

アルシュと苦笑を交わしつつ、二人の異邦人を追いかけるのであ
った。

1-11 大人たちの思惑

その日の夜。

ジンとフェリシダーはそれぞれに3階部分にある部屋をあてがわれ、今はジンの部屋にアルシュとフェリシダーの三人で部屋にある応接セットのソファに座りながら、晩酌をしていた。

「さてと、正直にいつて色々大変だな。」

ジンは手酌で入れた酒を一気におおると開口一番そう言った。

「それは、帰る方法を見つけるのが困難ということ？」

フェリシダーは果実酒をアルシュのグラスに注ぎながら訊く、

「まあ、それもあるが。もうひとつは、蒼溟^{そうめい}の出身地が予測できないのが、大きいな。」

酒を注ぎながら、フェリシダーを見る。

「ジンとは違うところから来た。ということですか？」

グラスを包み込むようにしながらアルシュが問うと

「その可能性もある。俺が居たのは地球という所の日本国だ。苗字からすると、蒼溟もその可能性が高いのだが。」

四人が食事を取る頃には、すでに時間も遅く。昼食というよりも夕食となっていた。

今日は色々とおって大変だったことから、蒼溟は早めに休むよう言われ、就寝までの間をジンと雑談して過ごしたのだ。

「蒼溟の話聞くかぎり、俺の認識と食い違っていることがあり過ぎる。」

蒼溟は、自分の村がどこにあり、どんな名前なのかを知らなかったのだ。

「日本という国は、四方を海に囲まれた島国でな。その国民のほとんどは海を知っているし、内陸に住むヤツなら逆に飛行機やヘリコプターといった乗り物を知っている。」

海に面していれば、船は必然的に視界に入る。内陸であれば、緊急時の移動手段として一度は目撃しているはずなのだ。

ところが、蒼溟はその両方を目にしたことが無いと言った。知識としては、教えられているようなのだが、実物を目撃したことが無いと言ったのだ。

「俺も自分が居た世界を隅々まで旅したこともなければ、その全てを知っているわけじゃない。だが、それを踏まえても蒼溟の村は不思議過ぎるんだ。」

ジンは手にしたコップを見つめながら、独白するように言う。

「・・・最悪、蒼溟はジンとは別の世界から来た可能性もあるというのか。」

フェリシダーの言葉にジンは複雑な表情をする。

「別の世界なのか、生きた時代が違うのか・・・。」

ジンの認識では考えられないことが多々あるが、逆に日本人としての感性や風習などの共通点を持つ蒼溟を見ると、こちらとこちらの時間経過が違うのではないかとも思う。

そうになると、帰る方法が見つかったとしても蒼溟にとって悲しい結果が出ることになる。

「それに、異邦人である限りクリミナルの連中に目を付けられるかもしれない。」

忌々しげに口にするジンに、二人も複雑な表情をする。

クリミナルとは、この世界に住むものたちに敵対する勢力の総称である。

その実態や規模は不明。構成員すら把握することが出来ないのだが、様々な国や種族の紛争の陰には必ず彼らの暗躍が確認されていた。

「ヤツらの目的が何なのかは知らん。だが、何故か異邦人を仲間に引き入れようとしやがる。」

ジンは虚空を睨み付けながら、自らに降りかかった事柄を思い出していた。

「この森に居れば、クリミナルも手出しをできないのでは。」

フェリシダーの言葉にアルシュは悲しげに首を振った。

「無理ね。」

その言葉を引き継ぐようにジンが言う。

「クリミナルの奴らは、人族で構成しているわけじゃねえ。それ以外の種族であれば、この魔の森に入ることも可能だからな。」

それは、ジンの経験からの言葉だった。

かつて、ジンは一人の少女を守るためにこの森に保護を頼んだのだ。魔の森は人族が^{ひともく}入ることが出来ない場所であり、多民族もおいそれと近づくことが出来ない場所でもある。

女神の加護のもと、そこから出なければその身は安全だと思ったのだ。

「奴らがどうやったのかは分からないが、少なくとも侵入することは可能だ。」

アルシュも彼女に従う多民族の者たちも住むこの地で、少女はいつの間にか連れ去られていた。その後、どうなったのかは誰も知らない。

「そうか。それなら、少しでも蒼溟に忠告をした方がいいな。」

その言葉にアルシュの方が戸惑いを覚えた。

「それも・・・どうかしら。」

フェリシダーが怪訝な顔で首を傾げる。

「蒼溟のヤツは、素直というよりもアンバランスだからな。」

その言葉にアルシュもフェリシダーも無言で続きを即す。

「少し会話をしてみれば分かるさ。知識も認識力も、多分戦闘力も申し分ないだろう。だが、自分の中に己という確固たるものを持っていないように感じる。」

「それは、状況によって流されやすいということ。」

フェリシダーの言葉に曖昧な表情を返すジン。

「もっと、最悪なことだ。暗示やまやかしにかかりやすいということさ。」

それは、魔素の満ちたこの世界では致命的なことだった。

「それは尚更、クリミナルがほっときませんね。」

思案するアルシュとフェリシダーの二人を見つめながら、ジンは心の中で自問自答する。

クリミナルが本当に厄介なのは構成員がわからないことじゃねえ。

ジンは、この世界に来て自分自身が変わったことを実感していた。身体能力や魔素まそを扱うこともそうだが、寿命がほかの人族どころか、他の種族よりも長命になっていたのだ。

最初はそんなことには気づかなかった。

自分が生まれ育った場所とは異なる常識に環境、その全てが未知であり、不可解であり、興味の対象だった。好奇心の赴おもむくままに行動をした。

その心の根底には、いつ、どこで死のうと悲しむ者がいないという事実と自分がいなくなったところで周りは変わらない。という諦観からだった。

気付いたのは、夢中で旅をして古巣に戻った時だった。そこには、かつての知人たちの老いた姿とパツと見た感じ変わらない己の姿。自らが、この世界で異質であることを実感させられた瞬間でもあった。

どうこう言おうが、結局のところ異邦人とは異質な存在だ。自らの力で居場所を作らなければ、生きていくことも受け入れられることもありはしない。

クリミナルの連中のなかには、居場所を作れずに迫害された異邦人がいるはずだ。

「ちっ、面倒くせえなあ。」

眼光鋭く、その瞳には射抜くような殺気を纏まとわせたジンの姿に、アルシュもフェリシダーも息をのむ。

それに気付いたジンがごまかすように頭をかきむしると、気分を

かけるように

「だあ——！！チマチマ考えるのは性にあわねえー。」

一気に酒をあおり、大声で叫ぶ。

突然の行動に、ビックリする二人をよそに

「物事、なるようにしかならん！とりあえず、行動あるのみだ。」

開き直り、孫娘とその友人にニカツと笑いかける。

「・・・そうですね。ここで足踏みしたところで状況は変わりませんし。」

アルシュが苦笑しながら言うと、

「まっ、ジンにシリアスな雰囲気は似合わないしね。」

フェリシダーがおどける様に肩をすくめて言う。

三人は軽く笑いあう。

「まあ、とりあえずはあの箱入り息子を世間の荒波に放り込むか。」
ジンの提案に、アルシュもフェリシダーも賛成する。

「箱入りというよりも、重箱に入っていたような感じがするけどね。」

フェリシダーの毒舌に、

「でも、その重箱の中には得がたい知識の宝庫だったみたいよ。」
アルシュが付け加える。

「どういう事なのか、問いかける二人にアルシュは自分が感じていたことを説明する。」

「蒼溟は、何もできないわけじゃないみたいなの。」

ここに滞在中に、ハーディやスリールを通して下働きの者たちと交流を深めていた。

その際に、雑務を教えてもらったり、雑談として一般常識を学修したり、文字なども子供たちから教わったらしい。

「普通であれば、経験豊富な執事のハーディや書庫の文献から一般常識を覚えようとするわ。だけど、それはあくまでも偏った知識になりがち。」

それは、誰もが陥りがちな過ち。

すでに、前の世界での常識などを身につけているが故に、子供でも知っている知識をもっていないことが恥ずかしく感じて、容易に聞くことができない為に起こることだ。

「蒼溟には、その拘り^{こたわ}がなかったということ？」

アルシュの言葉に、フェリシダーが簡潔に言う

「うーん、等価交換みたいな感じかな？薬草の知識が豊富で、それを教えるかわりに自分の知らないことを教えてもらう。という感じ。」

「無知ゆえに周りからバカにされ、その事が許せなくて、結局は人と交流することが出来なかった異邦人も過去にはいたのだ。」

「なるほどねえ。プライドが無いわけじゃあないが、いつときの恥を嫌って一生の恥をさらすほどのバカではないという事か。」

ジンの率直ではあるが、容赦のない感想に苦笑しつつも頷くアルシュ。

「それなら、なおさら世間に放り出したほうが手っ取り早いな。」

ジンの意見にフェリシダーは具体的なことを聞くことにした。

「それで、放り出すのはいいが、どこにするのです？下手な所におもむけば、それこそクリミナルの連中に見つかる可能性が高い。」

その言葉に何でもないことのように

「ああ、そんなもの。俺らの国を拠点にすりゃあいいさ。それに、俺も同行するつもりだしな。」

ジンの言葉に、驚くアルシュと睨みつけるフェリシダー。

「良いのですか、ジン。他国から色々と難癖をつけられる要因にもなりかねませんよ。」

アルシュが心配すると、

「それに、同行すると簡単にいつてくれるが自分の立場を考慮しているのか。」

フェリシダーが苦言を呈する。

それらの意見に対してジンは不敵に笑いながら

「はっ、そんなもの気にするな。国に関しては王族連中がなんとか

すりゃあいいし、俺の立場なんざあ、ドブにでも捨てておけ。」

言い出したら滅多なことでは撤回しないことを知っている二人は、深いため息をついた。

「『周りの迷惑もたまには考慮して下さいね。』」

異口同音に言われたセリフを聞き流すジンだった。

こうして、本人のあずかり知らぬ所で旅立ちを決められた蒼溟。
実際には、準備などもある為にすぐにはいかないが、魔の森に
留まるという選択肢はいつの間にか消されてしまったのだった。

1 - 12 少年の資質

いつものように、夜明け前から狩獵を行った蒼溟^{そうめい}は、本日の収穫物を加工していた。

「うん、保存食もだいぶ集まったかなあ。」

干物のひとつを火で炙^{あぶ}って、アオと一緒に味見をしていると建物の方からジンが歩いてきた。

「おう、おはよう・・・。」

大きな欠伸^{あくび}をしながら、ジンが挨拶をしてくる。

「おはよう、ジン。」

蒼溟の挨拶を受けながら、干物のひとつを取ると当然のように炙って食べ始めた。

「おつ、なかなかうめえな。さり気なくきいている塩とコシヨウがまたいい感じた。」

そして、蒼溟の傍^{そば}にいる薄青色の球体生物を目にすると

「なんだあ？このゴム毬^{まり}みたいな物体は。」

指で突つつくジンにアオが嫌がるそぶりをすると、人の悪い笑みを浮かべて左右の頬？をつまんで引つ張った。

「おおー！伸びる伸びるう。おもしれえな、コレ。」

喜ぶジンにアオの堪忍袋の緒が切れたのか、

バッチ——ン！！

その弾力を駆使して指から逃^{のが}れると、ジンの顔面めがけて勢いよくぶつかりに行った。

「ぐああ！いつてえ——。このゴム毬野郎、よくもやりやがったなあッ！！」

ジンとアオの戯れを横目に、蒼溟は加工作業を順調に進め、片づけを始めた。

そのまま、二人？を見捨てて宮殿の方に向かうと・・・丁度、こちらに来ようとしていたフェリシダーと会った。

「フェリシダーさんにアルシュ、おはようございます。」

背後に眠たそうな顔をしたアルシュにも挨拶をする。

「おはよう、蒼溟。ところで、一人なのか？ジンはこちらに来なかったか？」

その問いに無言で背後を指差す。そこには、未だに戯れるジンとアオの姿がある。

「・・・何をしているんだ。」

頭痛がするといわんばかりに、額に手をやり、深いため息をつくフェリシダーに

「あらあ、何時の間にインフィニティ殿と仲良くなったのかしらあ」。

未だに眠気が取れない様子のアルシュ。

「まあ、アレは放っておこう。蒼溟、よかったら今から私と鍛錬をしないか？」

気を取り直したフェリシダーが提案してきた。

「いいですけど、武器とか持っていないですよ？」

フェリシダーはニッコリと笑うと、手にした木刀を差し出してきた。

あれ？さっきまで手に持っていましたか？

不思議に思いつつも木刀を受け取り、庭の空いている場所へと移動する。

フェリシダーと蒼溟が向かい合う。お互いに何か言葉を交わしているのを眠気の去らない頭でばんやりと見つめるアルシュ。

蒼溟が早起きなのはいつも通りだけど、フェリシダーたら何で私

まで早起しなくちゃいけないのかしら。

半眼になりながら、二人の様子を見る。

どうやら、鍛練について話をしているようなのだが、アルシュは武器を使つての戦闘をしないので、二人が何を話しているのか理解できない。普段であれば、それなりに思考できるのだが、今は眠気で何を聞いてもさっぱり分らない。

何でもいいから、早く始めないかしら。

そんな事を思っていると、二人は礼をして、木刀を構えた。

フェリシダーは剣を両手で持つて、左側に垂らすように構える。対して、蒼溟は気負う様子もなく、正面で構える。

一拍後、フェリシダーの方が動いた。まずは、小手調べのように蒼溟の剣を弾くように、下から勢いよく打ちつける。
ガシーンッ。

なかなかの勢いだつたのか、木刀同士の接触する音が響くが、蒼溟の剣は最初の構えから動かない。それに、僅かな驚きの表情をしたフェリシダーだが、そのまま連続で蒼溟に剣をふるう。それらを最小の動きで捌く蒼溟、お互いに立ち位置はほとんど動かない。

「くっ、せいッ。やあ、・・・。」

縦横無尽にふるうフェリシダーの剣に対して、蒼溟は受け流し、細やかな足運びでよけていく。それを追うように、フェリシダーも動いて行く。

「・・・ハッ！」

蒼溟が半身になつた瞬間、脇の下を狙うようにフェリシダーの鋭い突きが放たれた。それを、蒼溟は剣の柄部分で弾き飛ばし、返す動きでフェリシダーの首元へ剣を突き付けた。

「くうッ、参りました・・・。」

しばらくの静止後、フェリシダーが悔しそうに負けを認めた。

この間、半時にも満たない攻防であるにも関わらずフェリシダーは荒く呼吸するのに対して、蒼溟はまだまだ余力があるのか平然としていた。

「はあ、はあ、はあ・・・ふう。」

休みなく連続で剣をふるった為に私の呼吸は乱れに乱れていた。

正直、蒼溟の実力を侮^{あなど}っていた。

異邦人の大半は、戦いを知らないものが多いため、仮に武術を学んでいても、それは実戦を経験したことのない型だけのものだと思っていた。

ところが、蒼溟の剣には実戦を経験したものの特有の気迫とでも言うものが備わっていたのだ。これは、正直予想外だった。

フェリシダーは気をきかしたレーヌ族からタオルと水を貰い、喉を潤す。蒼溟の剣には、まだまだ余力を感じていた。まるで、剣の師匠がジンを相手にしているような感じた。

そう、格上の戦士を相手にしているような油断ならない雰囲気。

「蒼溟、ありがとう。それにしても、スゴイな。」

フェリシダーが爽やかな笑顔で礼を言うと、蒼溟は少しはにかみながらも

「いいえ。僕の方こそ、ありがとうございます。」

お辞儀をして、木刀を返すとレーヌ族の毛玉のような身体を手に乗せて、失礼します。と言って建物の中へと行ってしまった。

「フェリシダー、どうだった？」

眠気から覚めたらしいアルシュの言葉にフェリシダーは、

「あははは、完敗だな。」

蒼溟を試すつもりが、逆に試されてしまった。もう、笑うしかない。

アオと戯れていたジンは、距離を置きながらも二人の鍛錬をみて

いた。

「へえ、なかなかやるじゃねえか。」

フェリシダーは可愛い孫娘だが、こと戦闘などの訓練には手心を加えずに幼少の頃より鍛えてきた。剣の師匠から師範代クラスの腕はあると聞いたことがある。

「それをあつさりとかわしてみせるかあ。おもしれえ。」

その悪ガキのような笑顔に、アオはやれやれと言った様子で一鳴きすると姿を消した。

ジン、フェリシダー、アルシュの三人は部屋に戻ると今後について話し始めた。

「アルシュ、近日中に蒼溟を連れ出すぞ。」

「えっ?! 準備期間を設けるのではなかったのですか。」

ジンの唐突な宣言にアルシュが慌てたように聞く。

「ああ、ありゃ〜準備期間なんざあ必要ねえわ。」

その言葉にフェリシダーも賛同する。

「そうね、聞く限りでは必要なさそうね。そもそも、保存食の確保をしている時点で本当にここに留まるつもりだったのかしら?」

その言葉にアルシュも考えさせられる。

執事のハーデイや調理師のスリールたちの報告から蒼溟の行動はまるで旅立ちを予感させるような感じではあった。

旅に必要なサバイバル技術はすでに立証されているし、こちらの食材の調理の仕方に調味料の作成、加工まで出来るし、簡易の修繕作業まで身につけている。

「そうね、・・・でも。」

そうは思っても、あの少年が自分のもとからいなくなると思うとアルシュの心中は複雑になるのだった。

「・・・まあ、明日にも出立するわけじゃねえ。蒼溟のヤツにも言

わなきゃならんしな。」

ジンが慈愛に満ちた眼差しを一瞬したかと思うと、すぐにおどけたように言った。

その心使いに感謝しつつ、アルシュは蒼溟と二人きりで話をしようと思決心する。

友人のそんな姿を横目にフェリシダーも考える。

ジンが一人で国を出てしまうと、色々とマズイことが起こりそう。だからといって、蒼溟ひとりで旅立たせるわけにもいかない。「うーん、どうしようかなあ。」

それぞれに悩む二人の娘を見やりながら、ジンの心中はただ一言を想っていた。

おもしれえ。

蒼溟は少年でありながら、その資質も習得している技術も、ほとんどが規格外だ。何もかもがアンバランスでいながらも、絶妙な感じで均衡を保ってやがる。

自分が出来なかったこと、諦めてしまったこと、それらをヤツならやってくれるかもしれない。そう期待させてくれる何かを持っている。

それを面白いとも思いつし、蒼溟が進む未来がどうなるのか楽しみでもある。

ジンは自分の全てを賭けてもいいと思える人物に出会えたことに、運命とか言うモノに感謝したい気分だった。

1 - 13 別れという名の始まり

「それじゃあ、アルシュ。行ってきたーす!」

僕はジンの操縦するエアバイク（飛翔艇）の後部座席にまたがると、見送りに出ていたアルシュと傍らに立つ執事のハーディに向かって手を振った。

事の起こりは、数日前……。

「蒼溟^{そうめい}、出かけるから付いて来い。」

僕の部屋にきたジンが開口一番にそう口にしたことからだった。

「どこに行くの?」

森の中にも行くのだろうか?それとも、ファンタスマ族たちの住む町だろうか?

「俺の国を拠点に、色々と……だな。」

へえ……、何で僕が?!

「何で、とか思っているのか?理由は簡単だ。俺が逃走するための口実だツ!」

堂々と宣言したあ!?

「ええ、どうして僕が同行すると逃走の口実になるんですか。」

僕の言葉に、ジンは異邦人同士の方が物事の説明がしやすい上に、魔素を扱った魔術を教えやすい事などを理由に説得できるから……とのこと。

「それに、俺はこう見えて色々とその世界で経験しているからなあ。お前に面白いものを見せたり、楽しいことを教えてやったり、色々したいのさ。」

僕の頭をその大きな手でグシャグシャにしながら、ジンは楽しそうに笑った。

「でも、……それに、みんなに挨拶をしないと。」

あまり乗り気ではない僕に

「別に今生の別れじゃあるまいし、ちょいとお出かけするだけさ。」
気軽に考えればいいさ。と笑いながら旅立ちに必要なものを教えてくれた。それから、支度で大忙しだった。

旅の必須アイテムとして、「圧縮袋」というのを教えてもらった。これは、通常の布袋ではすぐに荷物がいつぱいになってしまふのと、旅する時に荷物がかさ張るのを防ぐために構想されたアイディア商品のようで、布地は魔術によって魔力を練りこまれたものを使用し、実際の圧縮に対しては、人族の魔工術式によって作成されている。

袋の留め金にある魔鉱石を操作すると、中身を見なくても一覽表示される優れもの。ただし、時間経過は通常なので、生ものを入れておくと腐るそうです。

その他にも、ジンやフェリシダーから魔術の基礎を教えて貰ったり、下働きの人達から魔術の応用…特に生活に密着した…ものを教えて貰ったり、レーヌ族からは付き人として同行を願い出るものがあったりと大変でした。

「どうした、蒼溟？」

魔の森上空を飛ぶエアバイクを操縦しながら、ぼんやりと物思いに沈んでいた僕にジンが声をかけてきた。

「数日前の事を思い出していたんだ。慌ただしかったなあと思って。」

「おいおい、なに年寄りくさいことをほざいてやがる。過去を振り返るなんざあ、もっとシワクちゃのジジイになってからでいいのさ。」

快活に笑い飛ばすジンに僕も過ぎた日々ではなく、これからのことに期待することにした。

「行つてしまわれましたね。」

ハーディの静かな言葉に私はかすかに頷く。

蒼溟の突然の旅立ちは、下働きの者たちから町に住む子供たちまで驚きと若干の寂しさ、それ以上の祝福を持つて受け止められた。皆、心のどこかで彼がこのまま留まるとは思っていなかったのだらう。

蒼溟が持つて行つた「圧縮袋」は下働きの者たちがひと針ひと針、健康と安全を祈願して作成したものだった。

その事を聞いて私は驚いてしまった。いつの間にそんなに皆から慕われていたのか。

「それにしても、あつさりで行つてしまったわね。」

蒼溟に旅立ちを誘いに行つたジンは、そのまま私の私室に来たと思つたら

「アルシュ、蒼溟を連れていくから宜しくう。」

と一言を告げるだけのものだった。

それを聞いた蒼溟の方がうろたえてしまつて、私が夜に二人で詳しい話をしようと微笑みながら言つと安心したように頷いてみせた。

「ジンから詳しい話は聞いているわ。蒼溟はどうしたい？」

私の問いかけに、蒼溟は少し考えると

「僕は・・・ここに居たいと思う気持ちと、ジンと一緒に世界を周つてみたいと思う気持ちが半々かな。」

その答えに、私は胸が締め付けられるような感じがした。

予想通りとはいえ、実際に本人の口から聞くとその衝撃は予想以上だった。

「正直、色々と・・・不安なんだけどね。」

少し俯きながら蒼溟が言葉を続けた。

「不安?・・・よかつたら、教えて。」

私は優しく聞こえるように注意しながら、先をうながす。

「・・・この魔の森に居れば、僕は村にいた時のような生活を続けられると思う。ハーディやスリールたちとも仲良くなれたし、何よりもアルシュが居る。」

その言葉に私の心は嬉しさで震えた。

「でも、そう思いながらもジンやフェリシダーと話をしていると、見たこともない外の世界に対して好奇心が抑えられないんだ。」

蒼溟は視線を上空の星空へと向ける。

「小さい時から僕は村の外へと出た事がなかった。それが普通だったし、不満もなかった。でも、突然見知らぬ世界に飛ばされて、強制的に村の人たち以外と会話して・・・。」

それは、今までの出来事に対しての彼が感じていた事柄だった。

いつも飄々（ひょうひょう）とした雰囲気で、動揺していないように見えた蒼溟だったけど、その内心は普通の少年のように不安や期待などでいっぱいだったようだ。

「ここで、みんなに出会えたことは本当に嬉しいし、感謝もしてる。でも、僕はもつというんな事を、様々な事を体験してみたい。」

そう言って、蒼溟は私を正面から見つめた。

「だから、アルシュ。身勝手だと思うけど、僕の旅立ちを許可して下さい。」

お願いします。と言って頭を下げる蒼溟。

「・・・蒼溟は勘違いをしているわ。あなたは私の客分として、ここに滞在しているだけ。だから、あなたが旅立つというのなら、私はあなたを止めることなんて出来ない。」

その言葉に、顔を上げた蒼溟は泣きそうな表情をした。その彼の頬を優しく包み込みながら、私は微笑んでみせた。

「でも、それは建前ね。あなたはすでに・・・私にとって、かけがえのない家族と同じ。」

その言葉に驚いたように目を見開く蒼溟に

「だから、辛かったり悲しかったりして、耐えられないと思ったら・

・いつでもここに帰って来ていいのよ。」

顔をそつと近付けて、額に口づけをする。

「私たちはいつでも貴方の帰りを待っているし、ここを貴方の家だ
と思っ**て**いいのだから。」

私の行動に驚いたのか、顔を赤くさせていく蒼溟。

その姿に私は愛おしさを感じていた。

「例え、貴方の行いで誰かが不幸になつたとしても、私たちはその
全てを受け入れるわ。家族**つて**、そういうものでしょ。」

少しおどけたように私は言う。

口調は軽くとも、その心に嘘偽りは無い。

彼を男性としてなのか、弟としてなのかの判別はまだついてはいな
いが、家族として受け入れる気持ちはすでに出来ている。

「必ず、私たちの元に顔を見せに来てね。」

だから、これは・・・私の願いでもある。

「うん、わかつたよ。・・・ありがとう、アルシュ。」

はにかみながら、蒼溟は私と約束してくれた。

遠ざかるその姿を、アルシュは見えなくなるまで見つめ続けた。

1 - 13 別れという名の始まり（後書き）

これにて、序章は終わります。
自分でした事ではありますが・・・ながッ!？

閑話01 露天風呂にて（前書き）

これは、1-12と1-13の間のお話です。
蒼溟がフェリシダーを「さん」付けで呼ばなくなったエピソードです
ね。

閑話 01 露天風呂にて

魔の森にて。

森の宮殿内部にある書庫には深夜にも関わらず、ほのかな明かりがついていた。

「蒼溟さま。」

机の上に置いたランプの灯りの下で読書をしていた蒼溟は、その声に後ろを振り向き。

「ん？・・・ッ！？」

驚きのあまり、しばし硬直してしまった。

そこには、燭台を片手にファンタスマ族の執事、ハーディが立っていた。

ロウソクの灯りに、その真つ黒な横顔を照らしていながらも、そこに陰影はなく。

暗闇の中でボンヤリと光る瞳に、なぜかハッキリと視認できる口元。本人に悪気は一切ないのだが、ひっそりとした気配に革靴の立てるコツコツとなる足音。

さらには、本人の肌と衣服は黒系なのに着用している手袋が真つ白だった為に、薄暗い室内の中で空中を舞っているように見える両手。

「・・・ハーディ・・・えっと、もう見回りの時間だった。」

蒼溟は背中に流れる冷や汗を認識していながらも、何事もなかったかのように訊ねる。

「はい。もう夜も遅いので、そろそろお休みになられた方がよろしいかと。」

ハーディは就寝前に自ら宮殿内を見回りするのが日課になっている。

ファンタスマ族は睡眠時間が極端に短いので、彼が就寝するということは随分、遅い時間ということになる。

「そうだね。明日も早いし、そろそろ寝ようかな。」

蒼溟は本を閉じて、片付けながら答える。

「その前に、お身体が冷え切っていらっしやるようですよ、お風呂にでも入られたらどうでしょうか。」

ハーディの提案にしばし、思案する。

確かに。

驚きのあまりに冷や汗をかいてしまったし、ドキドキしている心臓を落ち着けるためにも入浴してサッパリしてこようかなあ。

「そうだね、そうしようかな？」

あつ、でも着替えを取りに行かないと……。

蒼溟の独り言にハーディは微笑みを浮かべながら

「着替えでしたら、レーヌ族の者に頼んでおきますから。蒼溟さんは、そのまま浴場へと向かって下さい。」

ハーディの親切心からの微笑みは、どうみてもホラー映画さながらの不気味な笑みにしか見えなくて。

「……でも、わざわざ起こさなくても僕が取りに行けば済むことだと……。」

ハーディに申し訳ないと思いつつも、若干怯みながら言う。

「大丈夫ですよ。常に誰かが起きていますし、彼らにとってヒトのお世話をするのは楽しみのひとつでもありますから。」

他のヒトに迷惑をかけることを厭う少年の優しい心遣いに、ますます笑みを深めるハーディに対して、さらに恐怖心を煽られる蒼溟。

結局、その恐怖心も重^{かさ}なって、蒼溟はハーディの言うとおりにしたのだった。

脱衣所で手早く衣服を脱ぎ、身体を洗った蒼溟は、浴槽のひとつにゆっくりとつかっていた。

「はあ~~~~」

大きな光沢のある岩に背を預けながら、手足をゆっくりと伸ばしてくつろぐ。

「うーん、気持ちいい。それにしても、暗闇の中でハーデイに出会ったのはビックリするよなあ。」

普段はヒトの気配に敏感な蒼溟ではあるが、読書に夢中になり過ぎてハーデイに気付かなかったのだ。

そのうえ、ハーデイは執事として常に控えめに存在することを心にかけているため。注意していないとその気配を見失ってしまう。

これらが、偶然にも重なった結果・・・ホラー映画の特殊画像に負けず劣らずの恐怖心を煽る光景が出来上がったのだ。

「・・・本当に、怖かったあ~~~~」

幽霊やお化けなど平気な蒼溟にしても、あの光景は怖かったらしい。

そして、普段とは違った精神状態の為だったのか、この日の蒼溟は二度目の失態を演じるはめに陥るおちいのであった。

宮殿の中央部、3階の客間のひとつ。

妙齢の女性二人が親しげな雰囲気の中、雑談に花を咲かせていた。

「それにしても、アルシュと一緒に飲むなんて学園のとき以来ね。」

フェリシダーは深い赤色の果実酒をゆっくりと飲みながら、楽しみに微笑む。

「そうねえ。お互いに立場ある身としては、たやすく会える機会も無ければ、こんなにくつろいだ雰囲気で飲めないものね。」

確かに、肩のこる社交界みたいところでなければ顔を会わせな

いい、そんな場所では迂闊なことも出来ない。

お互いに苦笑しながらも、稀な機会を心から楽しむのだった。

しばらく、楽しいひと時を過ごし、そろそろ休むことにした。

「あつ・・・ねえ、アルシュ。今から露天風呂に入らない？」

頬を赤らめながら、楽しげにフェリシダーが提案する。

「ええ、いまから？・・・大丈夫なの？」

珍しく深酒している様子の友人に声をかける。

「大丈夫よ、これくらいの量。それよりも、久し振りに裸の付き合いをしよう？」

首を少し傾げながら言うフェリシダーの可愛らしい仕草に

「ツ！？・・・も、もうしょうがないなあ。」

アルシュはいとも簡単に陥落したのだった。

蒼溟が手早く身体を洗っている最中に、脱衣所ではレーヌ族のひとりが衣服を回収しに来ていた。

レーヌ族の固有魔術のひとつである転移を駆使して瞬時に現れ、その系のような手足で上手にカゴの中の衣服を折りたたみ、新しい着替えと交換した。

「あら？レーヌ族の・・・セイラね。」

名前を呼ばれ振り向くと、主であるアルシュとその友人であるフェリシダーが脱衣所へと入ってきた。

「こんにちは」

一言、挨拶と共に小さくお辞儀をする毛玉の愛らしい姿に二人は微笑む。

「お仕事の最中かしら？・・・ごくろうさま。」

フェリシダーの労いの言葉に、照れるように身体を左右にゆする。
「着替え・・・いる？」

二人の着替えも用意しましょうか？という問いかけに、

「そうね、お願いしようかしら？」

アルシュの言葉に了承の意志を伝えると、レーヌ族のセイラは姿を消した。

「レーヌ族って、ホントに可愛らしいなあ。それに、働きものだし。」

フェリシダーは微笑みながら、ジンに見習わせたいくらいだ…と呟きながら衣服を脱いでいく。その隣りでは、アルシュも苦笑しながらも自らの衣服を脱いで、湯浴み着を羽織る。

この時に、もし二人が酔っていなければ気付いたのかもしれない。働いていたレーヌ族・・・すなわち、誰かがすでに浴室にいることに・・・。

湯船の中で弛緩していた蒼溟は、誰かの話声と気配によって目を覚ます。

あれえ、誰だろう・・・こんな時間に？

偶然にも大きな岩によって蒼溟の姿は入ってきた人物からは隠れる位置にあり、また蒼溟もその人物を確認できなかった。

その為に、お互いが確認できたのはかなりの至近距離になってからだった。

「・・・ええッ?!」

「あら？」

「んっ？」

蒼溟、アルシュ、フェリシダーの順に驚きの声があがる。

襦袢^{じゆばん}：和服の下にきる肌着…のような薄い湯浴み着を身にまとった妙齡の女性二人の姿に蒼溟は思わず見惚れてしまう。

かけ湯をしたのだろうか？

薄い布地は所々濡れて透きとおり、その下の地肌にピッタリと張り付き。魅惑的な身体の曲線を露わ^{あらわ}にしていた。

アルシユは艶^{つや}やかな長い白髪を右側にまとめ、耳の下でゆるく紐で縛り、前に自然な感じで流していた。その毛先は胸の頂^{いただき}付近にかかり、柔らかそうな膨^{ふく}らみの大きさを強調するかのようでもあった。元々、全体的に純白な印象のアルシユであったが、いまの姿は白い地肌にほんのりと朱^{まじ}が交り、その身にまとう白く薄い湯浴み着の姿は穢^{けが}れを知らない乙女のようにでありながらも男を惑^{まど}わせる色香を醸し出す熟女のようにもあった。

それに対して、もう一人の女性

フェリシダーはいつも束ねていた藍色の髪を自然な様子で下^{おろ}していた。その綺麗な髪は彼女のしなやかな身体にまわりつき、女性らしい曲線を強調するように腕や胸元、赤みを帯びた頬に張り付いていた。

それをゆつくりとかき揚げて、後ろに流す時のちよつと緩慢^{かんまん}な動きに女性の象徴である大きな胸が揺れる。いつもの颯爽とした雰囲気はなりをひそめ、どこか気だるげな様子が何ともいえない妖艶な印象を感じさせる。

自分とは違う大人な二人の女性の妖^{あや}しげな色気に目を奪われて、そこから中々視線を外すことが出来ない。

蒼溟の視線を感じながらも、二人は…表面上は…動じることなく、少年と同じ浴槽へとゆつくりと入っていく。

その湯面の動きにようやく蒼溟は、自分を取り戻したのか慌てて視線を外す。

「あ、あの……。すぐに出るからッ!!」

視線をやや斜め上に向け、顔を真っ赤にしながら

「だ、だから、少し後ろを向いてもらってもいいですか。」

男の子の部分を手で隠しながら、懇願する蒼溟。

少年の初々しい態度に、普段からは考えられないくらい大胆な行動を取る二人。

「あら、いいじゃない。私の裸なんて、以前も見たのだし。」

毛皮に覆おおわれてはいるが、確かに獣姿のアルシュは裸体である。

彼女にとっては、獣姿も人の姿も、どちらも己である。

そういう意味では間違っではないが……。

「それなら、親睦を深める為に三人で裸の付き合いをするのも良いかな。それに、アルシュだけ呼び捨てで、私には「さん」付けなんて不公平だと思うなあ。」

フェリシダーもすかさず、調子を合わせる。

「エエッ!? いや、でも……。ほら、二人は女性で……。僕も一応、男なのだし。」

しどろもどろに反論するも、その姿は可愛らしく。

逆に二人の嗜虐心しややくを刺激するのだった。

「あれえ、以前はアルシュの後ろ姿を褒ほめていたのに、私の身体は褒めてくれないの?」

そう言いながら、フェリシダーは酔いのまわった身体を蒼溟の肩にしなだれかかるようにすり寄るとその頬を軽く突付く。

「あああ、それなら今度は私の正面からの姿を褒めてもらおうかなあ。」

アルシュは蒼溟の反対側の腕を取ると、自らの胸に挟み込むように抱きかかえる。

頬をバラ色に染めて、酔いのために新緑色の瞳は潤み、肩にアゴ

を乗せてくるフェリシダーの弾力のある胸。

普段の白い肌が綺麗な薄紅色に染まり、少し焦点が定まっていな
い様子の藤色の瞳に、豊満で信じられないくらいの柔らかさを誇る
アルシュの胸。

蒼溟は恥ずかしさと湯船につかり過ぎて、のぼせた頭の影響で鼻
血を吹き出す。

「えっ?! ちょっと、大丈夫!」

すかさずフェリシダーが蒼溟の頭を支えて、血で鼻が詰まらない
ように下を向けさせる。

「ああ、蒼溟?! しっかり、湯からあがれる?」

アルシュはこれ以上、湯の中へ沈まないように身体を正面から支
える。

さらに密着されて、視線はなにやら見てはいけない部分を捕らえ
てしまい、蒼溟は・・・素直に意識を手放すことにした。

すなわち・・・気絶したのだった。

「・・・やり過ぎちゃった?・・・」

お互いに顔を見合わせる酔っぱらい二人であった。

閑話 01 露天風呂にて（後書き）

露天風呂のお約束でしょう（笑）

エロいのを目指してみました、いかがでしょう？
楽しんでいただけましたでしょうか？

2 - 1 初めて都市 ルジアーダ（前書き）

物語はこれから本格的になる予定です。

2 - 1 初めての都市 ルジアード

魔の森から旅立ち、数日後にはラント国の首都ルジアードに到着した。

「うわあ——！？すごい、人と建物がいっぱいだあー。」

都市の近郊をエアバイクで疾走するジンは後部座席の蒼溟そうめいの驚愕に、

「すげえだろう。ここは、地球でいうヨーロッパに似た雰囲気らしい。」

ジンが風で声が飛ばされないように大声で説明する。

「ヨーロッパ？」

「ああ、俺も実際には行ったことがないからホントかどうかは知らない。だが、地球の中でも古い歴史と愛国心で溢れる人々が居る地域を真似ているらしいぞ。」

ジンの説明に蒼溟は疑問を持った。

「それは、誰が真似ようとしたの？」

当然の疑問に、ジンはニヤリと口元を歪ませて

「この国を建国した異邦人の一人がだ。」

二人の言葉が聞こえてないのか、フェリシダーはエアバイクを追い抜かすと丘の上に建てられた城へと向かっていった。

「まずは、この国の城に向かってみるかあ。」

そう言つと、蒼溟の返事も聞かずにフェリシダーの乗った飛竜へ続くように、速度を上げるのだった。

城の発着所に降り立つと、フェリシダーはすでに飛竜から降り立っており、その周りを兵士らしき人達に囲まれ話をしていた。

「ジン様、お帰りなさいませ。」

ジンのエアバイクもそのすぐそばに降りると、兵士の一人が駆け寄ってきた。

「おう、ごころうさん。俺は、このまま家に戻るから後の詳しいことなどはフェリシダーから報告してもらってくれ。」

そう言つと、兵士の後ろから現れたツナギ姿の男性にエアバイク（飛翔艇）を任せると、蒼溟をともなつて城内へと向かった。

「・・・ちよつと、ジン！！」

フェリシダーの慌てたような言葉を聞こえないフリをして、さつさと立ち去るジンだった。

「ジン、フェリシダーを置き去りにしてきてよかったの？」

蒼溟が心配そうに後ろを振り返りつつも、ジンの後を付いて行く。「なあに、かまわねえさ。小さな子供じゃあるまいし、自分で何とかするだろう。」

笑いながら、城内を迷いなく歩いていく。

そのまま、城を出ると門番の兵士に軽く挨拶をして高級そうな住宅街を進んでいく。

「蒼溟、ここが俺の家だ。」

そう言つて、垣根に囲まれた大きな屋敷を指さす。

周りの洋風なレンガ造りではなく、木造建築の和風家屋でどこか日本を思い起こさせる感じだった。

「ふわぁ、ジンの家って大きくて広いねえ。」

門扉もんびはさすがに周りとは似た作りにはなっていたが、中は自然な感じに整えられた庭園で四季にあわせたのか、所々に花や実をつけたものが見かけられた。

「おう、ただいまぁ。いま帰ったぞぁー。」

スライド式の玄関を開けて、奥に届くような大声で帰宅を知らせる。

「お帰りなさいませ、旦那様。」

和服をアレンジしたような洋服を着た女性が、玄関先にくると正座で迎えてくれる。

「おう、家内はいるか？」

「奥様でしたら、縁側のある居間の方にいらつしゃいます。」

ジンは靴を脱ぐと、着替えのために奥へと行き。蒼溟は、女性に連れられて客間に通されることとなった。

「……まるで、日本にいるみたい。」

蒼溟の言葉に女性はクスリとわずかに笑うと

「この屋敷は、ジン様のご趣味によって建築されましたから。屋敷を取り囲む「垣根」から「庭園」、果ては下働きの者たちの服装まで、こだわりの持って指示されたそうです。」

その言葉に、ジンって僕が想像していた以上にお金持ちなのかな？と思う蒼溟だった。

通された客間は、畳敷きで出されたお茶も日本茶に近く。蒼溟は、この世界に来て始めて心からくつろいでいた。

「はあ……。やっぱり、畳と緑茶は大切だよね。」

その眩きが聞こえたのか、蒼溟の懷から薄青色の球体生物——インフィニティのアオが出てきた。その姿は、アルシュの宮殿にいた頃のハンドボール大から更に小さくなって子供向けの手毬くらいの大きさになっていた。

「みゆ？」

蒼溟の飲んでいるお茶に興味を示したアオに、予備の湯のみにお茶を注ぎ渡す。

「みゆ……。ん。」

どうやら、アオも気に入ったようで二人？してのほろんと寛ぐのだった。

フスマを開けて、ジンが客間に入ると……そこには蒼溟とアオが、日向ぼっこする年寄りのような雰囲気醸し出していた。

「……ジジむさ。」

真剣に若者らしさを教え込もうと誓うジンだった。

ジンは客間に置いてある座卓に、蒼溟と対面する位置に座ると、
「まずは、ラント国へようこそ！・・・どうだ、初めての都市は。」

ジンの言葉に、目を輝かせるように蒼溟は

「スゴイッ！！人や建物がいっぱい、見たことも無いもので溢れていて・・・。」

村とは比べ物にならない程の人込みに、多くの種族。

建物ひとつでも、知識として教えられたものと実際に目にするとは大きな違いで、様々な建築に施された精緻な装飾に、圧倒されるばかりだった。

魔の森も蒼溟にとっては、未知なるものではあったが、村の森と同じように植物があり、川があり、動物がいる。森という共通点が、蒼溟のいままでの経験を生かしてくれたが、逆にそれほどの新鮮さを感じていなかった。

だが、村という閉鎖された空間で育った為に、ルジアードの都市のように多くの人々とその生活の場、それに付随する様々な施設などに免疫が皆無なのだ。

興奮するままに話し続ける蒼溟に相槌をしながら、ジンはそんな年相応の少年らしい姿に笑みを誘われる。

「どうやら、気にいったようだな。だが、蒼溟。この程度で、そんなに驚いていたら、この先が大変だぞお。」

ジンの笑みに、蒼溟の瞳はさらに輝きを増す。

「！！もっと、いろんなものがあるのッ。」

身を乗り出して、ジンに問いかける蒼溟の落ち着きのなさに苦笑している。

「あらあら、なにやら楽しそうですね。」

おっとりとした落ち着きのある女性の声がフスマ越しに聞こえてきた。

「おう、遠慮せずに入ってこいやあ。」

ジンの言葉に少し冷静になった蒼溟は、慌てて座りなおした。そして、入室してきたのは・・・フェリシダーよりも幾つか年上に見える女性で、着物のようなものを動きやすくアレンジした服を着ていた。

なによりも驚いたのが、彼女の耳が横に長く、先端が尖っているのだ。

「初めまして、ジンの家内。エルフェ族のフィラントロピアと申します。フィランとお呼び下さい。」

その丁寧な挨拶に、慌てて蒼溟も

「初めまして、東雲蒼溟と言います。こちらは、インフィニティのアオです。」

座礼を返しながら、かたわらでのんびりとお茶を楽しむ薄青色の球体生物も紹介する。

二人の自己紹介が終わったことを確認すると同時に

「蒼溟、フィランは地球のおとぎ話でよく登場するエルフ族に似た種族の出身だ。」

ジンの言葉は予想していた内容と同じとは言え、実在を目にするに驚きに茫然としてしまう。

「くつくくつ、予想通りの反応をありがとよッ。」

楽しそうに笑うジンの様子に、呆れながらもフィランはその隣りへと座る。

「まあ、このようにこの世界は、俺たちの想像を遥かに超える事象や風習、民族が多数存在する。その全てを受け入れるとは言わねえが、見聞きする前から拒絶するのだけは勘弁してやってくれ。」

笑顔のまま、その瞳には真摯な光りがあつた。

ジンのその瞳に、蒼溟は居住いを正すと静かに頷いた。

「郷に入^いっては郷に従えという言葉もある。だが、盲目的にその全てを受け入れれば良いわけじゃねえ。その判断を下すのは、今は無理かもしれない。」

静かに目をつむり、自らの内を見つめなおすような雰囲気を纏わせつつ

「それでも、自分の意志と感情に偽りを交えずに・・・様々な物事に対して、正面から関わっていけば、自然と判断できるはずだ。」
ゆっくりと目を開けた時には、その表情に笑みはなく、ただ真摯な態度で

「俺は・・・蒼溟。お前なら、それが出来ると思っている。」

ジンから蒼溟に対して、初めての生の感情^{なま}。

そこには、大人だからとか、子供だからとかの柵^{しがらみ}の無い。

一人の人間として対等な者に願う言葉でもあった。

「・・・今は、どう言え方がいいのかも分からないけど。それでも、僕はどんな事になるうとも僕自身を偽ることをしない・・・そう、心がけていきたいと思う。」

蒼溟の誓いとも言える言葉に、二人は優しくも厳しい眼差しで見つめるのだった。

その後、四人？は軽く雑談をすると、夕食の前にジンが蒼溟をともなつて風呂場へと向かった。

その数刻後に・・・。

「ジン——ンツ——！私に…報告を…全て押し付けるなんて、ひどいじゃないかあッ。」

ちよつと涙目になったフェリシダーが客間へと乗り込んできたのだった。

その日の深夜、夫婦の私室。

「フィランは、蒼溟をどう見る。」

晩酌をするジンは唐突に自分の妻であり、生涯のパートナーでもあ

る相手に訊ねた。

「・・・可愛らしい方だと思いますよ。」

はぐらかすような答えにジンはちよつと口をとがらせつつ、

「そう言うことじゃねえだろ。」

「ふふつ。・・・そうですね、様々な嵐を呼びそうな感じですね。」

楽しそうにジンを見やった後に、空になった杯へと酒を注ぎながら言う。

「嵐か・・・。」

「ええ、ジンがこの国に様々な嵐を呼んだ以上に。彼は、もっと大きな・・・それこそ、この世界全てを巻き込むような嵐を呼びそうに思います。」

ジンの飲む姿を視界にとらえながら、フィランは自分の言葉で表す。

「・・・それは、エルフェ族のサキミの巫女としての言葉か？」

エルフェ族は、その昔に村単位でこの世界に転移してきた異邦人たちの末裔とされている。

彼らは、この未知の世界で生き残るために占術せんじゆつ…未来視の力…による宣託を中心に部族をまとめたとされている。

今や「森の民」として称される彼らの姿が本来のものなのか、環境や異種との交わりによってなされたのか、不明ではあるが占術に長けた巫女の家系は、いまなお部族内で強い影響力を持っている。

ジンの言葉に肯定も否定もせずにフィランは注意深くゆつくりと語る。

「それは・・・正直、わかりません。ただ、貴方とあの方との出会いは必然であった。それだけは、巫女としても私の感覚としても確かな事だと・・・。」

その言葉にジンは何かを噛みしめるように

「必然・・・かあ。」

そんなジンを見つめながらもフィランは

「ふふつ、貴方らしくないですよ。・・・必然とは、己の意志によつて導き選んできた道筋を他人が勝手に評価したものに過ぎない・・・そう豪語したのは、どなたですか？」

かつての若かりし日の言葉を口にする妻に、ジンは少し拗ねたような表情をする。

「そりゃあ、俺がまだ若造の頃のセリフじゃねえか。・・・まあ、確かに起こりもしない、その前兆すらないことに対して怯えていてもしかたねえ・・・か。」

「そうですね。例え、何が起ころうとも、貴方様がどうにかして下さいと私は信じていますから。」

微笑みながら、全幅の信頼を言葉にする妻に苦笑を返すしかないジン。

「言ってるい。・・・そうだな、とりあえず蒼溟は俺の義理の息子として扱うからな。そのつもりでいてくれ。」

夫のその言葉には、仮に蒼溟が人々から疎^{うと}まれる存在になろうとも、常にその傍^{かたわ}らに居続け、間違つた事に対しては遠慮なく叱りつけるつもりであるという意志が込められたものであった。

「はい、わかりました。存分に、思うままに振る舞ってくださいませ。」

妻のその全てを受け入れるという意味表示に感謝と照れくささを感じながら、ジンは久方ぶりの我が家を堪能するのだった。

2 - 1 初めて都市 ルジアーダ（後書き）

エルフェとは、ドイツ語で「E l f e」 エルフ を意味する言葉です。

作中の言葉には時々、ネーミング辞典でつけたものがありますので、調べると面白いかもしれません（笑）

2・2 冒険者ギルド…ではないの？

翌日、ジンとその妻であるフィランに蒼溟^{そうめい}、アオの四人？で朝食を取り、食後のお茶…アルシユの所では紅茶であったが、ジンの所では緑茶である…を楽しんでいた。

ちなみに、フェリシダーは旅の疲れと昨日のジンの仕打ちにふて寝中である。

「それでは、腹も満たされた事だし。」

ジンは湯呑を置くと、いつもの人の悪い笑顔を見せながら

「魔法とは言わないが、魔術があり、剣があり、ドラツヘという竜種もいる。ファンタジー世界の定番がそろっている中で…だ。」
その言葉に、好奇心を煽^{あお}られる蒼溟。

「主要都市に来て、まず、する事と言えば？」

ジンが答えをどうぞ！というように蒼溟に手を向けると

「冒険者ギルドに登録をするッ！！」

勢いのままに片手を上げて答える。その勢いにつられたのか、アオも一緒にみゅーッ！と声を上げる。

「はっはっはっ、ファンタジーの定番にして、王道な答えだが…。
。これが、ちょっと違うんだなあ。」

楽しそうな三人の様子を微笑みながら見守るフィラン。

「冒険者ではなく、探求者ギルドという名前だ。」

言葉だけの意味で考えると、冒険の方は危険な事に挑戦するとい
う感じで、探求者は目的のものを探し得るという感じだろうか？

「どう、違うの？」

「それはだなあ。主要な仕事内容が魔鉱石^{まこうせき}を回収する事だからだ。
蒼溟は、魔素^{まそ}が一定以上の密度にはならないことを知っているよな。」

ジンの問いかけに僕は頷く。

魔素は大気中に含有される元素の一つだが、一定の密度以上には濃くならない。空気よりも重く。現象をとまなわない時は視認することすら不可能な、魔術を使用する者たちにとっては必須の物質だ。

「魔鉱石というのは鉱石と名づけられているが、別に地中から採掘しているわけじゃあねえ。その姿が似ていることから付いただけだ。」

ジンの説明によると・・・。

魔素を多分に含むその姿は、金属を含む鉱物のような感じで使用する方法も似通っていることから付けられたそうだ。

「魔鉱石は、人族が行使する魔工術式には不可欠な物体だ。それを特定ダンジョン内に出現する「魔物」から回収するのが、探求者のお仕事なのさつ。」

「へえ。それじゃあ、特定ダンジョン以外にいる「魔物」からは魔鉱石は回収できないの？」

その問いに、ジンではなくフィランが答えてくれた。

「特定ダンジョン以外には「魔物」はいません。」

その答えに首を傾げる蒼溟。

ファンタジー世界の定番といえば、野外フィールドでの魔物とのエンカウントだろう。

ちまちまとした小物を倒して、レベルを上げて、強力な武器や防具を手に入れ、ついでにヒロイン役のお姫様を救出して・・・とかじゃないの？

「まあ、正確にいやあ。特定ダンジョンに出現するモノ以外を「魔物」とは呼ばないのさ。」

蒼溟の思考を読み取ったようなジンの答えに、さらに疑問が増す。「???それじゃあ、「魔物」とそれ以外の区別は何かあるの?」
いいところに気がつきましたね。とフィランが微笑みながら説明してくれる。

「一番大きな違いは「魔物」に生殖活動が無いことです。」

特定のダンジョンのみに出現し徘徊する謎多き存在。

その表層には、クリスタル状の石が見て取れる。その色彩により、その体内で生成した魔鉱石の種類が大まかに分類できると同時に固体の強さも変動する。

「でだ、「魔物」をぶつ倒すと、その身体は霧散して、魔鉱石だけが残されるのさ。その後、一定時間が経つと、再びその近辺を似たような「魔物」が徘徊し始める・・・というエンドレス。」

「倒した後に、魔鉱石を回収しないでいるとどうなるの？」

魔鉱石から次の「魔物」が発生するのであるうか？

「回収しそこなった魔鉱石は、ダンジョン内で一定時間後には砕け散るのさ。」

パンツと、手を打ち付けて答えるジン。

「それだと、回収した後の魔鉱石も砕け散ってしまうの？」

時間経過と共に砕けてしまうのなら…ダンジョンがどれだけの広さを持つのか分からないが…外に出る前や出た後に回収した物が砕けたら、その労力も無駄になってしまうのでは？と思ったのだ。

「いや、どんな仕組みなのかは一切不明なんだがな。ヒトの手に触れた魔鉱石は砕け散らないのさ。」

仮に、拾ったものを落としたとしても長期間、存在し続けるとのこと。

「まあ、その前に他の連中が見つけて拾っちゃまうがなあ。」

回収した魔鉱石はダンジョンから出ると直ぐに、探求者ギルド内の建物で換金される。

これは、ダンジョンによって取れる魔鉱石の種類が増減、存在の有無、などの違いがあるために国同士が貿易品目として取り扱っている為、個人の持ち出しを禁止しているのだ。

「まあ、そうは言っても個人の武器や防具の増強や魔術の触媒としても使えるため、申請すれば持ち帰ることも可能だがなあ。」

「特定ダンジョンと普通のダンジョンには違いがあるの？」

その問いに、ジンはニヤリと笑う。

「ある！だが、それは実際に見たほうが早いだろう。百聞は一見に如かず」というからなッ。見てのお楽しみいッ。」

その答えにアオと一緒にブーイングをすると、

「まあ、要するにだ。」

探求者ギルドでは、魔鉱石の回収をメインに、他の細々とした仕事を得るための所だと思えばいい。そして、ダンジョンはギルドの付近に存在していて、そこにいる敵をぶっ倒せばいいだけのことだッ。

「簡単だろう？」

要約しすぎる感じのジンの説明だが、確かに分かりやすい。

「細かい説明は、必要になった時にすればいいだろう。いつきに言ったところで頭がパンクするだけだ。」

それに・・・俺が面倒臭い！説明や勉強なんざあ、大嫌いだッ！！
本音ダダ漏れ状況のジンに冷たい視線を送る薄青色の球体生物は、いつぞやのように、身体の弾力性を駆使した顔面攻撃を敢行するのだった。

戯れ始めたアオとジンを止めたのは以外にもフィランだった。

無言の微笑みによる圧力に一人と一匹はすぐに陥落し、蒼溟をともなつて戦略的撤退を敢行することとなったのだった。

「・・・ジンも、奥さんには弱いんだね。」

村に住んでいた頃の海兄かいさんの両親を思い出してしまった。

海兄さんのオヤジさんも、よく夫婦ケンカをしてはす巻きになつていたよなあ。やっぱり、どこに行っても女のは強いのかなあ・・・。

「ばあゝか、夫婦円満の秘訣のひとつだ。」

少し笑いを含みながら飄々とジンは答えた。

「奥さんは世話やきで、旦那は尻に引かれるくらいが丁度良いッ」

ってなッ。」

謡うようにいった言葉の意味がイマイチよく分からなくて首をか
しげていると、

「くつくくつ、蒼溟にはまだまだ早いかなぁ？」

大きな手で僕の頭をグシャグシャにかき回しながら、

「まあ、お前は花より団子、色気よりも食い気の方が大事かあ。そ
んじゃあ、まつ。早いとこギルドで身分証明書を手に入れて、街で
美味しいもんでも喰うか。」

ジンは朗らかに笑うと、アオも賛成くっというように鳴いた。

ジンに連れられた探求者ギルドは、暖色系の目立つ建物だった。

「ジン、建物の周囲に鉄条網のようなのが張り巡らされているけど・

・なにアレ？」

僕の質問に対して、

「あん？ああ、アレの向こう側に特定ダンジョンへの入口があるの
さ。」

淡々とした様子でジンは教えてくれる。

要するに、鉄条網は違法に魔鉱石を持ち出させないためと、好奇
心旺盛な子供が誤って入り込まないようにするための処置だそうだ。
「一応、ダンジョンから「魔物」が出てきた場合にそなえる為とい
う理由もあるが・・・実際は起こりえないことだなっ。」

「なんで？」

特定ダンジョンに縛られているのか、そこでしか生息出来ないの
か、奴らは外に引つ張り出すと何も残さずに霧散する。

「・・・日の光に弱いドラキュラのようなだね。」

ジンの説明に率直な感想を言うと

「まあなっ。そう考えると奴らの世界も狭いものだと思うが・・・
実物を見るとそんな同情心は無くなるぞ。」

脅してくるジンに僕は苦笑しか返せない。見てもいなければ、そ
の情報すら少ない相手にそれ以上の感情を抱けそうにないからだ。

「ほれほれ、くだらん事を考えんと。さつさと、登録を済ませようぜ。俺は腹が減ってきた。」

ジンの言葉に、僕の懐の中にいるアオもそうだ、そうだ。と同意するように身じろぐ。

建物の中は高い天井と広い待合室のようなものが設けられていた。色々な窓口が設けられていて、そこを様々な武器と防具を身につけた多種多様な人々が利用している。

「まずは、あそこの登録所で手続きをするぞ。」

ジンに連れられて、真ん中付近にあるカウンターへと近づく。

「ようこそ、いらっしやいませ。今日は、どういったご用件で？」

受付のお姉さんからの営業スマイルを受けながら、登録の旨を伝えると用紙を渡された。

近くの机で立ったまま、貰った登録用紙に必要な事項を記入していく。

「・・・ジン、出身地を書く欄はどうしよう？」

僕は、こちらの慣れない文字で悪戦苦闘しながら記入している途中で止まってしまった。

「ああ、そこは空欄にしとけ。こっちの現住所は、俺の家を記入しとけばいいから・・・ちよつと貸せ。俺が代わりに記入してやる。」

そういつて、僕の手から筆記具を奪い取ると、慣れた様子で空白部分を埋めていく。

「まっ、こんなもんだろ。ここの名前の部分は、お前自身で記入しろよ。一応、自筆確認も兼任しているからな。」

用紙の上部にある欄に僕の名前をこちらの文字で記入する。

なんだか、不思議な気分だな。

ジンも僕もこっちの世界で生まれ育ったわけではないのに、こうして書類に自分の名前や自分に関わる事を記載していると、自分もこの世界の一部に組み込まれていくように感じる。

「書き終わったよ、ジン。」

そういつて、記入もれが無いかをジンに確認してもらう。

「・・・慣れてない割に、読める字じゃねえか。・・・しゃらくせえ・・・」

俺は文字で苦勞したというのに・・・とジンが小声でブツブツ言いながら、書類を受付のお姉さんに手渡す。

「・・・それでは、本日の登録者は蒼溟・東雲^{そうめいしののめ}さま。一名で宜しいでしょうか？」

お姉さんは書類をサラリと確認した後に、ジンと僕を見て確認した。

「ああ、こっちの坊主だけでいい。俺はすでに登録済みだからなつ。」

「ジンはちょっと、意味深に笑いながら同意する。」

お姉さんは怪訝な表情を一瞬見せるが、すぐに営業スマイルを浮かべる。

「では、蒼溟さまに対しては簡易の説明だけにさせていただきますても宜しいでしょうか。」

ジンに確認を取り、同意を得ると僕に対して手招きをして説明してくれる。

「まずは、当方の探求者ギルドへの登録をありがとうございます。登録対象者に一切の制限はありません。」

登録自体は誰でも出来るように、それこそ女性だろうと、老人、小さな子供でも可能だそうだ。

ただし、受けれる依頼内容には当然ながら、様々な制限がされていた。

「依頼内容には様々なランクを設けさせていただき、それを完遂できるランクにある探求者の方々に受理または、処理していただきます。」

ランク事態はあくまでも目安であって、絶対的な評価ではないそうだ。

ただ、低ランクの探求者が高位ランクの依頼を受けることはまず

無いそう、仮に受けれるとしてもギルドから様々な条件と立会により、完遂できる実力があるかを見定められてからの受理になるらしい。

「基本的に街の外で活動する依頼内容は、チーム単位で行ってもらっております。」

これは、特定ダンジョンであれば地上付近の階は一人でも討伐できる程度の「魔物」しかいないのと、仮に危機に陥ってもギルドの職員が救助しやすいためである。

それに対して、街の外は大型肉食獣や群れで狩りをする動物。警戒心が強すぎる草食動物などの危険が多いうえに、救助に行くことがかなり困難なためである。

「それで、本日は登録のみでしょうか？」

この後の予定を聞かれて、僕はジンの方をうかがう。

「そうだなあ。とりあえず、仮認証をくれ。こいつにダンジョン内を少し見せてやりたいんでなつ。」

ジンの申し出に受付のお姉さんは了承すると、少しお待ち下さいと一言告げて、奥の棚の方に向かい、何かを持ってきた。

「それでは、ダンジョンへの仮認証をお渡しします。これは本日限りとなっておりますので、お帰りの際には、こちらまでご返却しに来て下さい。」

そう言うと、僕の手厚紙くらいの板を渡してくれた。

「ありがとうございます。」

お辞儀をしてお礼を言うと、お姉さんは初めて営業スマイルでは無い微笑みで

「お気を付けて・・・いつてらしゃい。」

と言って送り出してくれた。

ジンと共にカウンター前を横切り、奥の扉へと向かう。

「蒼溟。おまえ、意外にやるなあ。」

ジンのその褒めているのか、呆れているのか、よく分からない言

葉を受けながら僕は扉の向こう側にあるダンジョンに好奇心が刺激されていた。

2 - 2 冒険者ギルド…ではないの？（後書き）

最初に書いた原稿を大幅に書き直すはめになった話です。

説明が細かくなり過ぎて読みにくいために行ったのですが・・・どうでしょうか？

2 - 3 特定ダンジョン

探求者ギルドの建物内から奥の扉を開くと、周囲を鉄条網で囲まれたグラウンドに出た。

「うわあ、広いねえ。・・・ところでダンジョンの入口はどこ？」

蒼溟そうめいのせつかちな質問に苦笑しながら、

「ああ、入口はここを突っ切った奥の方だ。ちなみにだ。この場所は様々な催し物と鍛練、それに緊急時の救助テントなどで使用するのさ。」

ジンの説明を聞き流していた蒼溟だったが、気になる単語を聞いてオウム返しする。

「・・・催し物？」

鍛練と救助テントはギルド関連だとは想像できるが・・・

「まあ、それについては時期が近付いたら説明してやるよ。」

反対側に到着すると、少し間隔を置きながら幾つかの建物があった。

「ダンジョンの入口らしいものは見当たらないけど？」

不思議そうに首をかしげていると、懷から薄青色の球体生物もチヨロつと顔？をのぞかせる。

「はっはっはっ、入口は建物内に組み込まれるようにしてあるからな。」

なにそれ？と蒼溟とアオが見つめると、入口を取り囲むように建築したとのこと。

「なんで、そんなことをするの？」

「なあに、一応の用心のためさっ。上空から盗賊や他国からの侵略などの際に魔鉱石を取られないためのなっ。」

それよりも、さっさと入るぞお。と告げると蒼溟とアオを即して建物内へと向かう。

透明なガラスのような扉を開いてスグの所に、簡易なカウンター

が設けられていた。そこで貰った仮認証を係りの人に提示する。

「ようこそ、ダンジョンへ。」

兵士のように統一された防具と武器を持つ男性が挨拶をしてくれた。

「おや？仮認証ということは、登録して初めての来訪だね。詳しい説明とかは必要ですか？」

共に居るジンの方に視線を向けて尋ねる兵士に

「いんやあ、必要ねえわ。適当に地下1階部分を散歩して帰るつもりだしなあ。」

その言葉にジンの登録証を確認していた係りの人が兵士に小声で耳打ちする。

ちよつと驚いた様子でジンを見た後は、

「失礼いたしました。それでは、ごゆっくりと探索して来て下さい。」

敬礼をして笑顔で送り出してくれた。

「・・・なんだったの？」

僕が不思議そうに通り過ぎた兵士とジンを見比べていると、ジンは肩を軽くすくめて

「さあなつ、それよりも初ダンジョン探索に行くぞあ。」

ジンに連れられて奥へと行くと、広い空間へと出る。

その中央に、トンネルのような入口が大きく開いていた。

「ここが、入口だ。誰が、なんの為にここまでバカでさえものをつくったのかは知らんが、トレホドラツへ（陸竜）の中型種くらいなら楽々とおれる広さと高さがある。」

見える範囲では、緩やかに地下へと続いているようだ。

入口を覆うように、ドーム状にしてある建物には幾つもの明かりが灯っており、室内だというのに昼間のように周囲を照らしている。「うわあゝ、スゴイねえ。」

僕の驚きに、懷から顔をのぞかせているアオも一緒に周りを見ている。

「さて、十分に驚きを堪能したかあ。それでは、更なる未知へとご招待い〜。」

僕の後頭部を優しくポンポンと叩いて、先に即すジンに従ってゆつくりとダンジョンへと入っていく。

ダンジョンの中は、まるで遺跡みたいだった。

「これが、他のダンジョンとの大きな違いだ。」

ジンが壁を指差す。

壁はまるで磨かれた大理石のようにツヤツヤしている。明らかに、自然にできたものではなく、人工物であることを示していた。

「特定ダンジョンは、先史文明時代の建造物とされているが・・・ホントのところは、誰も知らねえ。大事なのは、ココに居る敵を倒せば魔鉱石が手に入る。という部分だけだなつ。」

ジンのあっけらかんとした物言いは、学者連中にケンカを売るようなものではあるが。探求者としては、至極当然の言葉でもあった。「ほれほれ、どうせ答えの出ない疑問なんざあ捨てて。あっちから来るお客さんの相手をするぞつ。」

ジンがそう言ってアゴで示した先には・・・

奇妙なモノがいた。

それは四足歩行の獣のような姿でありながら、全身が薄灰色で、まるで月明かりに照らされた影のように希薄な感じがした。

額にある赤いクリスタルが唯一、その存在感をアピールしているが、身にまとう雰囲気は明確な殺意のみ。

「なにアレ・・・もしかして、アレが「魔物」なの？」

僕の問いにジンは視線を「魔物」から外さないまま

「ああ、アレがこの特定ダンジョン内にしか存在しない「魔物」と呼ばれるものだ。ちなみに、アレに意志と呼べそうなものはねえぜ。」

そう言いながら、ジンは少し集中した後につつすらと青い光をその身にまとう。

「奴の中にあるのは、単純明快な一つのことだけだ。」

ジンは僕と「魔物」の間に立つとゆっくりと相手に近づいて行く。「目の前にいる存在を殺すことのみ。」

その言葉に反応するように、唸り声と共にジンに襲いかかる「魔物」

は、早い！

「ジンッ！」

僕は思わず名前を呼んでいた。

それに対してジンは慌てることなく、ファイティングポーズをとると、向かってくる「魔物」を半身でかわす。

それと同時にすれ違い様に「魔物」のアゴをアッパーカットで打ち抜く。

「ギャウッ！」

犬のような悲鳴と共にその身体を反転させられ、柔らかそうな腹部にジンの肘鉄が容赦なく打ち込まれ、地面へと叩きつけられた。

しばらく痙攣けいれんした後に、その姿は霧散した。

「・・・とまあ、このように倒すとその姿は消えちまう。後は、転がっている魔鉱石を回収して、戦闘終了。」

何事もなかったように説明を続けながら、地面に転がっていた薄紅色の2センチくらいの石を拾う。

「・・・ジンって、結構強いんだね。」

普段の足運びとかから、結構できるとは想像していたけど。まさか、殺気に溢れた敵に素手で挑んで、あっさり勝つとは思わなかった。

「あん？地下一階程度の「魔物」なら、身体強化魔術で武装した体術で十分だろう。それに、蒼溟だってこれくらい出来るだろう？」

いやいや、相手を怯ひるませたり、一時的に身動きできなくしたり、それくらいなら出来るかもしれないけど。倒すのは、さすがにムリ

だと思っけどなあ。

「そんじゃまあ、見るもの見たし。今日はこれまでにして、街にメシを喰いに行くかあ。」

確かに、準備も何もしていない状況で殺意に満ちた敵を相手にするのは危険すぎる。

僕は素直にジンの言葉に頷くのだった。

あのは後は、入口にあつた簡易カウンターに魔鉱石を渡し、その鑑定をもらうとジンのギルドカードにその情報が入力された。それをギルドの換金所で提示すると報酬金が貰える仕組みになっている。

「本日の換金額は銅貨一枚となりますが、交換されますか？」
換金所のカウンターで、窓口のお姉さんが告げる。

「ああ、悪いがしてくれ。他の分はそのまま残しておいてくれやあ。」

「かしこまりました。」
と言つて機械を操作した後に、銅貨を受け取る。

「ジン、他つて何かあるの？」

「換金せずに残していた分があるのさ。」

ジンの説明によると、ギルドカードからの換金はいつ行つても良いようで、銀行のように預けたままでも構わないそうだ。

「それに、わざわざ換金しなくてもギルド内にある店の買い物はこのギルドカードで行うことができるから手間がはぶけるのさ。」

ジンと会話しながら、最初に立ち寄った登録所のカウンターへと向かう。

「すみません。蒼溟ですけど、お借りしていた仮認証を返却しに来ました。」

僕はカウンターにいるお姉さんにそう告げると

「はい、わざわざありがとうございます。」

営業スマイルではない、普通の微笑みで迎えてくれた。

「それでは、蒼溟さまの認証タグとギルドカードは作成にしばらくお時間がかかりますので二日後にご来場ください。」

「ジン、認証タグってなに？」

その言葉にジンは首にかかっていた鎖を引っ張り出してみせてくれた。

「まあ、本人の身分証明書を兼ねたもんだなつ。魔術と魔工術式によつて個人情報といままでの賞罰などの経歴も刻まれている。一応、本人とその任意によつてしか閲覧できないことにはなっているがな。」

他にも、この認証タグを身に着けている本人が死亡すると自動的にギルドへその情報が転送される。タグを形見に仲間へ渡すヒトもいるらしい。

基本的に登録した本人が生きている間はタグも正常に機能するので生死を確認するのに手っ取り早いとのこと。

対して、ギルドカードは換金や倒した敵の数に種類、回数などの戦闘に関する情報が刻まれる。このカードは仮に失くしても、本人以外には使用できないし、再発行も可能…手数料はかかるが…。

「じゃあ、二日後にはそれができるんだ。」

僕の期待する眼差しは、カウンターのお姉さんとジンに笑われてしまった。

「いんやあ、まだまだ。基本のタグとカードはできるが、そこから蒼溟の個人情報採取して更に加工するから。」

ジンの言葉を引き継ぐように、お姉さんが

「はい。実際に使用可能になるのは、一週間後くらいになりますね。」

「ちょっと、ガッカリ。僕もジンみたいに「魔物」相手にどこまで出来るのかを試してみたかったのに。」

しゅんとなった蒼溟の姿は、まるで耳を伏せた子犬のようで可愛らしかった。

「クスクス。そんなに焦らなくても大丈夫ですよ、蒼溟さま。仮認証があれば、階数は限定されますが探検することも、換金することも可能ですから。」

仮認証での換金は通常よりもレートが下がってしまうが、肩慣らし程度であれば問題ないとのこと。

「ホントっ！」

目を輝かせて聞くと、お姉さんは楽しそうに微笑みながら頷いてくれた。

「まあ、その前に簡単な装備と準備くらいはしねえとなつ。」

ジンが僕の頭をグシャグシャにする。

こうして、僕の初ダンジョン探索は終わったのだった。

自然発生した洞窟を想像していた僕としては人工的なダンジョンにとっても興味をひかれた。あの先には何があつて、どれだけ強い「魔物」がいるんだろう。

そして、村で教わった技術でどこまでいけるのだろう。とっても楽しみだ。

2 - 3 特定ダンジョン（後書き）

さらりと流しましたが、貨幣は色々細かい設定があります。
基本的に硬貨を使用して、国などによりレートが違ったりします。

機会があれば、詳しい説明をチョコチョコと出したいと思います。

2 - 4 居酒屋さんみたい…

僕とジンはギルドから屋台が立ち並ぶ区域へと移動した。

「ここは、探求者から街の連中までお世話になる屋台村だつ。通常の飲食店とは違って、服装や作法なんざあ関係ねえ。美味いものを喰^{うま}つて、飲んで、騒ぐだけさ。」

蒼溟^{そうめい}を連れてきたのは、簡易テントで営業する連中のたまり場みたいな所だ。

ここは、飲食店をはじめとする奴らが最初に店構えするところでもある。

なかには、営利を度外視した趣味みたいな感じで営業している奴らもいる。そういう奴が作るのは、個人的なこだわりを重視するために、えり好みがあるが、出される食い物はどれも美味い。

そして、何よりも安くて、物珍しい食材を扱っていることが多い。「さあて、せっかくだから俺のおススメの店にいくかあ。」

蒼溟と薄青色の球体生物は物珍しいのか、色々な屋台をキョロキョロと見て周る。

そんな、一人と一匹を捕まえながら目的の屋台へと向かう。

「おう、おやつさん。二人分の席、空いてるかあ？」

目当ての屋台の暖簾^{のれん}をくぐって、カウンター席を見る。

「いらっしゃいッ！・・・って、ジンかよお。久し振りじゃねえか。」

額にねじり鉢巻きをした熊のような体形の中年男性が嬉しそうな顔でジンを迎える。

「なんだあ、今日は昼間^{ひま}つから曾孫^{ひま}と飲みに来たのかあ。」

他の先客を移動させて、目の前のカウンター席を開けさせると、そこに座るように指示する店主。

ジンは先客の連中に軽く謝りつつも、蒼溟と共に席に座る。

「ぬかせっ。曾孫じゃねえが、俺の義理の息子みてえなものだ。」

ジンの言葉に店主の方が驚いてしまったが、そこは長年の接客で鍛えられたプロ根性で表情には一切、出さなかった。

「へえ。それじゃあ、今日は息子に“大人の味”でも教えに来たのかい？」

そう言いながら、ジンが好んで飲む蒸留酒をコップに注ぎ手渡す。「いんやあ、まだコイツには早いッ！初ダンジョン探索の祝いがわりに美味しいものでも喰わせてやろうと思ってなあ。」

ついでに、こいつの代わりに祝い酒として、他の客に一杯ずつ振る舞ってやってくれ。と言って、席を移動してもらった先客連中に奢^{おご}ってやるのだった。

「おおつ、これは気前がいいねえ。御馳走^{ごちそう}さんッ！少年の明日に幸^{さいち}多^{おお}からんことを。」

そうして、店にいる他の客たちと一時^{ひととき}の楽しい時間を過ごすのだった。

しばらく飲み食いして、他の客とも楽しく雑談していると。

その一人から、なにやら気になる話題を小耳にはさんだ。

「そついやあ、探求者といえば。ここ最近、中堅どころの連中が何者かに襲われる事件が多発しているらしいぜ。」

そいつの聞いた話では、街の外：城壁の向こう側：で活動することができくらしいの連中がチーム単位で依頼を受けている最中やその帰還中に、正体不明の連中に襲われて重軽傷を負^おっているのと。

「さすがに件数が増えてきたから、王城の連中やギルドのトップランク連中も動き始めているらしいんだが、犯人連中を特定するどころか、遭遇^{そつぐう}することすらできねえらしい。」

なによりも不気味なのが、襲われた連中もなにが起きたのかサッパリ理解できないことだった。

「俺のダチが襲われた連中を街まで運んだ時に聞いたんだが、連中も気づいたら仲間がやられていて、敵がどんな奴らで、どんな武器を使ったのか、それすらもわからなかったらしい。」

唯一、確認できたのが複数の奴らに一気に襲われたことのみ。

「なんじゃそりや？・・・複数の敵に襲われたと分かっているのなら、姿くらい確認できたんじゃないかねえのか？」

ジンの言葉にその人は、肩をすくめながら

「いや。襲われた連中の話だと、攻撃されたのは一回だけで、複数の仲間がその時に負傷したから・・・というのが理由らしいぞつ。」
それに同じくらいの時間帯に別の場所でも同様の事件が起こったことからの推測らしい。

「なんとも、不確かな情報だなあ。」

呆れた様子のジンにその人も苦笑する。

「まあ、そんな物騒な事件が起きているからなあ。あんたらも一応、注意しておいた方がいいぜつ。」

親切心からの忠告に、ジンと僕は感謝の言葉を返す。

探求者を襲う連中かあ。何か、恨みとかでもあるのだろうか？

そんな事を思いつつも、店主が焼いてくれた肉の串焼きをアオと一緒に頬張る蒼溟であった。

ほどよく、お腹もふくれた時に…ジンは気分よく酔っていたが…それは起こった。

「父上、探しましたよ。」

一人の成人男性が、お店の暖簾をまくった状態でジンを見つめながら言う。

「あん？誰だあゝ・・・。」

怪訝けげんそうな声で後ろを振り向いたジンが硬直した。

そこには、笑顔でありながら、なんとも言えない圧力プレッシャーを放つ身な

りの良い男性とジンの孫娘であるフェリシダーが居た。

「報告を娘一人に任せて、昼間から酒盛りとは・・・中々に良いご身分でございますねえ。」

男性の言葉に、ジンはそろりとそっぽを向く。

「それに、お預かりした大切なお客人に街を案内するどころか、早々に休憩をしているとは・・・お覚悟はよろしいですね？お父上。」

その言葉に、ちよつと言いつくしをしてみるジン。

「ま、待て。俺はちゃんと蒼溟におススメ所を紹介してやろうと思つてだなあ・・・」

「おススメのついでに、お酒も嗜たしなんでみた・・・という事でしようか？」

笑顔でとどめを刺す男性に、うな垂だれるジン。

「フェリシダー、問答無用で連れて行け。駄々をこねるようであれば、母上にご報告すると脅おどしても良い、私が許可する。」

その言葉に、フェリシダーは頷くとジンの腕を取って席を立たせる。

「お騒がせして、すみません。店主、勘定とお釣りは皆さんに迷惑料として振る舞つてあげてください。」

そう言つて男性は、シエン硬貨1枚を手渡す。

「おいおい、これじゃあ幾いくらなんでも多すぎるよ。」

店主の言葉に男性は、今後もご厄介になる予定ですので、その挨拶かわりという事で。と言つて微笑んでみせる。

言外に、ここであつたことに対する不干渉を認知するように...という意味合いが含まれている事に気付いた店主は苦笑と共に受け取ることにした。

「はいよつ・・・ジンに宜しく言つておいてくれ。」

店主の様子に心持ちホツとしつつも、少し申し訳なさそうな表情でお礼を言う。

そして、事態に追い付けないことに首を傾げながらも薄青色の球

体生物と共に残りの串焼きを平らげている少年に声をかける。

「食事中にすまないね。申し訳ないのだが、少し場所を移動してもらえるかな？」

私の言葉に、少年は軽くうなずき同意を示す。

お手拭きで自分の手と連れの薄青色の球体生物を綺麗にすると、店主に挨拶をして店外へと出る。

「本当に急なことで申し訳ないが、私たちについて来てもらうよ。私の有無を言わせない言葉に少年は落ち着いた様子で対応する。

「分かりました。・・・ところで、ひとつだけ質問しても宜しいでしょうか？」

そんな様子に若干、興味をひかれて私はこの質問に答えることにした。

「ええ、いいですよ。ただし、答えられる内容であれば・・・ですが。」

「いったい、どんな質問をされるのであろうか。」

「ありがとうございます。・・・先ほど、店主のヒトに渡した硬貨は価値にしてどれくらいなのですか？」

え？・・・その意外な質問に私の思考回路は一時中断してしまっ

た。
「ああ、あれは日本円に換算すると十万円くらいだなあ。ちなみに、ギルドで貰った銅貨は百円くらいだ。」

質問に答えられない私の代わりに、父であるジンが少年に答えていた。

「ッー!?!？」

驚いている少年の姿に、ちょっと調子を戻した父が楽しそうに話

す。
「ギルドでは、4種類（白金・金・銀・銅）の硬貨を使っている。さつき、こいつが渡した硬貨はこの国で使える金だ。あと、あれは飲食代だけじゃなく、迷惑料も含んだ料金だから気にすることあねえ。」

私を指さして、人の悪そうな笑顔をする。

「こいつが勝手に払ったものだから気にせずに奢^{おご}られておけ。それに、無駄に金を持っているから、多少は使わせてやるのが親切^{おしやく}ってもんだろっ。」

その言葉に娘のフェリシダーが無言で張り倒していた。

少年がこちらを案じるような様子を見せたので、

「大丈夫ですよ。今後も、色々と便宜^{へんぎ}を図^{はか}ってもらおうと思っ^てての代金^{しろ}ですので。」

安心させるように微笑む。

私の言葉に嘘が無いことを察した様子の少年はホツとしたように肩から力を抜く。

なかなかに聡い子のようにだ。

「・・・ところで、ドコに行くんだあ。」

ジンがふて腐れた様子で男性とフェリシダーに聞く。

「それは当然、職場へ・・・ですよ。」

おんみずか

御自ら、上司へご報告していただかなければなりませんからねえ。

とぼけたような口調で答える男性に、ジンはうろたえた様子。

「なっ！？いや、ちよつと待て。・・・そのだなあ・・・そうッ！

こんな格好では失礼になるだろうっ？」

「大丈夫。いまさら、ですから。」

だから、またの機会に・・・と続けようとするジンの言葉を途中で遮^{さへぎ}り、断言^{だんげん}する男性。

さっきから、ジンが言い負けている様子を僕はついつい見入っ^ててしまう。

「あんな様子の二人だけど、仲はとっても良いから心配しなくても良いのよ。」

僕が凝視している意味を勘違いしたフェリシダーが頭をなでつつ、小声で耳打ちしてくれる。

「あの二人って、親子なの。」

僕の確認の言葉に、フェリシダーは頷く。

「血のつながった実の親子よ。お互いにヒネクレ者だから、顔を合
わせるたびに口が悪くなるのだけど、その実はケンカするほど仲が
良い…を地でいく二人なの。」

諦めと苦笑を混ぜたような複雑な表情をするフェリシダー。

道中、漫才のような会話を続ける親子。

その様子を見つめながら、僕は懐に入り込んでいるアオに話しか
ける。

「ところで、僕たちはどこに向かっているのだろうか？」

「みゅーう？」

さあ？楽しそうだし、どこでもいいんじゃない？と答えるアオに、
それもそうかと思う。

ジンもアオも、フェリシダーもいるのだから。

僕の一日は、まだまだ終わらない。

2 - 4 居酒屋さんみたい…（後書き）

何やら不穏な会話が・・・。

ジンの息子さんの名前は次回で明らかになる予定です。

そして、意外な事実が！？

2 - 5 意外な事実！？

ジンとその息子さん、それに孫娘であるフェリシダーに連れられて向かった先は、ラント国の首都ルジアードにある王城であった。城の門番は、先頭を歩くジンたちに敬礼をするとアッサリと通してくれた。

「ねえ、フェリシダー。ジンはお城に勤めているの？」
隣を歩くフェリシダーに訊ねると

「一応ね。所属としては王城勤めなのだけれど、色々と事情があった。普段はよりつきもしないわ。」

それは、勤めていると言うのだろうか？

蒼溟は首をひねりながらも三人について行くのだった。

王城内と言っても一つの建物だけではなかったようで、その中の一つの塔内部にある執務室へと案内された。

そこには、一人の立派な服装と貫録のある壮年の男性がいた。

「ああ、ようやく来たのか。」

その人はジンを見るとニヤリと笑って迎えてくれた。

「ちっ、来たくはなかったが、きちまったよっ。」

口悪くそう言いながらも、ジンは苦笑と共に挨拶をする。

「それで、フェリシダーの報告から聞いていた少年とは、後ろにいる子でいいのかな。」

僕を見つめて、ジンに確認をする。

「ああ、蒼溟・東雲^{そつめい}。俺と似たような境遇で、俺の庇護下に置く少年だ。」

有無を言わずに、ジンは断言する。

「その判断は、ジンが確定したのかい？」

何かを含んだような言い方で、僕はちょっと心配になってジンを見る。

それに気付いたジンは、気にするなつ。と仕草で示した後に

「ああ、俺がそう決めた。それに、第一発見者である魔の森の主も承認済みだ。」

何か、文句でもあるか？という強気な態度でジンは男性を見つめる。

「なるほど。・・・私の一存では、何も言えないが。この事は王にも報告するぞ。」

「ああ、かまわん。その他の一切の諸事には俺が関与する。それも報告しておいてくれ。」

最終確認をする男性に、ジンはさらに言いつのる。

二人の間になんともいえない緊張感が張り詰める。

それを打ち破ったのは、ジンの息子さんだった。

「さて、この件はこれで一応の終了として。父上には、たまった書類仕事をしていただきましょうかね。」

嫌な空気を打ち払うように手をひとつ叩き、ジンに告げる。

「なにッ？！俺の役職は閑職かんじやくだろう！」

慌てたように言うジンに息子さんはイイ笑顔で

「なにを寝ばけたことをおっしゃいますか。貴方様は王宮魔技師筆頭補佐にして、国政の御意見番のおひとりではありませんか。」

聞きなれない言葉を発する息子さん、それに対して説明を求めるように僕はフェリシダーを見る。

フェリシダーがそれに気付いて、説明をしようと口を開く前に

「父上がお仕事をしている間、義理あていの弟は私が責任もってお相手させていただきますので。」

ちなみに、早く終わらせないと置いて帰りますので悪しからず。ジンにそう言うと、息子さんは僕とフェリシダーを即して退室する。

「それでは、インテグリダー様。父上は置いていきますので、私ど

もはこれで失礼させていただきます。」

扉を閉める前に壮年の男性に敬礼をする。

「さてと。二人はこのまま私の居室に移動して、お茶でもしましうか。」

足取りも軽く案内する息子さんに、呆れたようすで肩をすくめるフェリシダーだった。

事務所のようなところで、様々な人々が働く中を通り過ぎて応接室へと入る。

職員の女性がお茶を用意して、退室するとうやく息子さんが事情説明をしてくれるようだった。

「すみませんでしたね。色々と慌ただしかったうえに、きちんと説明もしてあげられなくて。」

申し訳なさそうに苦笑しながら、

「まずは、自己紹介をさせてもらいますね。私はリベルター・コンスルタといえます。」

ジンの実の息子にして、フェリシダーの父親。王宮で筆頭魔技師として働いているとのこと。

魔技師まぎしとは、魔素を使用する技術を有する者の総称で、一般的にはマギとか、技師と呼ばれる。人族であれば、魔工術式を習得した者。他種族であれば、高位魔術を使用することが出来る者を言う。また、人族でも他種族との混血であれば、魔術が使用できるとのこと。

「蒼溟くんは私の義理の弟という事になるので、お兄さんでもリベルターでもお好きなように呼んでくれてかまいませんよ。それに敬語も必要ありません。」

浮き浮きとした様子で言うその姿は、先程までの大人な態度とは逆転して子供のような感じがした。

「お父様。蒼溟がびっくりしますので、もう少し落ち着いて下さい。」

「フェリシダーが諫めると、少し拗ねた様子でリベルターさんは言う。」

「いいじゃないですか。年が離れているとはいえ、念願の兄弟ができた私の喜びを少しは理解してくれても。」

「お父様には、親戚としてお母様の姉妹や兄弟がいらっしやると思いました。」

お茶を飲みながら半眼で指摘する実の娘に

「それは、それでしよう。やっぱり、私としては多少の無茶と一緒にやってくれそうな男兄弟というのに、憧れるものなのですから。」

この言葉で、僕は目の前の男性が確かにジンの血を引く人だと確信できた。

大人なのに、子供心を決して忘れない。良いのか、悪いのか、よく分からないが僕の存在を歓迎してくれていることは実感できた。

「これから、宜しく願います。リベルター兄さん。」

僕が座礼しながら、挨拶するとリベルター兄さんは感激したように頷きながら僕の頭をジンのようにぐしゃぐしゃに撫でまわした。

「蒼溟くんは素直な良い子ですねえ。でも、無理にいい子でいる必要はありませんからね。男の子には悪さをすることも必要ですから。」

大事なのは、自分の心に素直であること。それに、自らの言動に責任をもつことです。

そう言いながら、リベルター兄さんはお茶を飲む。

「そうそう。蒼溟くんの衣服の中に居るインフィニティ殿にもお茶がありますので、よかったら飲んで下さいね。」

その言葉に、いままでなりを潜めていた薄青色の球体生物が顔を出す。

「みゅーう。」

「気付いていたのか。と呟きながらアオが僕の懷から出て、お茶を楽しむ。」

「そう言えば、フェリシダーも魔技師として王宮に勤めているの？」
ジンにリベルター兄さんの二人が同じ職についていることから、僕はそう思ったのだが

「いや、私は王宮の近衛師団に所属している。」

フェリシダーがそう言う

「娘は、頭を使うよりも剣をふるう方が好きみたいでしてねえ。男勝りなうえに、同性にやたらともてるものですから。恋人ができるよりも前に、ライバル視される有様なんですよ。」

困った娘です。と続けるリベルター兄さんに対して睨みつけるフェリシダー。

「女性騎士は、王族の姫君たちを守る立派な職業だ。それに、私が男勝りなのではなく、軟弱な男が周りに居過ぎるだけだ。」

「そう言っつて、男性騎士たちと決闘まがいな訓練をする女性騎士がありますか。フェリシダーがそれを行う度に、女性ファンが増加して、婚期が遠のくのですよ。」

すかさず痛いところを突くリベルター兄さん。それに対して、二の句が告げないフェリシダーはそっぽを向いて聞こえないフリをするのだった。

「やれやれ、父上に一番なついていただけあつて、よく似ていることです。」

肩をすくめると、話題を変える様にリベルター兄さんは僕に話を振る。

「蒼溟くんは、探求者ギルドに登録をしに行つたようですが、これからは探求者として過ごすつもりですか？」

「一応かな。ギルドの認証タグとかはまだ出来ていないけど申請はしてきた。」

僕の言葉に微笑むリベルター兄さん。

「そうですか。じゃあ、それまでは兄である私と一緒に過ごしましょうか？」

その言葉にすかさずフェリシダーが反応した。

「なにを言っているのですか、お父様！お仕事はどうするおつもりですかッ。」

「それは、今まで遊んでいた父上にお任せしますよ。何せ、筆頭補佐とはいえ元は、あの人の仕事だったのですから。」

娘の剣幕に、のほほんと反論する父親。

「それでも、蒼溟と遊んでよいことにはなりません！」
それに対して、

「何を言いますか。突然、見知らぬ世界に連れてこられた少年がひとり健気に順応しようとしているのに、周りの大人たちが助けてあげなくてどうするのですか。父上も確かに頼りになるでしょう。だが、義理とはいえ、兄弟となった私が一番少年に近いのですから。様々なことを教えてあげなくてどうするのです。」

一息に言い訳を告げるリベルター兄さんにフェリシダーは口を挟めずにいると、

「それに、これを機に父上を職場復帰させるよいチャンスだとは思いませんか？」

悪魔の囁きささやきのようなこの言葉に、さしものフェリシダーも陥落したのだった。

娘が言い負かされたことに気を良くしたりベルター兄さんは、機嫌良く

「それでは、今日のところは母上の屋敷まで蒼溟クンを送りますね。フェリシダーは、一応職場に顔を出してきなさい。」

そう言っ、応接室を出て僕はジンの屋敷へと向かう。

屋敷の門前まで、リベルター兄さんと一緒に来ると

「それじゃあ、私はここで。明日の朝に迎えに来ますね。」

「リベルター兄さんは、どこに行くの？」

このまま一緒に屋敷内に入ると思っていた僕が聞くと

「一応、自分の家を持っていますので。それに、明日からの予定を妻に説明しておかないといけませんから。」

そう言い残して、リベルター兄さんは足早に行ってしまった。その逃げるかのような様子に僕とアオは首を傾げつつも、帰宅するのだった。

「ただいま。」

「みゅ。」

僕とアオが帰宅すると、年配の女性が迎えてくれた。

「お帰りなさいませ、蒼溟さま。インフィニティさま。」

初めて見るその人に首を傾げていると

「私はこの屋敷に長年仕えさせていただいているサカエと申します。」

以後、宜しくお願い致します。と挨拶をしてくれたサカエさんに僕とアオも挨拶を返す。

「蒼溟さま、旦那さまとは一緒ではないのですか？」

その言葉に、今までの事を簡単に説明する。

「そう言えば、リベルター兄さんは何で一緒に住んでいないの？」

これだけ広い屋敷なら、可能だと思っただけれど。

「ああ、それはきつと奥様からお逃げになられているからでしょう。」

クスクスと笑いながら答えるサカエさん。

「旦那さまと奥様は、元々この国の方ではありません。その為に、王宮に勤めている方々から様々な思惑が絡み合った事柄が多々ありました。リベルター坊ちゃんも昔からちよつと苦労していらっしゃったようです。」

それはリベルター兄さんの昔の武勇伝でもあった。

二人の一人息子であるリベルター兄さんは、王侯貴族の子弟から

様々な嫌がらせを陰で受けていたようで、それに対して行ったことが・・・

「今でこそ、立派な父親として王宮勤めをしていらっしやいますが、幼少の頃はともヤンチャなご様子でした。」

そのヤンチャというのが、嫌がらせをしてきた人達をけしかけて竜種であるトラホドラツへにちよっかいを出して重軽傷を負わせたり、イタズラとして王宮内で魔工術式を用いた爆破実験を行ったり、はては庶民、貴族を問わずに悪ガキ同士の陣地取り合戦を街中で敢行するなど。

「旦那さまは大笑いをして、それに参加してみたり、補佐したり、大人まで巻き込んで賭けを仕掛けては責任を有耶無耶うやむやにしていたかもしれません。」

懐かしそうに目を細めるサカエさんに僕はちよっと引きつった笑いを返す。

「さすがに、奥さまからは親子そろって叱られていましたねえ。」

ただ、そのおかげで様々な交流が生まれ、陰気な策謀はことごとく潰されたそうだ。

「結局は終わり良ければ、全て好しとした国王さまのお言葉により関係者一同の責任は不問にされましたが、問題児筆頭の責任として成人してからは国に誠心誠意つくすようには言われておりました。」

その結果が、ジンとリベルター兄さんの王宮魔技師としての職だったようだ。

なんとも言えない就職理由である。

「あははは・・・、スゴイねえ。」

乾いた笑いしか出てこない。

リベルター兄さん、多少の無茶につきあう男兄弟がいなくても凄体験をしているようですな。

サカエさんと会話しながら、僕はあてがわれた自室へとたどり着いた。

「それでは、もうすぐ夕飯となります。後ほど、迎えにあげます

ので、それまではごゆつくりとお過ごしください。」

色々とおったけど、ジンやリベルター兄さんの意外な話なども聞けて楽しかった。

「それにしても、そんな家族を王宮で雇う王様って、どんなヒトなんだろうねえ。」

僕の問いにアオは何かを知っているのか

「みや、みゅみゅん。」

それは、実際に見てのお楽しみでしょう。ただ、蒼溟にとって悪いヒトではないから安心していいよ。と答えてくれた。

それから、ほどなくして呼ばれた僕はジンの奥さんであるフィラにサカエさんも混じって楽しいひと時を過ごしたのだった。

ちなみに、ジンはその日のうちに仕事が終わらなかったのか帰宅することはできませんでした。

2 - 5 意外な事実！？（後書き）

実は、悪ガキ体質なジンの家族でした（笑）
先日、序章の最後に閑話01を追加しました。よかったら、見て下さい。

2 - 6 百合の香り

蒼溟^{そうめい}をともなつて早々に仕事場を退室する父を見送り、フェリシダーはため息をひとつこぼすと自分の職場へと向かった。

「・・・せつかくの長期休暇なのだから、職場に近づきたくないのだけれど。」

できることならば、このまま回れ右をして帰宅したい。だが、そんなことをすれば、父親から何を言われるかわかったものではない。「はあ」。何事もあきらめが肝心かなあ・・・。」

職場へと続く通路の途中で出会う侍女や官吏たちに…表面上は…微笑みを浮かべながら挨拶をしていくフェリシダー。

彼女のちよつと物憂げな雰囲気と生来の美貌が合わさり、その姿は思わず見惚れてしまうほどの色気を放っていた。

そして、そんな彼女を熱に浮かされた様子の侍女たちが見送り。
・何故か、男性官吏たちは恐れおののく様子で足早に過ぎ去っていくのだった。

向かう先は、王城内にある後宮。

后妃^{こうひ}や側室、王族の姫君などが住まう離宮で、基本的に男子禁制の場所とされているが王から許可があれば出入りできる。ただ、無用の諍^{いさか}いや憶測などを敬遠するために滅多なことではその許可が下りることは無い。

近衛師団に所属する女性騎士のほとんどは、この後宮で働いている。

身の回りの世話を担当する侍女などもいるが、そのほとんどは王族に縁^{ゆかり}のある者たちで少数のため、女性騎士が侍女と同様の雑多な事柄を受け持つのが慣例となっている。

女性騎士たちは男性騎士たちのように厳しい訓練と規律を課せられている。

さらに、近衛師団は、騎士達のなかでも身元も教養、作法にも精通するエリート部隊とされているために所属する者たちのほとんどが貴族出身でもある。

そんな、花形部隊でもヒトであるが故に過ちを犯すこともある。それが、後宮に勤める侍女や王族との恋愛関連。

相手が独身であれば特に問題は無いのだが、何故か、そういうのに限って既婚者や婚約者のいる者たちを選んでしまう。恋愛による泥沼関係というのは、物語だと面白いのだが現実にはやられると迷惑極まりない。

それ故に、後宮に勤める者たちは常時、人間関係や接触してくる官吏などを監視して、されているという面倒臭い職場でもあった。

そして、女性のための職場だからなのか。

フェリシダーは個人的に頭痛の問題があった。

「あら？フェリシダー、今日は休みじゃなかったの。」

女性騎士たちの詰め所にいた同僚に軽く挨拶をする。

「まあ、そうなんだけど。用事のついでに、様子を見に来てみた。」「苦しい言い訳をしつつも、さすがに父親に言われて渋々来たとはいえない。」

「へえ、珍しい。本当は、愛しの姫君パシエンテ様に会いに来たのでは？」

「えっ？！とうとう、フェリシダーも姫君の恋心を受け入れる気になったの！」

同僚の茶化しに文句を言う前に、休憩中のほかの子が話題に参加してきた。

「なっ！？恋心ってなによっ。パシエンテ様は優しいから気を使っているだけでしょ。邪推するのは失礼よ。」

私がそういつて戯言を窘めていたと、何故か詰め所にいる他の同僚たちからもため息をつかれた。

「はあ。パシエンテ様、可哀想。」

「相手がここまで、ニブニブの鈍感娘ではねえ。」

「いや、鈍いにも限度があるでしょう。実は気付いていながら、はぐらかしているのでは？」

「ええッ、それじゃあ弄^{もてあそ}んでいるの！？騎士にあるまじき行為だわ。」

姦しく騒ぐ同僚たち。

弄ぶってなんだ、人聞きの悪い。それに、“も”って何よッ。誰か他に恋仲になった人でもいるのかしら？

私が無言で悩んでいると、その姿を見た皆は肩をすくめながら「ああ。分かつてはいたけど、ダメダメですねえ。」

「パシエンテ様、なんでこんなに恋愛事に縁遠い人を好きになったのかしら。」

「病弱で外のことを知らないから。この娘の言動にまどわされてしまったのね。」

「天然のタラシですねえ。しかも、無自覚だから尚、始末に負えない。」

ちよつと、待つて。

「・・・副隊長。何気に会話に参加したと思つたら人の事をタラシつて酷くないですか。」

「でも、本当のこと・・・。」

表情を変えずに淡々とのべてくる小柄な女性騎士。常に沈着冷静で、小さな身体を逆手に相手を翻弄する戦い方をする尊敬できる人ではあるのだけれど・・・。

「私がいつ、誰を、たらし込んだというのですかッ!!」

そんなことができるのなら、私にも彼氏の一人や二人いてもいいでしょう。現実・・・彼氏どころか、男性とまともに会話した事なんて数えられるくらいよッ。

「うわあ。ホントに気付いていない・・・。」

「パシエンテ様に何かあると真ッ先に駆けつけるくせに。」

それは当たり前でしょう。私はパシエンテ様付きの騎士なのだから。

「そうそう。この間なんて、パシエンテ様が珍しく庭先に出ていた時なんだけど……。」

「あつ、それ知ってる。熱が出て、部屋に戻るときにお姫様抱っこで連れて行ったんでしょ。」

ん？・・・身体に力が入らなくて歩けなくなった時の事かしら？
「それで、部屋まで連れて行ったフェリシダーがパシエンテ様をベッドに押し倒したという話だね。」

「ちょ、ちよつと待った——ッ!!」

いつの間にか私の背後に居る隊長がとんでもない事を言った。

「「ええ~~~~っ!? 本当ですか、隊長!!」」

皆の食いつきがスゴイ……。

私の肩に腕を置きながら、長身の隊長は楽しそうに笑いながら暴露していく。

「ほんと、ほんと。あれを見た時には、さすがコンスルタの娘だと思つたもの。」

「あ、あれは、ちよつと躓^{つまづ}いただけです。押し倒してなんて、いませんッ!!」

顔を赤くしながら弁解するフェリシダーを楽しそうに隊長はからかう。

「そお〜お? ちゃっかり、姫様の胸元に顔を埋めていたのにい〜。」

「それは、衝撃を緩和させるために膝をついたから……。偶然ですッ!」

胸元に顔を埋めていたことは否定せずに、そつばを向いていい訳する。

「ホッ〜ほお〜。・・・柔らかかった?」

フェリシダーが逃げられないように肩をしっかりと捕らえながら、隊長はさらに追及する。

「そ、それは……。」

頭から湯気が出るくらい真っ赤になったフェリシダーに副隊長がとどめを刺す。

「…むつつりスケベ」

ポツリと告げられた言葉。その破壊力はフェリシダーが涙目でいじけるほどであった。

「うん、うん。フェリシダーがいるとストレスが発散されていいねえ。」

隊長が清々しい笑顔でフェリシダーの頭を子供にするように撫でてやる。

「うううッ。これだから、休みの日にまで職場に来たくなかったのにい。」

フェリシダーの泣き言に

「みんなのいい玩具…。」

容赦なく副隊長はツッコミをいれる。

「副隊長」。先ほどから冷たいですッ！もっと、優しくしてくれてもいいと思いますけど。」

「ワタシに同性愛は無いから、無理…。」

「同性愛ではなく、部下に対してもう少し優しくして下さいッ！」
フェリシダーの言葉に副隊長は無表情のまま肩をすくめてやり過ぎす。

「まあまあ。折角だから、パシエンテ様にも挨拶をしていきなさい。きつと、喜ぶから。」

率先してかかっていたことを棚上げして、隊長は上司らしいことを言う。

「…隊長が暴露したくせにい。」

恨めしそうに見つめてくるフェリシダーに隊長は耳元に顔を寄せて

「…そんな事を言つと、さらに皆に暴露するぞつ。」

ニヤリと笑いながら言う隊長。

心当たりがあるのかフェリシダーは慌てて敬礼をすると

「時間も無いことですし、パシエンテ様に挨拶したらずくに退去させていただきますね。」

返事も聞かずに詰め所から飛び出していった。

「まったく。見た目は落ち着いているように見えるのにねえ。」

隊長の苦笑気味なつぶやきに他の隊員たちも笑う。

「あははは。フェリシダーは結構、おっちょこちょいですからね。」

「……そこが可愛いと思っているくせに。」

からかわれつつも職場の皆に愛されているフェリシダーであった。

「パシエンテ様、今日の調子はいかがですか？」

幼少の頃から仕えてくれている侍女が紅茶を入れてくれながらたずねてきた。

「大丈夫ですよ。珍しく、調子がいいみたいです。」

微笑みながら答えるパシエンテに侍女も微笑み返す。そんな和やかなひと時に、来客を知らせるノックが聞こえてきた。

「あら？どなたでしょうか？」

生まれつき病弱な第二王女は、ほとんど部屋から出た事がなかった。たまに後宮の庭先へ日向ぼっこをするくらい。そんな日常だから、わざわざノックをして来訪を知らせる者など心当たりがないのだが。

「あら、あら。ようこそ……というべきでしょうか？」

応対に出た侍女の楽しそうな声が聞こえる。

「姫様。フェリシダー様が来られましたよ。」

ええッ？！彼女は長期休暇中だったのではないかしら。どうして！？

「ごきげんよう、パシエンテ様。今日は体調がよろしいようですね。」

優しく微笑まれて、パシエンテは頬を赤らめた。

「ごきげんよう。今日はどうしたのですか？」

不意に訪れた彼女にドキドキしながらも、平静をよそおって聞いてみる。

「父と共に祖父を城まで連れてきた帰りに、こちらへよらせていただきました。」

ちよつと苦笑しながら答えてくれるフェリシダー。

休みにもかかわらず、私に会いに来てくれたのだと思うと嬉しさで声が出ない。

「フェリシダー様のお爺様というと、魔技師のジン様の方でしょうか。・・・職場復帰なされるのですか？」

私がボンヤリしている間に侍女が変わりに答えてくれていた。

「いいえ。そういった予定はありませんが、一応は王宮魔技師として登録されている身ですので。たまには職場の方に出向いてもらっただけですよ。」

そこで、職場に連行したとは言えない・・・。

そんな心中を察したのか、侍女は姫君に見えない位置でフェリシダーに向かって苦笑して同情した。

それから、フェリシダーの上司である隊長が乱入してくるまで三人は和やかに雑談をするのだった。

2 - 6 百合の香り（後書き）

第二王女のパシエンテは百合の方です。

今回は、大幅に更新が遅れてしまいまして、すみませんでした。
何故か、予想外の人たちが出てきて作者も困惑中です。特にパシエンテは登場させるつもりなかったんだけどなあ。
流れに身をまかせつつ、次回の更新は少しでも早くしたいと思います。

2 - 7 様々な思いと親心？

王城内にある塔のひとつの執務室に残ったジンとその上司であるインテグリダーは微妙な緊張感のなかお互いの出方を探っていた。

「はあゝゝ、いつまでも睨めっこしていてもしょうがないか。」

ジンは大きなため息をつく、執務室にあるソファに座ると、

「腹の探りあいには終わりにしようぜ。とりあえず、飲みながら話すかあ。」

「一応、勤務時間内のはずだと思ったのだが。」

注意する上役に嫌そうな顔をしながら、

「ああ？どうせ、仕事になりやしねえだろうが。こんな面倒臭いこと飲まずにやってくれるかってえの。」

呆れた表情をしながらも、ジンの望みどおりに酒の準備をさせ、自らも対面席へと座る。

「それで、ジンはなんでまた厄介なことを持ち込んでくるんだ。」

今までの緊迫感が嘘のように、インテグリダーは親しげな感じで文句を言う。

「一応、不可抗力でもあるぞ。」

「どうだか……。私に何か恨みでもあるんじゃないかと疑いたくなるよ。」

異邦人を一人、国に抱え込むというのは外交上、様々な軋轢を生させるのだ。しかも、この国にはすでにジンという異邦人がおり、その影響力は様々な部分にまで及び他国により常に警戒されているのだ。

「まあ、多少は悪かったとは思っているぞ？・・・多分。」

お互いに手酌で飲みながらも遠慮なく言う。

「はあ。念のために確認しておくが、同情心であの少年を引き取った訳でもないのだろう？」

当然のように聞くインテグリダーにジンは苦笑しつつも肯定する。

「まったく無いというと、嘘になるがなあ。だがな、蒼溟を放置しておくのは危険すぎると判断したからというのもある。」

ジンの言葉を少し思索しながら

「フェリシダーや森の主殿の書簡では、特に問題のある少年には思えんが。」

それ以外にもインテグリダー個人の諜報員を使って観察したところ、人の良さそうな感じしか見受けられないとの報告だった。

「実のところ、それが問題なんだ・・・。」

渋い顔をしながらジンは言う。

「俺がいままで調べたところ、異邦人としてこの世界に来た連中はみんな大なり小なり傷を抱えている。」

「傷？それは違法行為を行ったことがあるという意味か？」

インテグリダーの言葉に

「そこまでは分からねえが、俺の言う傷とは心の問題だ。」

それは、人間不信だったり、自己嫌悪だったり、はてはコンプレックスの塊と様々ではあった。

「そんな連中だったから、元の世界に対しての執着も薄い。」

今までの常識が通用する世界に戻りたい、けど戻れないならそれはそれで、別にかまわないか。と考えるような奴らばかりだったのだ。

この事から、真剣に元の世界への戻り方を探すことがなく。帰れるのか、帰れないのか、その判断すら曖昧なのが現状だ。

「心の傷ねえ。それは、別に異邦人だけの問題ではあるまい。」

異邦人が問題視されるのは、魔術特性が高いことだけが理由ではない。彼らはいわば、大きな赤子と一緒になのだ。

言語はもちろんのこと、常識や倫理感すら持たない彼らを自らの私心によって好きなように教育することが可能であり、盲目的な依存心を植え付けることも可能であり、使い勝手の良い私兵とするにはあまりにも都合がいいのだ。

「ああ、それだけで言えば他種族の子供たちの方が問題だろうなあ。」

だがな、異邦人でやつかいなのは純真な赤子じゃねえことだな。」

元の世界での知識に知恵、世界間移動の副作用なのか、高い魔術特性。それらだけでも、厄介なのに彼らはある程度成長した人族でもある。他種族よりも欲が深いのが人族の特性であり、その特性は異邦人にも当てはまるのだ。

「まあ、ここに來た異邦人の大半が樂觀的で能天気な性格だから致命的な状況は引き起こされてはいなかったが、選択肢の中にはこの世界を滅ぼす可能性があった奴だっている。」

「それは、クリミナルのことを言っているのか？」

この世界の様々なところで問題を起こす世界の敵でもある集団。

「いや、クリミナルの連中は確かに危険ではあるが、根絶やしにするほどの兵器を使用する様子はいままでのところ見受けられない。」

確かに、戦争を起こす引き金とも言える問題を起こすことはあるが生物兵器のような無差別殺戮は起こしてはいない。ただし、これは“今までは”という注釈がつく。これからもしないとは限らないのだ。

「ジン。その言い分だとあの少年であれば、それを行うかもしれないと言っているように聞こえるが？」

その言葉にジンはあえて無表情になると

「ああ。蒼溟にはその可能性がある。」

その様子にインテグリダーは顔をしかめる。

「その根拠は何かあるのか？」

手元にある情報の中で、ジンが示唆するような根拠に至るものは一切ない。それこそ、ジンが何を思っているかの少年を危険視するのかが、まったく解らないのだ。

「蒼溟は、純粹過ぎるからだ。あいつの様子を見てみると時折、不安になる。」

特殊で歪な村ではあるが、そこに住む人々にとって樂園とも言える場所での育ち。今までの異邦人とは違い、様々な技術に特殊な知識人の持つ悪辣な部分を知らない様子の純真な少年。

「あいつがもしも、この世界に絶望する事があつたとしたら。自暴自棄になって、世界を滅ぼすのではないかと思つちまうのさつ。」

それは、ジンにも覚えのある感情でもあつた。自分を取り巻く全てに絶望し、自分に対して差し伸べてくれる手の存在に気付かずに、ただ自らの破壊衝動のままに暴れていた時代。

だが、それがあるからこそ。この世界に来て初めて自分と向き合う事ができ、自らの守りたいものを得ることが出来た。

「ふむ。それを可能にしてしまう程の能力の高さだと判断すればいいのか？」

インテグリダーにとって、その考えは珍しいものではなかった。

この世界には人族以外の他種族が存在し、その中には世界を滅ぼすことが可能な力を有するものもいる。

それこそ、破壊衝動のままに行動されれば世界滅亡など数千回と行われている事だろう。

「ふむふむ。」

これは、ジン自身がこの世界に並みならぬ愛着心があると判断すればいいのか。それは、自らの国をこよなく愛するインテグリダーとしては喜ばしい事ではあるが、そこまで悲観するものでもないように思えた。

「それで？ジンはもしも、あの少年が破壊衝動に突き動かされて世界を滅ぼそうとするようであればどうするつもりだ。」

インテグリダーの意地の悪い質問にジンはしかめっ面をする。

「あん？そんなもの、はっ倒しても改心させるさつ。義理とはいえ、俺はあいつの父親となつたんだ。子供を真つ当な道に戻してやるのも親の役目だろうがあ。」

「そこまで認識しているのなら、悲観的にならんでもいいだろうに。」

その言葉に少し悲しそうな顔をするジン。

「この国であれば、そんなに悲観しないさつ。でもな、インテグリダーも知つての通り他国での異邦人の扱いは時として想像を絶する

酷さだぜ？」

「ふむ。まあ、率直に言つて“道具扱い”だろうな。」

あつさりと肯定するインテグリダーを軽く睨む。

「お前は、昔から冷たいヤツだなあ。」

ジンの言葉にインテグリダーは肩をすくめてあつさりとやり過ぐす。

「まあ、私にとって大切なのはこの国であるからなあ。」

ラント国にとって有益であれば、インテグリダーはどんな手段もとるし、敵対する勢力とも手をつなぐだろう。

「ジンがこの国に改革を起こす時だつて、それが国にとって有益だと思つたからこそ。あの少年がこの国に無害で利益をおこさないのであれば、私にとってはどうでも良い事だ。」

酒を一氣にあり断言する。

「それにだ。ジンの家族たちはこの国に対して当初の目論み以上によくやつてくれている。」

ラント国の貴族であるコンスルタ家の婿養子になった息子のリベルター。ジンが王族より下賜されたデステイノの家名を継ぐ為に孫娘のフェリシダーは戸籍上、ジンの養女となっている。そして、親子そろつてこの国に仕えている。

「他の親族連中もこの国に貢献してくれているからな。それらを加味してもあの少年を保護することに対して異論を唱える奴らはこの国にはいないだろう。」

だが、他国にとっては面白くない事態ではある。そして、ジンたちの存在を疎ましく思っているのは自国内にもいるのだ。

「お前が、あの少年に対して真剣に向き合つというのなら、反対はしない。だが、賛成もしないからな。あくまでも、中立として接するだけだ。」

それは、愛国心溢れるインテグリダーの優しさでもあつた。
「そうか。・・・ありがとう。」

言外にインテグリダーは国の為に少年を利用することはしないと

確約してくれたのだ。

もし、利用するつもりであれば、少年の保護は国が行い。その行動は様々な制約により制限され、この国に縛られてしまう。そして、明確な後ろ盾のない異邦人たちのほとんどは、都合良く使用され、処分されてしまう。その処分方法も様々ではあるが、決して幸せとはいえない状況に追い込まれることは明白である。

「ふんっ、別に礼などいらん。それよりも、溜まった仕事を早急に片付けんかッ!!」

「エッ?!俺の役職は窓際族だろうに。」

その言葉にインテグリダーはニヤリと笑う。

「ハッ!使える者は何でも使うのが官吏という者だ。今まで、遊んでいた分も働いてもらうからな。」

「なっ、なにー!?」

うるたえるジンに底意地の悪い笑顔で対応するインテグリダー。

なんだかんだと言いつつも、かつての戦友同士。お互いを尊重し、互いに大切とするものを理解し、折り合いをつけるのだった。

2 - 8 未知なる魔境へ… ようこそ♪

翌朝、意気揚々と迎えにきたリベルター兄さん。

「やあ、おはよう。蒼溟^{そうめい}クン、昨日はよく眠れたかい？」

「おはようございます。ぐっすりと眠れましたよ。」

僕の返事に満面の笑みを返してくれるリベルター兄さんの背後にジンの奥さんであり、兄さんの母親でもあるフィランさんが微笑みながら立っていた。

「おはよう、リベルター。久し振りねえ？」

「ビシッ！？」と擬音が聞こえてきそうなくらい固まるリベルター兄さん。

「・・・おはようございます。母上、本日はお日柄も良く・・・。」

「ええ、天気も良くて気持ちのよい朝ね。ところで・・・。」

久々の実の親子による対話は、母親からのお説教から始まったのだった。

「やれやれ、朝一番から母上のお説教とは。やっぱり、私にとって実家は鬼門ですねえ。」

あれから玄関先で二時間くらいお説教が行われ、僕はサカエさんとお茶を飲みながらその様子を見学していた。

「さて、気を取り直しまして。ギルドの穴蔵^{ダンジョン}案内もいいのですが、本日は私の職場にある魅惑の空間へのご招待しましょうかね。」

“魅惑の空間”と聞いて、アオが僕の懷から顔出す。

「ミユッ!？」

なに、その楽しそうな名称!？と…表情では一切分らないけど…期待に満ちた様子の薄青色の球体生物にリベルター兄さんは、満面の笑みを浮かべる。

「ふっふっふっ……。期待は決して、裏切りませんよ。」

それから僕は王城へ向かって歩き出した。

「ねえ、リベルター兄さん。そこは、王城の中にあるの？」

「一応王城の外となってますが、厳密に言うところ中間地点ですねえ。」

「……ああ、ほら見えてきましたよ。」

そこは王城の外堀と街の内壁の間に店舗が密集した地区だった。

「うわあ、スゴイ雑多な雰囲気のところだねえ。」

僕とアオはそのギョウギウに押し詰めた感じにビックリしてしまふ。

「ここは、国営の商店街で主に王城で働いている人たちが経営しています。」

「えっ？それは副業ということ？」

僕の問いに兄さんは、悪戯っ子のような顔をする。

「当たっているような、いないような。元は王城勤めの者たちへの娯楽として、学園のクラブ活動のようなことを提供していたんですよ。」

騎士や兵士、官吏や侍従に下働きの者たちなどで王城内は保たれている。だが、生活の大半を仕事につぎ込み過ぎて、過剰な権威欲や物欲、歪んだ優劣感などが発生することがある。それを少しでも緩和しようということでクラブ活動を実施してみたのだ。

その内容は、多種多様で規模も様々だ。

基本的な規律として、人様に迷惑をかけること、利潤を追い求めないこと、仕事に影響を及ぼさないこと、が設けられている。この他にも細かい規約は存在するが、王城に勤めている者であれば、誰でも参加できる。

「まあ、この国営商店街は学園祭に似たようなノリですね。ここで得た収益の一部は、クラブ活動の費用や本職である仕事場の経費として使われることになります。」

へえ、仕事以外に興味を積極的にもつことができるんだ。

「それに、本職を引退した者たちが次の職場として選びやすいこともありますし、趣味で作ったり、発明したり、発見したもので国益になりそうなものは、国がクラブから買い上げる仕組みもありますから。」

「スゴイねえ。でも、それはそれで問題が起きるのでは？」

例えば、誰かが見つけたものを横取りするとか、他国のひとが賄賂を送って本職の方に害を及ぼすとか・・・考え出したらキリがなさそう。

「ありますよ。それこそ、他の種族では見られないような多種多様な問題に犯罪、ルールなど。それらを“国の直営地区”を利用して独自の処罰方法で裁きます。」

ニッコリと笑いながら言う兄さんが怖いです。

「まあ、その発足から処罰まで独特過ぎてココは混沌となっていました。でも、ココに関わる者たち全てがこの場を大切に、そして大好きなので、逆に普通の犯罪は抑止されていますけどね。」

ちよつと誇らしげな兄さんの表情。愛国心からなのか、それとも仲間意識からなのか、僕には分からないけれど、そんな兄さんが羨ましく感じた。

「真面目モードはここまでにして・・・蒼溟くん、ここは一般的に“趣味人の集い”と言われています。その真髄を今からお見せしましょうッ！」

リベルター兄さん曰く、真面目モードでは無いその姿は、悪がきにしか見えない。

「みゆ、みゆ——んッ——」

面倒臭い説明は終了にして、面白いもの楽しいことを目指してGO！と叫ぶアオ。

「そうそう、インフィニティ殿は分かっているしやる。何事もメリハリつけて行う方が、効率いいのです。仕事するときは真面目に遊ぶときは真剣に、騒ぐときはトコトンはっちゃけるのです！」

握りこぶしを作つて、力説するリベルター兄さんの肩にオアが飛び乗り、その通りだあー楽しむときは全力でGO!!と叫ぶ。

ああ、実は似たもの同士？

「さあ、蒼溟クンもそんな所で悟りに至っていないで、魔境へと繰り出しますよぉ〜」

似たもの同士たちにより、僕は趣味人たちが集う魔境へと連行されるのだった。

2 - 8 未知なる魔境へ… ようこそ♪ (後書き)

“趣味人の集い” 国営商店街は、日本のアノ電気街を連想していた
だくと分かりやすいかもしれません(笑)

2 - 9 好きこそ物の上手なれ

国营商店街へと入ると、そこは色彩豊かな店舗が立ち並ぶ一種、異様な雰囲気だった。

「ああ、そうそう。蒼溟くんは、ピンクのラインより先の店舗に入っただけじゃないよ。その先は、成人した…リスクを理解したヒト達…専用区域ですから。」

建物の間から奥の暗がりへとつながる道に引かれている線を指さしながら、リベルター兄さんがにこやかに説明してくれる。

「みゆくう？」

具体的にはどんなお店があるの？とアオが尋ねる。

「そうですね…。差し障りがなさそうな所で…。」

自分の肩に乗る薄青色の球体生物に兄さんは丁寧に説明を始めた。「まずは、飲み屋でも男女専用と共通の三種類に分かれているとか。特殊な性癖に目覚めた人用とか、怪しげな薬から玩具、服飾とか。」

飲み屋は、お酒や軽食などを主に扱う飲食店。ただし、一般向けとは違い男専用、女専用、共通と分かれているのには、それなりの理由があった。

それぞれの専用は、お客を限定することにより無用な争いを避けるためでもある。酒に酔い女性客にちよっかいを出させないように、というのもあるが男専用なら女性には聞かせられない下ネタ系から身体のちよっとした不調などの話を気軽にできる。

女専用は、男性の目を気にせずに素の自分を出せる事と職場でのセクハラの憂さ晴らしとして、男性従業員に逆セクハラを行うこともできる店もある。

「まあ、どのお店も従業員の趣味と、ある意味罰ゲームを兼ねた内容ですねえ。一応、トラウマにならないように最低限の注意はして

いますが・・・三割は新たな自分を発見し、四割は諦めと忍耐を身につけ、残りの三割は・・・二度と罰を受けないように真面目になりますね。」

えーと、結局は無事には済まないということだろうか？

僕が若干引いているのを他所に、リベルター兄さんはさらに詳しい内容をアオに説明していく。アオはそれを楽しそうに聞いているけど、時折“子猫さまを愛でる会”とか“騾しつけの仕方研究会”に“禁断の愛後援会”、“胡蝶こてつ之夢クラブ”等々。その名称だけで、なんとも言えない悪寒がする。

「今から行くのは、どんな所なの？」

二人？の会話に筋肉マツチヨな男性メイドに、美女による執事とか、妙な単語が聞こえてきて僕は不安のあまりリベルター兄さんに聞かずにはいられなくなった。

「エッ？ああ、大丈夫ですよ。私が今から案内するのは、“魔工術まこうじゆつ式研究会”という大手の善良なクラブですから。ほら、前に父上が乗り回していた“飛翔艇ひしょうてい”を作成した所です。」

ジンの乗っていたエアバイクかあ。

道楽で研究開発した物だと言っていたけど、専門の研究機関ではなくて、王城勤めの人達のクラブ活動で作られたとは思わなかった。

「さあ、ここですよ。」

王城の外堀にはめ込まれているような感じの大きな倉庫のような建物。中に入ると一つの大きな空間を様々な衝立で区切った様相で様々な機器を作成、研究しているようだった。

「うわあ——、スゴいねえ。」

驚く僕にリベルター兄さんは微笑みながら、さらに奥へと進んでいく。

他の区画よりも大きめに取られた空間に、クレーンのようなもの

で吊りあげられた“飛翔艇”があった。

「この区画が“飛翔艇”の研究開発を担当しています。ちなみに、実用に耐えられるようになれば国が買い上げてくれる予定もあります。」

「んっ？なんだあ、リベ坊じゃねえか。」

体格の良い中年男性がリベルター兄さんの後頭部を殴りながら、話しかけてきた。

「イタツ！？何をするんですか、大将！！」

憤慨する兄さんを軽くあしらい、その人は僕を見つめる。

「おう、俺はこの研究施設を任されているガリーだ。まあ、普段は“大将”と呼ばれているがなあ。」

軽く自己紹介をする。

「昔は王城の庭師として勤めていたんだが、事情があつて辞めてなあ。次の職を探していたところ、ジンの推薦でココの責任者になっちまったのさ。」

僕らはガリー大将の案内で、事務所へと向かった。

「あつ、そうそう。他の研究グループからリベルターが来たら声をかけて欲しいと言われていたんだが。どうする？」

問われた兄さんは、少し考えこむ。

「そうですねえ。今日は蒼溟クンの案内人として来ていますからねえ。」

「僕の事なら、気にしなくてもいいよ。ここで待っていてもいいし、時間がかかるようなら自分で帰れるから。」

僕が気を使うと、それでも渋るリベルター兄さん。

「それなら、ワタシが案内役を代わりましょうか？」

事務所のドア付近につなぎ姿の美少女が立っていた。

「レイル王女様。」

「ここでは、敬称などいらない。趣味の自由時間くらい好きにさせて。」

リベルター兄さんの言葉に、王女さまは不服そうに言う。

「いえいえ、王宮魔技師筆頭としては姫様を呼び捨てになど出来ませんから。」

「その割には、いつも随分な扱いを受けているように思っけど？」
可愛らしく首を傾げる王女さま。嫌みというよりも、素で不思議に思っている様子だ。

「いやまあ、そうですね。一応、他のヒトからの目もありますから。できれば、ご容赦していただくと私としては、ありがたいのですが。」

苦笑するリベルター兄さんの言葉に、王女さまも思い当たる事があるのか、ため息をつく。

「ああ、本当にねえ。表面上だけの敬意など、式典の時だけでいいと思うのだけど。」

「まあ、彼らにとつてはソレしか頼るべき寄る辺のない者たちでしょうから。かつての忠義ある者たちでも子育てまで上手とはいかなかったようですからねえ。」

しみじみと、こき下ろすリベルター兄さんを見ると、本当に他のヒトの目を気にしているのか怪しい。

「それでえ、どうすんだ？ 姫様自らが案内役を申し出てくれているが、リベルターは残るのか？ それとも、ついて行くのか？」

ガリー大将の言葉に少し思案した後に、

「そうですね。ここは姫様のお言葉に甘えて、お任せしましょうか。蒼溟クンもそのほうが嬉しいでしょうから。」

うわあ、兄さん。とつても、イイ笑顔ですねっ。

「姫様、この者はジンの養い子にして私の義理の弟になります。名前は、蒼溟・東雲。異邦人であり、魔の森の主の関係者でもありません。」

紹介されて僕はお辞儀をする。

「そして、私の肩にいるのがインフィニティ殿。蒼溟クンは“アオ”と呼んでおります。」

リベルター兄さんは、肩に乗ったままの薄青色の球体生物も紹介

する。

「みゆ、みゆみゆ。」よろしく、“アオ”と呼んでもいいよ。

アオの言葉にゆっくりと頷く王女さま。言葉がわかるのだろうか？

「・・・蒼溟に、アオ殿。ワタシはこの国の第一王女のレイル・ラントだ。よければ、レイルと呼んでほしい。」

手を差し出す王女さま。戸惑う僕に、リベルター兄さんは背後から耳元に囁く。

「よかったら、姫様の友人になってあげて下さい。彼女は立場と様々な事情から年の近い友人がいません。蒼溟くんなら、問題ないでしょうから。」

その言葉に後押しされて僕は決断する。

「宜しく、レイル。友人として付き合ってくれと嬉しいかな？」

僕の言葉に王女であるレイルが満面の笑みで答えてくれた。その綺麗な笑顔に僕は赤面してしまった。

「さて、後のことは若い二人に任せて。邪魔者な私は、他の研究グループの連中と親睦を深めてきますかね。」

お見合いの定番セリフに、泣き真似をしつつ、アオを僕に手渡すとリベルター兄さんは事務所から出て行った。

「・・・・・・・・・・。」

恥ずかしさから、レイルと僕は真っ赤になってうつむいてしまった。

失念していたけど、事務所内にはガリー大将に女性従業員も複数いて、そんな僕らを微笑ましそうに見つめていました。

「へえ、レイルは王女さまなのに“魔工術式研究会”の一員なんだ。」

「ああ。王族が参加するのは本来いけないことなのだが、無理を言っただけで認めさせた。それに、魔工術式は様々な開発の余地があって面

白い。」

僕とレイルは、事務所内の応接用のソファに座り雑談をしていた。アオはさり気にレイルの膝の上に乗って嬉しそうにしている。

「そろそろ昼時だな。せっかくだから、外に食べに行くか？」

僕らは連れだって、建物を出ると国营商店街にある飲食店のひとつに向かった。

「国营とはいえ、レイルは自由に歩き回って大丈夫なの？」

ここに居るのは王城勤めのヒトたちとはいえ、戦闘に特化した護衛がいるわけではない。王族が一人歩きするなんて、あまりにも不用心な気がしたのだ。

「まあ、ココは人の出入りが自由だから、安全とは言い難いがな。それでも、護身用の装備に技術もある。」

そういつて、レイルは首にかけていたアクセサリーを見せてくれた。

これは、ギルドの認証タグのような機能も持っていてレイルの身に何かあれば王城にすぐさま連絡がいくし、位置も確認できるそうだった。

「後は、ワタシが作った武器だが。大型の肉食獣でも一撃で気絶させることができる威力があるから、並みの相手では太刀打ちできないな。」

「へえ、武器まで作るなんてスゴいなあ。」

感心する僕の姿に、ちよつと照れくさそうに頬を赤めるレイル。

「コホン。ほら、ここがお薦めのお店だ。」

お店に入ると、従業員のヒトがすぐに来てくれて奥の人目に付かない席に案内してくれた。

「ここは“食材研究会”と“料理開発部”が経営している店で、半年に一回の割合で宮廷料理師たちと技を競いあっている。そのおかげで、とっても美味しい料理が割安で食べれる隠れた名店の一つなんだ。」

レイルのお勧め料理を頼んで、待つこと数分。美味しそうな匂い

に彩り豊かな料理の数々に僕とアオは喜んで食べた。

「蒼溟は、ギルドの登録は済ませたのだろう。探求者として、良質の魔鉱石が手に入ったらワタシに売ってくれないか？」

あれ？個人での売買ってできるのかなあ。

特定ダンジョンで回収した魔鉱石は基本的にギルドで換金を行う。一応、申請すれば加工前の魔鉱石を持ち出すことが可能だとは聞いているが……。

「ああ、それなら大丈夫だ。申請時に取引相手としてワタシの名前と依頼書を見せればいい。その時までには、正式な依頼書を作成しておこう。」

「うん。問題が無いなら、別にいいよ。」

僕が快く了承すると、レイルは嬉しそうに微笑んでくれた。

「うん、こんなに綺麗な子に頼まれたら、否だとは言えないよねえ。」

それから僕らは、レイルの案内で国営商店街…年齢制限なしの区域のみ…を見て回り、楽しいひと時を過ごした。

その後“魔工術式研究会”の建物まで戻った僕らは、帰れそうにもないリベルター兄さんを置き去りに、レイルと別れて家路についてのだった。

ジンの屋敷に戻り、一日の疲れを癒すためにゆっくりと湯船にかかる。

「はあ……。今日も色々あって、楽しかったね。」

「みゅー……。」

「うん、面白かった。と答えてくれるアオと一緒に僕はノンビリと浴室の天井を見る。」

この街に来て、そんなに経っていないのに僕は魔の森が懐かしく感じた。あの森の主は純白の獣姿で今も散策しているのだろうか。

それとも、人の姿で宮殿にいるのかな。

「ねえ、アオ。ギルドの認証タグができれば、アルシュに連絡してみたい？」

僕の問いかけに、アオは快く請け負ってくれた。

久々にアルシュとも連絡が取れる事と、この世界に来てはじめて年の近い友人が出来た事に僕は嬉しくてたまらなかった。

2 - 10 初めてのお仕事

さて、本日は探求者ギルドへ向かい個人認証用のタグと銀行の通帳みたいなギルドカードができていますはずだから、そこに僕の個人情報を組み込む作業をしなければいけないらしい。

「個体情報を採取するって言うていたけど、どうやるんだろう？」

僕は懐にいるアオに聞いてみる。

「みゆ？ みゃ、みゃ〜ん。」

心配？大丈夫だよ、解剖されるわけじゃないんだから。と答えてくれるけど、その例えもどうかと思う。

アオと雑談しながら、僕は一人で暖色系の目立つ建物へと向かった。

受付のカウンターへと行くと以前にあったお姉さんが迎えてくれた。

「いらっしやいませ、蒼溟そうめいさま。」

につこりと優しく微笑むお姉さんに挨拶を返す。その後、お姉さんに連れられて簡易仕切りをされた部屋へ入って行くと、数人の担当者^{担当者}と他の登録者の人達が居た。

「探求者ギルドでは、犯罪歴や身体的、種族的な差別は一切されない代わりに、個人詐称に対しては厳しい罰則を行っております。」

お姉さんの説明によると、例えば王族や高位の生命体であろうと個人認証を詐称する行為についてはギルド全体での処罰対象とされる。その変わり、本人や各ギルドのマスターや高ランクのギルド隊員の認証があれば、通常の閲覧はもちろんの事、ギルド側による高位情報閲覧時でもその情報を開示することを制限することが可能となる。情報閲覧制限に関しては、各ギルドマスターとその都市や国により要請されることもあります。開示についての最終決定権は本人のみです。当然、本人と連絡が取れない場合は開示することはありません。

せん。」

へえ、個人情報の守秘義務は万全ということなのかな？

「ちなみに、その個人情報違法に習得、閲覧しようとしたら？」

僕の言葉に、お姉さんはかなり含みのある笑顔で

「全ギルド職員、及び関係者一同から討伐対象とされます。正直、情報を得るためならギルドよりも他の役所を攻めた方が得策でしょうね。」

でも、そんな事をしてはいけませんよ。と最後に忠告してくれたけど、なんだろう。知ってはいけないことを聞いたような気分になるのは・・・。

「え、え」と。それで、個人情報の採取ってどうやるの？」

僕のあからさまな話題変更にお姉さんは微笑みながら、簡易仕切りのひとつを指さして説明してくれる。

「採取の仕方は簡単ですよ。あの仕切りの中に筒状の更衣室があります。その中で魔術と方術、魔工術式による詳細情報を取ります。」更衣室の中では、全裸になって魔術による精査、方術：医療や占いなどの雑多な手法の総称らしい。による健康診断、魔工術式による精査の三種類が同時に行われる。

それら进行操作する魔技師たちにもその情報は見る事ができないらしい。情報の正否については別の手法によって行われるらしいのだが、その詳細は誰にも分からないとのこと。

「それだと、個人詐称されたかなんて、分からないのでは？」

仮に情報が詐称されたとしても、本人にその意思がなく、偶然に起こった場合などどうするのだろう。例えば、更衣室の中に術式を組み込んだ装飾品を身につけたままだったり、アオのように別の誰かと一緒に入っていたりして情報が錯そうしたらどうするのだろう。首を傾げながら聞くと、お姉さんは以外な答えをくれた。

「大丈夫ですよ。女神さまの目を欺くなど、この世界に生きる誰にも行うことができませんから。」

え」と、それは隠語ですか？それとも、本当に神様が存在するの

だろうか。

僕の不思議そうな顔に、お姉さんは楽しそうにクスクスと笑う。
「すみません。蒼溟さまは、ジンさまと同じく異邦人でいらっしやるので納得できないようですが、この世界で生まれ育った者たちにとって女神さまとは、とても身近な奇跡でもあるのです。」

女神さまの姿を見たものはいない。それなのに、女性だと認識するのは魔技師たちによる技術行使の際に、この女神と契約を交わす時に例外なくそう感じるからだそうだ。

「それに、異邦人の方たちが語られる神様のように、女神さまは万能ではありますが、万全ではありません。その基準がどんなものであるのかは私たちには測りかねますが、その加護と天罰は確かに存在します。」

少し誇らしげに、そして畏怖と敬愛を含んだお姉さんの笑顔に僕は見惚れてしまう。

「それに、私たちが身近に感じる女神さまの使いとしてインフィニティ様がいらっしやいますから。」

薄青色の球体生物であるアオを見つめるお姉さん。その眼差しをさり気に流すアオ。

「そんなにスゴイ存在だったんだ。」

僕の言葉にアオは、さあね、どうでしょう？とはぐらかす。

「あつ、そろそろ順番が回ってきたようです。蒼溟さまはこちらへ。インフィニティ様はあちらでお待ち下さい。」

僕らの様子を微笑ましそうに見つめていたお姉さんが教えてくれる。その後は、特に問題もなく順当に進んだ。

少し驚いたのは、筒状の更衣室といわれていた装置がかなり高度な技術によって作られていたことだ。布で仕切られたような物を想像していたのだが、実物は半透明なプラスチックかガラスのような容器に細やかな模様のような術式、上部と下部には魔工術式で作成されたコンピュータのような機械。更に内部の天井と床には、今まで見たことのない円形の術式が書かれていた。

それらが、魔技師の合図により一斉に稼働して十数分後には終了。後は、念のために身体に異常がないか軽く検査して採取は終わり。

「以外にあっけなかったでしょう？」

僕の呆けたような表情がおかしかったのか、笑いながらお姉さんは聞く。

「なんだか、物々しい説明を聞いていたから。もっと、スゴイことをされるのかと思ってました。」

「クスクス。一応、脅し文句を入れつつ、時間つぶしの説明をするようにギルドからのマニュアルに記載されていますから。でも、説明内容に嘘偽りはないから本当に気を付けて下さいね。」

お姉さんの言葉に素直に返事をして、僕たちは元の場所へと戻る。「それでは、この後はどうされますか？仮認証でダンジョン搜索も出来ますし、低ランクの依頼であれば受諾することも可能です。」

その言葉に僕はアオと顔を見合わせる。

ダンジョン探索は魅力的ではあるが、装備などが準備できていない。それを考えると低ランクの依頼で出来そうなものをやるのもいいかもしれない。

「えっと、僕でも出来そうな低ランクの依頼ってありますか？」

その言葉に、お姉さんはカウンター席で簡易端末を操作する。

そこで僕は初めて気付いたのだが、他の探求者の人達の装備が剣や斧などの原始的なものだった為、技術がそんなに発達していないと思っていたのだが、先ほどの個人情報採取の機械やお姉さんが操作している簡易端末などを見ると、この世界の技術は所々でかなり高度な物を使用している様子だった。

「そうですね。初めての方でもこなせるものとしては、街の清掃活動から個人の邸宅の雑務などがありますが、どうしますか？」

僕は初仕事として、街の清掃活動を選んだ。

この依頼主は、都市の環境整備課からで国からの依頼と認識しても間違いではない。報酬としては大したことはないのだが、トラブルもなければ、必須技能もないので、子供からお年寄りまで小遣い稼

ぎとしては定番だそうだ。

「それでは、期間は一日単位となります。集合場所に行けば、依頼主である環境整備課の担当者がいますので、開始と終了時にサインをもらって下さい。この専用用紙に記載してもらい、ギルドに提出していただければ依頼終了処理と報酬をお支払します。後の詳細な説明は依頼担当者から直接お聞き下さい。」

僕は仮認証と専用用紙を受け取り、お姉さんにお礼を言ってギルドを後にした。

集合場所は、環境整備課の施設の一つでアオに案内してもらった。そこには、すでに様々な年齢の人達と担当者らしい制服を着た男性が居た。その人に専用用紙と仮認証をみせるとあっさりとメンバーに組み込まれた。

「それでは、どれを担当してもらいましょうか。」

すでに各清掃活動に別れているメンバーを見渡しながら、お兄さんは考える。

僕は初めて見る機械に興味をひかれていた。小さな五歳くらいから十歳くらいの子たちが空中に浮く台車のような物を囲むようにして立っている。それを不思議そうに見ていると、担当者のお兄さんが説明するよりも早く、子供たちのリーダーらしき男の子が教えてくれる。

「なんだ、お兄ちゃんは大きいのに、この清掃分別機を知らないのかあ。」

「うん。この街に来たばかりで、何にも知らないんだけど。よかったら、教えてくれないかなあ。」

僕の言葉に得意そうに男の子は笑う。

「そっか。それじゃあ、仕方がないか。それなら、オレたちが色々教えてやるよ。」

その言葉に担当者のお兄さんが苦笑しながら、

「それじゃあ、この子たちと一緒に担当にしてもいいのかな？」

それに了承すると、専用用紙に担当地区と活動内容を記載して、僕に返却してくれる。

「じゃあ、ある程度終わったらココに戻ってきて下さい。機具の返却と情報により、報酬価格が多少変わりますので。それでは、皆さん。本日も宜しくお願い致します。」

それを合図に、それぞれが担当の地区へと向かったのだった。

「オレたちの担当地区は公園付近だから、2番目に稼げる場所なんだ。」

街の住民が憩いの場として活用する結構広い公園らしく。随所に雑木林や簡易トイレに飲食店なども存在する。

「それで、オレたちが回収するのは飲食する時に使った後の器などが中心だな。」

この世界では、使い捨てという理念はあるがそれをゴミとしてではなく、再利用可能な資源としてみなすらしく、器は主に土器を使用している。

それを残飯と器と分別し、前者は肥料の材料とし、後者は分別機の洗浄機能により綺麗にした後、粉々に砕いて改めて土器の材料として使われるそうだ。

「へえ、そうすると食べ終わった後はその場に残すの？」

僕の答えに、男の子は首を振って否定する。

「本当は、各所にある分別機に入れるんだけど。マナーの悪い連中がそこら辺に捨てちまうんだよ。オレらはそれを回収して、掃除するのがお仕事。後は、不審者や物を見つけたらすぐに通信機を使って知らせて、その場から逃げる。」

なるほど。街の清掃と兼任して監視活動もするのか。確かに、これなら問題が発生する前に対策や次善策を取ることが可能だし、街の防犯としてはかなり有効だ。

「不審者や物の見分け方ってあるの？」

「うーん？特に無いかなあ。まあ、オレたちが見て不思議に思ったり、見たことのない奴を見つけたりしたら報告する感じかなあ。」

その言葉に他の子たちも頷く。

「えとねえ。何でもいいみたいだよ。通信機を使う時は、変な人や動物に襲われそうになった時で、普段は画面にある地図に気付いた地点を押すの。」

小さな女の子がそう言うと、専用用紙と同じ大きさと厚さの端末を見せてくれる。そこには、担当地区の簡易地図が表示されていて、その一つを指で押すと子供でもわかるように簡易の風景画が出てきた。

「ここのボタンを押して、見つけた変なものがあつた場所を押すと色が変わるの。」

「それで、後はこのスピーカーの形をしたボタンを押して見たままを言う。すると後で係りの人が確認するらしいぜ。」

他の子たちも一緒に説明してくれる。

「まあ、滅多にないことだけど。オレたちがよく見つける不審者といえば、酔っぱらいが大半かなあ。」

男の子の言葉に他の子たちも頷く。

「そんじゃあ、後は実践で覚えるということできつさとやろうぜえ。」

「……おお……う！」「」

他の子たちと一緒に返事をする蒼溟。

それから、子供たちと一緒に頑張ってゴミ拾いをして雑談をする。時折、お店の人から飲み物をもらったり、新作のお菓子を試食させてもらったりしながら和気あいあいと作業するのだった。

ちなみに、各所におかれた分別機の中身は他のメンバーが回収と交換を行うらしい。実によく出来た仕組みだと思った。

初めてのお仕事が終わる頃には、すっかり子供たちの仲間として

認識されて僕とアオは友達を増やしていくのだった。

「それじゃあ、今日は街の子供たちと仲良くなったのねえ。」

夕食時にジンの奥さん、フィランと侍女のサカエさんと楽しく雑談をする。

「うん。でも、ここは不思議なところだねえ。技術が発達していかと思つたら、見たことのないような高度な機械もあつてビックリした。」

僕の言葉にちよつと考える仕草をするフィラン。

「そうですねえ。ラント国は、新興国でもありますから国としての歴史は他の国々よりもありません。その為、技術の大半は他の国から得たものです。」

ラント国は巨大なクレーターの内部にあるようで、周囲は大きな山脈によつて他国と隔たれている。

「様々な高度な技術を擁する組織として“協会”が有名ですね。」

「きょうかい？ 宗教かなにかの。」

僕の言葉にサカエさんが教えてくれる。

「いいえ。先史文明時代の技術や知識を管理する組織で協同組合としての意味で“協会”と称されている団体です。」

この“協会”は様々なギルドの総括であり、どの国にも属さない組織だそうだ。どこにも属さない代わりに災害や戦時中の医療には無償奉仕することを確約しているとのこと。

「特殊な組織でもありますから、管理や継承などに際しての人材育成として“学園都市”にも関与しているらしいですよ。」

その言葉に首を傾げる僕に、意外にもアオが答えてくれた。

学園都市とは、陸地の孤島とも言われる場所にあり、各国からの入学を許可している総合教育施設とのこと。当然ながら、各国で不可侵協定を結んでいて、それは反故にしようとする世界中を敵に

回しかねないらしい。

「アオは、そこに行ったことあるの？」

僕の問いに、曖昧な返事をするアオ。

インフィニティとしての能力として、別の個体が学園都市に住んでいるようだ。その知識を共有していることから、様々な情報を教えてくれた様子。

「まあ、その他には女神信仰のある大国や古代帝国の末裔を擁する国などが高度な技術を有しているとの話を行商の方から聞いたことがありますねえ。」

サカエさんの言葉に僕はワクワクしてくる。

ラント国のルジアードという街だけでも僕の想像を超えているのに、それ以上に不思議そうな国々の話に興味をそそられてしまう。

ジンはそんな国々を旅してきたのだろうか？今度、機会があったら聞いてみたいなあ。

2 - 11 母親からの言伝

探求者ギルドで個人情報採取されてから数日間、僕の日常は比較的おだやかに過ぎていた。

ギルドの仮認証で、様々な低ランクの依頼を仲良くなった街の子供たちとこなしていく。その際に、子供たちを経由して色々な年齢の人達と知り合った。街の清掃活動を始め、個人の邸宅での雑務では子供たちの親御さんや近所の人達。さらには、そこから紹介されて仮認証では受けられないはずの職人さんたちのお手伝いなど多岐^{たき}に及んだ。

「おはよう、アオ。」

早朝、ジンの屋敷の庭で軽く鍛練をこなすのが最近の日課。やっぱり、身体はきちんと動かしておかないと何となく、居心地が悪いのだ。

「みゆ、みゃあ。」

おはよう、蒼溟^{そうめい}。朝食が出来たって、サカエが呼んでいたよ。と教えてくれる薄青色の球体生物。この街、ルジアードに来てからアオは僕と同じように食物を摂取している。

どこに口があるのだろうか？と思っているのだが、ジッと観察してみても未だに不明だ。何故なら、アオがいただきますと言ってから見ても気付くと食べ物が消えているのだ。一度だけ、アオ自身にどうやって食べているのか聞いてみたら。

いや〜ん。蒼溟のエッチ！

器用に頬？を赤く染めながら答えられた時には、どう答えたらいいのか真剣に悩んでしまった。

居間に行くとすでにジンの奥さん、フィランと侍女のサカエさんが待っていてくれた。

「おはようございます。」

僕が挨拶すると二人はにこやかに挨拶してくる。

「おはよう、蒼溟。」

「おはようございます。蒼溟様、インフィニティ様。」

それから、四人？で和やかな雰囲気の中で朝食を取る。侍女であるサカエさんは、本来であれば主人であるフィランたちとは一緒に食事を取ることはしない。だが、長年の勤務態度に家族同然な関係から共に取ることになっているのだ。

「フィラン、ジンはまだ帰ってこれないの？」

義理とはいえ母親である彼女を呼び捨てにすることに当初とまどっていた蒼溟だが、父親代わりのジンを呼び捨てにしていることから論^さされて今では普通に呼べるようになった。

「ええ。今まで、仕事を放って遊んでいた罰ですから当分は王城で泊まり込みでしょうね。」

苦笑するフィラン。

ジンは実の息子であるリベルター兄さんに職場へと連行されてから一度も帰宅していない。そして、リベルター兄さんも無理やり勝ち取った連休を“趣味人の集い” 国営商店街にある“魔工術式研究会”の人達に知られてから、色々な集いの会に強制参加させられているようで、あれから姿を見ていない。

「そういえば、フェリシダーはどうしているの？」

ジンの孫娘で養女でもあるリベルター兄さんの実の娘。他にも兄弟がいるようなのだが、まだ顔を見た事が無い。

「ああ、あの子は職場の方に向いているようですよ。」

王宮の近衛師団という花形部隊に所属するフェリシダーは、ジンと違って真面目な勤務態度から長期休暇をもらっているはずなのだが……。

「フェリシダーお嬢様は、後宮にいるパシエンテ様のお気に入りですから。お話相手として出向いていらっしやるようですよ。」

この国の第一王女レイルの妹である第二王女パシエンテは、生ま

れた時から病弱で後宮の外に出たことが無いそう。その為、容姿や性格などの様子は噂話か憶測でしか知らない国民が大半で、深窓の令嬢として認知されている。

「そっかあ。三人とも大変そうだねえ。」

しみじみと呟く僕の姿をフィランとサカエさん、アオが苦笑して見つめる。

蒼溟は気付いていない様子だが、一番忙しく働いているのは彼だろう。低ランクの依頼とはいえ、短期間でこなした依頼の数々は常人を遥かに超える量であり、その質は徐々に高度になりつつあった。しかも、関わった人々がその仕事内容に満足を覚えるほどに丁寧かつ短時間でこなしていく。今や、この街で蒼溟を知らない住民はいないのではないのかと思われる勢いだった。

「すみませーん。宅配ギルドですけど、こちらに蒼溟・東雲さまはいらっしやいますでしょうか？」

朝食を終えて、まったりしていると玄関から男性の声が聞こえてきた。それに応えてサカエさんが居間を出て行く。

すでに他の侍女が対応していたようで、すぐに小さな荷物とカードを持ってサカエさんは僕に手渡してくれた。

「どうやら、探求者ギルドからのようですが。」

カードを見ると差出人と受取人の名前が記載されていた。そこには、確かに探求者ギルドと代表者らしき名前が書かれている。それをフィランが確認してくれた。

「珍しいですねえ。登録準備期間の者に対してギルドマスターから書簡が届くなんて。異邦人だからという理由にしても、ほぼ毎日ギルドに出向いているのですから直接要件を伝えればよろしいですね。」

その言葉に首を傾げながら、僕は小さな箱を開封する。その中には水晶のような綺麗な丸い石が入っていた。それを手に取り、不思議そうに見つめているとサカエさんが説明してくれた。

「それは、紙による書簡とは別に使用されるもので“伝晶石”^{でんしょうせき}と呼ばれるものです。専用の機械により、相手の映像と音声による伝令を送ることが可能です。一般的には王侯貴族の方々が好んで使用しますが、商人や裕福な家柄の方たちが遠方の親戚や知人に送ることもあります。」

紙による伝令は不特定多数の者に見られてしまう可能性があるため、この水晶のような魔工術式で作成されたものが重宝されるそう
だ。

「それにしても、一体なんだろう？」

探求者ギルドのマスターからの書簡なんて、その要件がさっぱり想像つかない。

フィランから専用の機械を受け取り、伝晶石を設置する。続いて、本人確認のための認証画面へ手を置く。すると、伝晶石が淡く光り、空中に再生するかの問いかけに「はい」を選ぶ。その後、伝晶石の表面に幾つかの光の筋が走り、映像が再生され始めた。

なんだが、ビデオレターみたいだなあ。

僕は映像を眺めながら、そんな事を考えていた。内容は、当たり障りのない挨拶から始まって、僕がギルドで採取された個人情報について幾つか質問をしたいから向こうが指定した日時に来てほしいという連絡事項だった。

「何か、問題でもあったのでしょうか。」

サカエさんが心配そうに呟く。

「よかったら、私も一緒に行きましょうか？」

フィランはジンやリベルター、フェリシダーの三人がいない今、蒼溟を守るために自らついて行こうと提案する。

「大丈夫だよ。例え何かあったとしてもどうにかなると思う。それに、アオもいるしね。」

だが、それを蒼溟は微笑みながら拒否した。アオも同意するように上下に回転するように頷く。

「そうですか。何か心配な事や不安に思うことがあったら、遠慮せ

ずに相談して下さいね。」

フィランの言葉に素直に頷き、いつものように低ランク依頼を受けるためにギルドへと向かった。

翌日、指定された時間に探求者ギルドへと出向いた蒼溟を案内してくれたのは、登録所の受け付けのお姉さんだった。ここ数日の低ランク依頼の受諾は、仮認証を使用しているので通常の受諾方法とは異なり、この登録所で受けていたのだ。その為、僅かな時間ですっかり顔見知りとなったのだ。

「蒼溟さまはスゴイですねえ。まだ、仮認証中にも関わらず数多くの依頼をこなし、ギルドマスターのお一人と面会までなされるのですから。」

営業スマイルとは違う、素の感情で微笑んでくれるお姉さん。最近では、時間があれば雑談をするほどまで仲良くなった。

「そうですか？低ランクばかりですし、僕一人で頑張ったわけでもないですから。」

謙遜した言葉・・・というよりも、本心からの言葉で答える少年の様子にお姉さんは笑顔で言う。

「それでも”ですよ。探求者ギルドに来られる方々の多くは、華やかな討伐依頼や報酬の多い高ランク依頼を選びがちです。そんな中で、低ランク依頼であっても適当にではなく、きちんと依頼者の要望をお聞きして丁寧に取り組むということは誇っても良いことだと私は思いますよ。」

その言葉に、自分自身を認めてもらったように感じた蒼溟は照れたように頬をうつすらと赤らめるのだった。

和やかな様子で案内された室内には、すでに一人の男性が居た。

歴戦の勇者といった雰囲気、逞しい体躯。小麦色の髪はボサボサでありながらも、不思議と野性味を感じさせて逆に男の魅力を増

す要因となっていた。無骨そうな手は小刀を片手に何かを丁寧に削っているところであった。

「……アクレオ様。仕事中に趣味を優先させないで下さい。」

お姉さんは冷めた視線というよりも、突き刺さるような冷徹な眼差しで男性に注意した。

「んっ？おお、もうそんな時間だったか。」

その眼差しを一切気にしない様子で男性は呑気に答える。

「いやあ。いけないとは思いつつも、締切間近であ。……スマ
ン。」

素直に頭を下げる。

そんな姿にため息をつきながらも、お姉さんは僕に男性を紹介してくれる。

「見苦しいお姿をさらしているアレが、ギルドマスターの一人であるアクレオ様です。職務態度はあんな様子ではありますが、実力は確かですのでご安心ください。」

辛辣な紹介に、アクレオがブーブーと不満を口にする。

「そりゃあ、あんまりな紹介の仕方じゃないか。実の娘とは言え、もう少し父親に敬意を払ってもバチは当たらんと思うぞ？」

「私はあなた様を父親とは未だに認めた覚えはございませんが。ア・ク・レ・オ・様？」

娘からの営業スマイル付きの冷たい答えにアクレオは哀愁を漂わせながら机上に“の”の字を書くのだった。

「そんな事よりも、お客様をお待たせしたままですよ。」

娘の叱責にあっさりと立ち直ると室内にある応接場所へと移動し、お姉さんは室内にある給水場所でお茶の準備を始めた。

「悪いな。ちよつと、悪ふざけが過ぎたようだ。」

「いえ、気にしないで下さい。」

アクレオの謝罪をあっさりと受け取ると、彼は幾つかの書類を広げた。

「さて、伝晶石で伝えたように尋ねたいことがあるのだが……。

まあ、そう難しい事ではない。ジンから聞いているが蒼溟どのは異邦人だそうだな。それに対して、幾つかの確認作業と忠告といったところだ。」

「確認といえますと？」

「出身地の確認や家族構成。その他の備考欄がこちらの世界ではなく、蒼溟どの達の文字で表示されてしまうので本人に確認してもらうのが通例なのだが。その他にも、蒼溟どのといつも一緒に居るインフィニティ殿にも聞きたいことがあるのでな。」

そう言つと、僕の肩辺りに居るアオを見る。その視線にアオとはとばけた様子で瞬きをするのであった。

僕はアクレオさんから書類を受け取ると初めて自分の個人情報を確認するのだった。出身地は“東雲の村”となっていた。詳しい地名などが一切書かれていないのが、少し残念だ。その他に家族構成は、人名ではなく。父・母・姉・兄・自分と書かれている。

姉？・・・あつ！いたいた。

一瞬、腹違いの湊兄さんみなとと同居？同棲？している婚約者である姉さんたちを思い出してしまったが、兄さんと同じ母親から生まれた姉さんが一人いた。僕が村に住み始めてから年に数回しか会った事が無いくらい忙しい人みたいだけど・・・面白い姉でもある。

特殊技能のところには何故か不思議なマークが記載されていた。

「あのアクレオさん。このマークは一体なんでしょうか？」

僕の質問にアクレオさんはアオを見つめる。

「それは、こちらにも訊ねたい部分でもあるのですよ。このマークはインフィニティ殿が記入したものではありませんか？」

その問いにアオはあっさりと、そうだよ。と答える。

「それでは、一体どのような特殊技能なのでしょうか？それと、これは開示制限した方がよろしいでしょうか。」

それに対してアオは情報開示制限するようにと指示して、能力に關しては内緒と答える。

「やれやれ。蒼溟どのもとんでもない方に氣に入られているねえ。」

正直に言つて、インフィニティ殿がこのように個人に深く関わるなんて思いもしなかったよ。」

頭を掻きながら苦笑するアクレオさん。僕には判断できなかった為に曖昧に苦笑するにとどめて書類の続きを確認していく。

最後の備考欄を見た瞬間に、僕は絶句した。

備考欄：母親からの言伝。

蒼溟。成人の儀式完了、おめでとう♪！（^^）！

こちらは、みんな元気にしているから気にせずに思ったままに行動しなさい。但し、自分の不始末は自分で処理なさいね。それでは頑張りになさい d（- -）

ああ、言い忘れたけど。立派になるまでは帰らなくて良いからね♪

（ω）ノシ

お嫁さんを連れて来れるくらいになるまでは他所で頑張んなさい。父さんと母さんは久々に新婚気分で旅行にでも行つてくるから、帰つてきても面倒みれないし、湊くん達の所にいつまでもお邪魔しているとおその仲が進展しないから邪魔しちゃだめよ？（^ー^）

それじゃあ、バイバイ♪（^ー^）／

「・・・何、これ？」

ふつふつとこみ上げてくる怒りに書類を持つ手がフルフルと震える。どうやってココに記載できたのかも、いつの間に儀式が終わり成人していたのかも、それらがどうでもいいように感じる。

これが事実なら、僕がアオと出会った遺跡の前夜に聞いた母親の声は夢ではなく。それどころか、この状況を作った要因は自分の実母に間違いなくて、それを行った理由は後半に書かれた本音の部分で間違いない。

「・・・ふつふつ・・・絶対に戻つてやる。」

この行為が獅子の子落としとか、可愛い子には旅をさせよとか、

諺を元に行つたことだとしてもだ。それらは、子供の成長を願う行為であつて、育児放棄いくじほうきまがいの冗談で放り出すことでは断じてないだろう。

「あの母親ならやる。冗談を本気で言う村の性質をモロに体现している、あの母親なら。」

手にした書類をいつの間にかグシャグシャに握り潰し。暗い眼差しと不気味な笑いをこぼす蒼溟に、触らぬ神に祟りたたなしと言わんばかりに遠巻きに移動したアクレオとアオは小声で必要な質疑と確認を済ませていくのだった。

ちなみに、お茶を入れたお姉さんは遠巻きにする一人と一匹にお茶を出すと蒼溟の斜め前に座り、彼に入れたはずのお茶を飲みながら一人くつろぐのだった。

2 - 12 八つ当たりとも言っ

蒼溟^{そうめい}は、普段であればしないであろう行動。大事な書類をグシャに握り潰したまま一時的な激情をやり過^{しま}ごし、そのまま思索^{しぎく}に入る。

母親からの言伝を要約すると「帰ってくるな」という事になる。それは、帰る方法があるということ。

それなら、その方法は最初に目を覚ました遺跡らしきものに関連するものだろうか？

遺跡自体は地中深くに存在するものなので、実際に確認しに行くにはアオたちに協力してもらわなければならないだろう。その前にその遺跡に関連する情報を収集するのも一つの手である。

登録所の受け付け嬢であり、ギルドマスターの娘…本人は否定中…でもあるお姉さんこと、サウラは一人で悶々（もんもん）と考えている蒼溟を静かに観察していた。

ふう〜ん、騷^{しっせ}のゆきとどいた愛玩動物みたいに思っていたけど。

蒼溟君も一応、男の子でしたか・・・。

それにしても、純真無垢と言った感じに見えるけど、何故か私の勘では当てはまらないように思えるのよねえ。何故かしら？

小首を傾げながらお茶を飲む。そして、サウラは内心である事を決定した。

そんな二人の心中など分らないギルドマスターのアクレオは、インフィニティのアオと一緒にしばしお茶を飲みながら様子^{ようす}を窺^{うかが}いつつ、頃合を見計らっていた。

「インフィニティ殿、そろそろ大丈夫だと思いますか？」

「みゆ、みゆみゆ。」

多分、大丈夫だと思います。と何故か敬語になる一人と一匹は、

二人に声をかけることにした。

「あゝ、蒼溟くん。書類の方は無事に済んだから、認証ダグとギルドカードを渡しておこう。事前に説明してあるとは思いが、失くさないように気をつけるように。」

アクレオの言葉に、蒼溟は現実に戻り慌ててお礼の言葉と共に受け取る。

「みゆ、みゃ。」

これで、蒼溟も正式なギルドメンバーだね。というアオの言葉に蒼溟は嬉しそうに微笑んだ。

母親の言伝に対して思う事は多々あるが、こうして見知らぬ世界で自分の存在証明を手にしたことに対して嬉しさがこみ上げる。どこの生まれかも分からない不審者な自分を受け入れ、家族と言ってくれたアルシュや魔の森のヒトたちに、ジンの家族。そして、そんな自分を社会の一部として受け入れてくれたラント国とその一部の住民たちに僕は感謝の気持ちでいっぱいになった。

僕は、ココに居てもいいんだ・・・。

この世界の異物として排除されるのではなく、異なりながらも世界の一員として受け入れられた確かな証^{あかし}の一つとして、初めて実感できる物を手に入れた気持ちだった。

そんな蒼溟の感動に水をさすようにアクレオが突然・・・

「オレの仕事は終わったあー！」

課題が終わった子供のような笑顔で歓声を上げる。

「あ、忘れていた。ダンジョンを探索するならギルドの担当職員について来てもらえよ。」

依頼の際には、安全と効率の面からギルドメンバーでパーティを組むの通常なのだが、低ランクのうちは参加させてくれるパーティが少ないとのこと。

その為、ある程度の戦闘経験を得るまでは、補佐としてギルドの職員がついて来てくれる制度が設けられている。これは、安全面と防犯、それにダンジョン内でのマナーの説明も兼ねているために、初回は必ず一緒に探索しなければいけないらしい。その後は、本人が職員に申し出れば回数制限はあるが一緒に来てくれる。

「担当者は、ギルドの職員内で決められる。依頼受諾の端末に表示されるから、そこで確認して来い。」

「そんなじゃあ、頑張れよぉ。と気楽に挨拶するギルドマスターの姿を横目にサウラは蒼溟に微笑みながら

「蒼溟さまの担当は私、サウラがさせていただきます。これから、宜しくお願い致しますね。」

その言葉に父親であるアクレオが驚愕の表情をする。そして次の瞬間・・・

「なあにい——ッ！！？そんな話は聞いていないぞっ！」

「言っておりませんし、たった今、決めた事ですわ。」

澄ました表情で答える娘にアクレオはさらに抗議する。

「ダメだ、ダメだぁ——！！それに、探索の担当になるには戦闘技能を習得した者だけだろう。お前はまだ、その資格を得ていなかったはず！」

娘の眼前に人差し指を突きつけながら言うと、サウラは営業スマイルと冷笑を混ぜたような冷たい笑顔を向けながら、その指をへし折った。

「ッ！？」

「もた悶えながらも方術と魔術を駆使した独自の術で治療を行うアクレオに対して

「残念でしたね。私はその資格も習得済みですので一切、問題はありません。それに、担当の選別については支部長の方にすでに連絡して承認を受けております。」

蒼溟が悶々としている間に探索補佐になることを決めたサウラは、職員専用の端末からすでに希望を提出、速攻で受諾と書類関連を端

末上ではあるが済ませてしまったのだ。

「痛つゝ。回復力が通常以上とは言え、痛覚はあるのだから手加減くらいしなさい。」

へし折られたはずの指はすでに完治しているが、痛みは残っているのか手を振りながらも娘に言うが、その本人は気にもしていない様子だった。

「あら、きちんと手加減しましたよ？トカゲ並に図太く無神経な方にはそれくらいしなくては、理解してもらえないですから。」

場の空気を読まずに自分の事を優先した父親の態度とぶしつけに人を指さす態度にイラツとした彼女は容赦なく、しつけることにしたのだ。

「オレがトカゲなら娘のお前はトカゲもどきになるんだぞ！」

「あら？私はアクレオ様と血縁関係になった覚えもなければ、トカゲのような方と親睦を深める気もありませんわ。」

あえて朗らかに笑いながら言い切る娘に対して、父親はちよつと涙目になっていた。

「ううゝ、母さん。娘が冷たいよおゝゝ。」

そんな父親を完全無視して、サウラは自分とアオ、蒼溟のお茶を入れなおして今後について話を進めるのであった。

ギルド内の特定ダンジョンの入口前には、蒼溟とインフィニティのアオ、それに魔の森から付いてきてくれた毛玉のようなレーヌ族のショウが居た。

「なんで、こうなったんだらう？」

小首を傾げながら不思議そうにつぶやく蒼溟にアオは同情するように

「みゅゝう」

あきらめる、物事は往々（おうおう）にして理不尽なものだ。と

慰めにもならない言葉をくれる。

そんな蒼溟たちを余所に、簡易カウンターの所では戦闘補佐としてサウラと何故かアクレオがついて来ていて、探索の許可受領作業をしていた。

「アクレオ様。ご自分のお仕事が終わったのなら、ご趣味の“ふいぎあ”作成をなされてはいいかがですか。」

言外について来るな。という娘に対して、

「ふむ。完成度の高い作品を作るにはまず、作成者の心身を万全にしないてはならないからな。その為に、心配事を減らす意味でも気晴らしという意味でも、お前たちについて行くのは当然の事だッ！

！」
力説する父親の姿に、もの凄く嫌そうな顔をしてやるが一切、気にする様子がない。

「それなら、お一人で行って下さい。」

「それでは意味が無い。」

「邪魔です。」

「なあに、前途ある若者の手伝いをするのもギルドマスターの仕事の内だろう。」

「……蒼溟さま、それではダンジョン搜索に行きましょうか。装備などは大丈夫ですか？怪我をしたり、無理だと思ったりしたら、ご遠慮なく私に言って下さいね。」

白々しく言うアクレオを、サウラは居ないものとして扱うことにしたようだ。

「うむ。今回は、オレもついて行くからな。蒼溟どのをジックリと観察させてもらうので、遠慮せずにドンドン進んで構わんぞ。」

凄みのある笑顔で蒼溟に近づくアクレオ。

えーと、それは……リタイア不可……という事でしょうか？

怯む蒼溟に更に近付き、サウラに聞こえない小声で

「娘と二人きりになりたいなら、オレを納得させることだな……。許可するかどうかは、また別問題とさせてもらうが。」

至近距離でニヤリと極悪な笑いをするアクレオに、蒼溟は内心で・
・遠慮させていただきたいのですが・・と答えていたが、声に出す
勇氣はなかった。

ダンジョンの低下層には、低ランクの探求者たちが装備や蒼溟の
ような新米に注意点の確認をするための大きな空間が設けられてい
る。

その大広間には当然、高ランクの者たちも居て通り過ぎて行こう
とする蒼溟たちをそれとなく観察していた。

そんな中で、アクレオは久々の戦闘に対しての高揚感と個人的な
感情から他を圧するほどの戦意を放ちながら歩く。

・・・ふむ。オレの戦意を感じながらもそれに引きずられること
なく、平常心でいられるとは・・これは、なかなか有望だな。ジ
ンが目をつけるだけの事はある。

アクレオの隠す気の無い戦意に引きずられて周囲の探求者たちが
不穏な気を発する中で、熟練組は平静を保ちながらもサウラの動作
に注目していた。

彼女は戦闘経験がアクレオほど豊富ではないが、戦闘鍛錬につい
ては他の探求者たちよりもかなり充実したものを受けている。その
ため、その所作は達人級と称しても問題ないくらいなのだ。

そんな高レベルなパーティの中に居ても蒼溟の所作や表情は飄々
(ひょうひょう)としており、一切の気負いもなければ、達人たち
のように洗礼され過ぎた挙動をするわけでもなかった。ともすれば、
今から行く場所の意味が分かっているのか尋ねなくなるくらい普段
とおりだった。

「蒼溟どのは、剣などの刃物を扱ったことがないのか？」

アクレオは、彼が手にもつ武器を見ながら聞く。

蒼溟が選んだ武器は、地面から彼の耳辺りまでの長さの棒で、両

端には石突きとして鉄のようなもので丸く加工してあるだけだ。防具は一切しておらず、両肩にはインフィニティのアオとレーヌ族のシユンが座っている。軽装どころか、普段着だったりする。

「いえ、使えますけど。なかなか、気に入る物がなかったので、コレにしました。」

平然と答える蒼溟に、サウラも心中を察することが出来ずに戸惑った表情をする。

まあ、本人が良いのなら別に気にする必要もないか。

アクレオはあっさりと、そう割り切るとサクサクと低下層を通り過ぎて、手ごたえのありそうな「魔物」がいる階層に向かうのであった。

「オラオラ——ッ！」

幾つかの下層を通り過ぎ、時にはワザと蒼溟に「魔物」が向かうように仕向けていたアクレオだったが、それらを蒼溟が難なく処理していくうちに戦闘に夢中になり始めていた。

「おう、蒼溟。そっちに数匹いったぞお。」

「魔物」の群れに囲まれながらも楽しそうに戦うアクレオから動物のサイに似た「魔物」が蒼溟に向かって突撃してきた。

蒼溟は突進してきた一匹の頭部にそえるように棒を当てて横に避けると同時に、その体格からは想像出来ない強烈な横蹴りを喰らわせる。

横蹴りを喰らった「魔物」は並走するもう一匹に当たり、共にバランスを崩し、その後方から走ってきていた他の「魔物」を巻き込み横転する。その隙に蒼溟が石突きによる強烈な打撃で彼らの弱点であるクリスタルを破壊していく。

クリスタル破壊と同時にガラスが砕けるような音と共に「魔物」はその姿を霧散させ、その場には魔鉱石が残される。それをレーヌ

族のシュンが固有魔術の転移により、素早く回収し、独自の圧縮空間へとしまう。

それらの一連の作業をサウラはアオと共に後方で見学していた。

「なんだか、私がいる意味が無いわね。」

「みゆ」

高みの見物といきましょう。と言いつつアオは、薄青色の球体を発光させつつ辺りを照らす役目をしていた。

戦闘区域の上部にはサウラが魔術により照明をしているが、それ以外は時々上空付近を飛ぶ「魔物」に小さな氷塊をぶつけて落としているくらいだった。

「それにしても。アクレオ様が「魔物」を圧倒するのは理解できるけど・・・蒼溟さまも負けず劣らずの圧勝ですねえ。」

現在の下層は決して楽なところではない。すでに低ランク向けの階層など通り過ぎて、中ランクと高ランクの間くらい。その差異は「魔物」の使用する魔術によるというかなり曖昧なランク付けでもある。

「おう、終わったかあ。」

アクレオが上機嫌で蒼溟に聞く。すでに幾つかの戦闘をこなすうちに、アクレオは蒼溟と共に戦える者として認めると同時に呼び捨てにしていた。

「はい、アクレオさん。」

戦闘後とは思えない平然とした態度。アクレオはそんな蒼溟の姿に心強さと一抹の不安を感じてはいたが、特に気にしないようにした。

「お二方とも。そろそろ、戻りませんか？」

サウラの問いかけに、両者とも顔を見合わせる。

「心身ともに、よい運動になったはずです。これ以上は、他の探求者の方々の邪魔になりますし、何よりも初回での探索時間をすでに超過しています。」

アクレオと蒼溟の戦闘力が高すぎるためなのか、どの階層でも「

「魔物」を必要以上に集め過ぎて、その巻き添えで他の探求者が怪我をするという場面が何回もあったのだ。

「ふむ。それなら、次回は街の外にしてみるか。蒼溟なら一切問題あるまい。」

「まだまだ、蒼溟について行くつもりのアクレオは勝手に予定を決めていく。」

「……アクレオ様は、ご自分のお仕事に専念して下さい。」

サウラが嫌そうな顔を見ると、逆にアクレオは楽しそうにする。

「これもオレの仕事だ。」

それから、三人は雑談しつつも、あえて転送装置を使用せずに徒歩で「魔物」を蹴散らしながら入口へと向かっていった。

そんなヒトの姿を見ながら、アオとシュンは内心で……一番の被害者は、こここの「魔物」ではないだろうか？……と思わずにはいられなかった。

幸いだったのは「魔物」に意思や感情がなかった事だろう。もし、彼らにそれらが備わっていたら口をそろえて「二度と来るなあ——

——ッ！！」と叫んだことだろうから。

2 - 13 親子ケンカの方

低下層の大広間で今回の探索で得た魔鉱石が小山となっていた。

通常では考えられないくらいのも量で様々な種類の魔鉱石を目の前そつめいにして蒼溟たちはちよつと反省していた。

「稼ぎ過ぎですね。」

サウラの言葉に、アクレオはとぼけた表情でそつぽを向き。蒼溟は少しうな垂れていた。

実は、サウラの「戻りませんか？」という発言の後に高レベルの「魔物」がどんなものかを見せてやりたいというアクレオの発言に更に数階下へと向かった後に徒歩で戻ったのだが・・・。

ここで戦闘に慣れた蒼溟がアクレオと共に「魔物」の集団へと突入それに、触発されたアクレオが更に暴走。

それに対抗するように「魔物」の数が増加。

それに対して逃走するとか、避けるとかの戦闘を回避する行動をとらずに殲滅せんめつした結果がこの多量な魔鉱石となったのだ。

「・・・「魔物」が時間経過と共に復活するとはいえ、こんなに短時間で討伐してしまつては他の探求者たちの稼ぎがなくなつてしまいます。」

「まあ、いいだろう。頻繁ひんぱんでは問題になるだろうが、今回だけの事だろうから。」

サウラの非難する言葉にアクレオは樂觀的な発言をする。

「そんなことをおっしゃるから、“破壊魔”とか“疫病神”とか言われるのですよ。」

それは、アクレオがギルドマスターになる前の時に囁ささやかれたあだ名だった。

その場の空気を読まずに武力のみで問題解決をしようとしたり、今回のように「魔物」を掃討してしまつて他の探求者たちの稼ぎを失くしたり、果ては他を圧するような気迫で反論を封じてしまうなど

の悪癖から付けられたものだ。^{あくへき}

「過ぎてしまった事をグチグチと言ったところで、時間は戻らん。そんな事より、コレどうする？」

「みんなで分けるんじゃないの？」

通常であればパーティに参加したメンバーで均等配分するのだが、今回のパーティは臨時で結成されたもの。

「私はギルドの規定により、無報酬でお願いします。」

サウラは戦闘補佐として参加しているが、初回は無料扱い。二回目以降はギルド職員個人に対しての報酬とギルドへ入れる手数料などで、半分は渡すのが通例である。

「オレも別にいらねえ。」

アクレオは勝手について来ただけなので、本人的にはいらんという言い分。

「通常であれば、ギルド職員の戦闘補佐により多少の稼ぎを行い。そのお金で装備を充実させていくのですが・・・。」

二回目以降に手数料が発生するのは、高レベルのギルド職員に頼りきりになるのを防ぐためでもある。数回による戦闘補佐により、自らのランクに合わせた階層で今後も稼いでいくのだが、蒼溟はそんな順序を軽く超えてしまっている。

「まあ、今回は特別という事で蒼溟の総取りでいいんじゃないか。ヒヨツ子への祝い金として遠慮なく貰っとけ。」

それでも、何だが悪い気がするのか蒼溟の表情は暗い。

「・・・それなら、そのうちの何割かをいただいても宜しいですか？次回はアクレオ様の・・・身勝手な・・・主張により街の外へ行くことになりますから。探索に必要な物を私の方で準備しておきます。」

「それは、申し訳ないような気もするのですが・・・。」

蒼溟の言葉にサウラはニツコリと笑う。

「いいいえ。こちらの方こそ、身勝手で無駄に体力の有り余った困った上司につき合わせてしまって、本当にすみません。」

あきらかにアクレオの事を指しながらも、あえて本人には言わず

に遠まわしに非難する。

「え、えつと……。そんな事は……。。」

蒼溟がフォローしようとする言葉を遮さへぎってさらに

「大人しくデスクワークをしていただければ良いのですが、頭の中まで筋肉で出来ているような方ですから。」

「おいっ！そこまで、言うことないだろう。」

「なんでしょうか、脳筋上司？……。もしくは、後先考えない無神経上司？」

「ムッ……。一度、聞いておきたいと思っていたのだが。何故、そこまでオレを否定というか拒否するんだ。」

本当に心当たりのないのか困惑した表情で問いかける実父を心底あきれた様子の娘、サウラはこれも良い機会だと考えて、その要因を教えることにした。

「そうですね。“英雄、色を好む”という言葉があるように、母以外の女性に恋愛感情を抱くことに対しては特に問題視はしておりません。」

アクレオは確かな武力と悪癖を持つてはいるが、魅力的な人物であることも事実。英雄と呼ぶにふさわしい業績も持っている。その為、数多くの女性が彼に魅了されるというのも理解できる。

「でも、自らが約束した事柄を破棄したことについては、私も母も許す気はありません。」

「約束？」

蒼溟の言葉にサウラは頷き、アクレオは心当たりを探そうと必死に記憶をあさる。

「例えば、関係を持った後に……。。」

サウラの母親は、かつて優秀な探求者であり、研究者でもあった。幾つかの依頼をこなす際にアクレオと出会い。二人は恋人となったのだが、その際にアクレオは婚姻の証として魔鉱石を使用したアクセサリーを贈ろうとしたことがあった。

「希少な魔鉱石を取りに、国外へと赴き。その後、数々の難事に遭

遇した結果、その約束を忘れ。思い出した頃には、数年が経っていました。」

その言葉に、思いだしたのかアクレオは冷や汗を流す。

「まあ、それも無事に難事を解決し、数年後とはいえ思い出したので許すことにした母でしたが、私を身籠り出産のときには立ち会うといった約束を反故にされた事については許す気はないそうですよ。」

それは、数年後に戻ったアクレオがサウラの母親に平謝りして恋人関係を修復して数ヶ月後のことだった。

「いや、アレはだなあ。かつての戦友仲間からの懇願で、仕方がなく出かけただけで。反故にしようとしたわけでは……。」

必死に言い訳をするアクレオに対して、サウラは無表情に答える
「ええ、それは仕方がないことでしょう。でも、アクレオ様。その依頼終了後に仲間たちと酒盛りをした後に、そこで出会った女性の依頼をホイホイと受け、さらに息子さんを授かったことに対しての明確な理由を教えてくださいませんか。」

何故、その事を知っている！？という驚愕の表情をするアクレオ。
「まあ、それらの要因から母は私に実父のことを教えずに片親で育ててくれました。私が実父の事を知ったのは成人してからですね。」
何か、言う事がありますか？と冷笑する娘に対して、父親は無言でうなだれた。

「このように、身勝手な上司ですので蒼溟さまも嫌だと思ったら、素直におしゃって下さって構いません。我慢は身体にも精神にも悪いことですから。」

ニツコリと笑いながら告げるサウラに無言でうなずくしか出来なかった蒼溟だった。

結局、魔鉱石の大半は蒼溟の稼ぎとなり、その内の良質な物は持

ち出すことにした。

「蒼溟、それをどうするんだ。」

散々、娘に叱られたアクレオだが、数分後には復活していた。

「以前、レイルから良質な魔鉱石を売って欲しいと言われたから持っていてこうと思って。」

「第一王女にか。・・・蒼溟、オレからの忠告だがな。もし、お前が世話になった女性がいるのなら、それをアクセサリーとかにして贈っておいた方がいいぞ。」

アクレオの忠告に不思議そうな顔をする蒼溟。

「さっきの話でもあるがな。約束を反故にしたオレが悪いのは当然ではあるが、実はサウラも知らない裏話がある。それをあいつに教えるつもりはないが、同じ男として言っておいてやろう。」

真剣な眼差しで蒼溟を両肩に手を添えてアクレオは重々しく告げる。

「女は常に男からの、特に惚れた奴からの褒め言葉や態度を欲しがるものだ。」

「えっと、お世話にはなっているけど、惚れたとかは・・・。」

蒼溟の反論に首をゆるく横に振りながら、

「恋愛感情だけではない。多少なりとも好意を持った相手にしか女は世話を焼こうとは思わない生き物だ。だから、世話になった相手がいるのなら年齢とか気にせずに誠意を見せておいた方が、後々の保身のためになるから。」

アクレオの瞳に心からの忠告であることを察した蒼溟はその迫力に押されながらも頷く。

「オレも・・・その事に早く気付いていたら・・・。」

視線を遠くに飛ばし、過ぎた時を思い起こすアクレオの姿は何とも言えない哀愁が漂っていた。

一体、アクレオの身に何が起こったのだろうか。ちょっと、気になった蒼溟だが、それを聞けば、自分にも何か良からぬ事が起こりそうな気がしてやめた。

「でも、アクセサリーと言ってもどんなものに？」

その言葉に現実に戻ったアクレオは、お薦めの宝飾店や国営商店街のお店を幾つか教えてくれた。

「まあ、ようするに誠意の一つとして贈るものだからな。装飾としてだけでなく、装備品としてお守りのようなものでもいいのさ。」

そう言って、魔鉱石の小山から更に幾つかを選び出し袋に詰めて渡してくれる。

「ほれ、これも持って行け。持ち出しについての認可と書類についてはオレがやっておいてやる。その変わりと言っては何だが……。」

蒼溟の耳元に顔を寄せて小声で

「悪いが、娘であるサウラとの接点としてお前を利用させてもらう。すまんが頼む。」

その言葉に蒼溟は微笑んで了承する。

色々と問題はあるみたいだけど、アクレオさんもサウラさんもお互いに気にかけているのなら、いつかその関係が修復されるかもしれないなあ……そうなって欲しいと思う。

ギルドを出た蒼溟は、そのまま国営商店街へと行き“魔工術式研究会”の建物へ向かう。

「んっ？お前さんは、確か……リベ坊の義弟の……蒼溟だったか？」

“大将”の言葉に蒼溟は微笑みながら頷き挨拶をする。

「どうした、何か用事か？」

「はい、実は……。」

レイルとの約束を話す。ついでにアクレオからの忠告に従ってアクセサリーにする事についても相談する。

「そうか。それなら、中身をちよっと見せてもらってもいいか？」

その言葉に、素直に応える蒼溟。

二人は事務所の机に魔鉱石を広げて選別していく。そのついでに“大将”は装備品として使えるように魔鉱石を加工する研究グループを呼んで、どんな付加効力ができるのか相談していくことにした。

それから数刻後。

「そんじゃあ。レイル様に譲る分はこっちに、加工する分はこいつ等に渡しておく。魔鉱石に対しての加工はできるが装飾関係については他でやってもらうのがいいだろう。」

“大将”の言葉にその場にいた全員が承諾する。

「お手数をお掛け致しますが、宜しく願います。」

丁寧にお辞儀しながら依頼する蒼溟に研究グループも笑顔で快諾してくれた。

「了解した。君はリベルター様の身内だし、なによりも女性に贈るものだろう？ 僕らも気合いを入れて作業させてもらうよ。」

「必要な物とか手伝いとかあったら、遠慮なく言って下さい。僕に出来ることなら何でもしますので。」

蒼溟の言葉に、その時には宜しく頼むよ。と答えて、それぞれの作業へと向かった。

「今日も色々あったねえ。」

ジンの屋敷へと戻り、自室でくつろぎながら言う蒼溟にアオも同意する。

「みゆ、みゆう？」

それで、アルシュとの連絡はどうする？と聞いてくるアオに蒼溟はちよつと悩む。

「どうしようか？ プレゼントが出来てから、連絡した方がいいのかな。それに・・・どうやって相手に渡せばいいんだろう。」

肝心な送る方法を考えていなかった事に気付く蒼溟。

「みゆ、みゃ、みゃ。」

それなら、レーヌ族のシュンの転移で送っても良いし、アルシュについてはアオが送ってあげもいいよ。と答えてくれる。

「アオが送ってくれるの？でも、どうやって。」

蒼溟の言葉にイタズラを思いついた子供のような雰囲気をもとうアオ。

「みゃ、みゃ。」

アルシュ以外には、伝晶石ひんしょうせきと一緒に贈れたばいいんじゃないかな。伝晶石だと、専用の機械が必要なのでは？」

ファンタスマ族の村にそういう物があるのだろうか？と心配する蒼溟にアオは平然と魔の森の宮殿に住む、執事のハーディは持っているはずだと教えてくれた。

「そうか、ハーディは以前、森の外に居たことがあると言っていたし、アルシュも持っているかもしれないよね。」

それから、蒼溟とアオはレーヌ族のダイには何を贈ろうか、料理長のスリールにはよく切れる包丁の方がいいのだろうか、等と他愛もない会話をしながら過ごすのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6977w/>

獣の従者

2011年12月24日13時46分発行